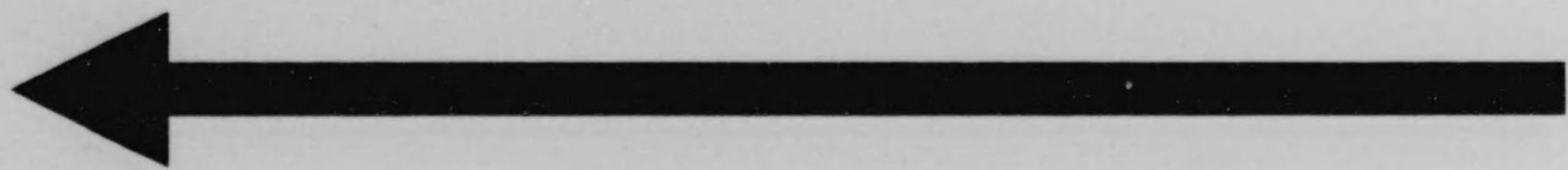


353
28



始



353-28v



國譯密教

經

軌



10 8.29

内交

國譯密教經軌第三

目次

- 一、國譯大毗盧遮那成佛神變加持經七卷……………塚本賢曉國譯……………一
- 一、國譯廣大儀軌三卷……………市橋本賢國譯……………二八九
- 一、國譯攝大儀軌三卷……………岡田契昌國譯……………三六七
- 一、國譯立法寺儀軌二卷……………阿部宥精國譯……………四四一
- 一、國譯青龍寺儀軌三卷……………網代智海國譯……………五一

乾二、三、縮開一、
 藏十二、卷六、七、
 (一) 入眞言門 七、眞
 言の固有りて、善提心
 の固有りて、住心に於
 安住す。此の品に於
 て眞言の教理を説
 く。
 (二) 以下經主を明
 示す。薄伽梵とは疏
 釋に本、地、身、新
 釋に、古、義、本、地、教
 主、持、身、に、依、る
 義、加、持、主、に、依、る
 中、に、薄、伽、梵、の、句、の
 此、を、以、て、教、主、と、な
 す。薄伽梵の句とな
 る。理法身あり、其
 の智法身を加持身
 とす。
 (三) 法界宮 是れ
 別に一處あるには
 あらず、目前の當
 相即ち法界宮な
 り、故に中邊無し
 といふ。
 (四) 以下處を明
 す。
 (五) 以下眷屬を明
 す。
 (六) 是等十九執金
 剛は十九無知に對
 す。執金剛とは修
 の智徳なり。

國譯大毗盧遮那成佛神變加持經卷一

(一) 入眞言門住心品第一

是の如く我聞く、一時(一)薄伽梵、如來、加持廣大金剛(二)法界宮に住したまふ、一切の
 持金剛者皆悉く集會せり。(三)如來の信解遊戯神變より生ずる大樓閣寶王は、高して中邊
 なく、諸の大妙寶王をもて種種に間飾し、菩薩の身を師子座と爲なす。(四)其金剛を名
 て、(五)虚空無垢執金剛・虚空遊歩執金剛・虚空生執金剛・被雜色衣執金剛・善行步執金
 剛・住一切法平等執金剛・哀愍無量衆生界執金剛・那羅延力執金剛・大那羅延力執金
 剛・妙執金剛・勝迅執金剛・無垢執金剛・刀迅執金剛・如來甲執金剛・如來句生執金剛・住
 無戲論執金剛・如來十力生執金剛・無垢眼執金剛・金剛手秘密主と曰ふ。是の如きを上
 首として、(六)十佛刹微塵數等の持金剛衆と俱なりき。及び(七)普賢菩薩、慈氏菩薩、妙
 吉祥菩薩、除一切蓋障菩薩等の、諸大菩薩に前後に圍繞せられて、而も法を演説し玉ふ。
 (八)所謂る、三時を越へたる如來の日加持の故に、(九)身語意平等句の法門なり。(一〇)時
 に彼の菩薩には、普賢を上首となし、諸の執金剛には秘密主を上首と爲す。(一一)毗盧

(七) 十佛刹微塵
數佛智の無量な
るを云ふ。十智力
不思議に約す。四
菩薩は佛の四徳を
表するなり。四
じて佛の所説の法
門を越へたるは三
時を越へたるは三
常恒三世を云ふ。
如來法身の三密を
歎する説なり。三
云云。已下は瑞相
の三身の説なり。
下は毘盧遮那法
の状態を明す。法
【以下二頁頭註】
(一) 毘盧遮那佛云
々大日如來の變化
身を示す。
(二) 又執金剛云
云。大日如來の等
流身を示す。等流
身は大日の所現な
り。
(三) 初發心云云。
十地の次第を顯示
し、此の生に滿足
は秘密を示す。是
れ教門の建立にし

て、實は自宗には
地位を立てず、十
地のみなり。佛地
も十地に攝す。尙
初地に佛地を攝す
るなり。
(四) 縁と業。縁は
煩惱業は其の所
作の善惡業なり。
心の善惡業生の
心に眼耳鼻舌身
耶の八識あり。阿
耶識はその第八阿
耶識をいふ。芽は
新たに生ずる菩提
心にして、種は本
來所有の菩提心な
り。
(五) 以下は本經の
本説にして、金剛
手の三句發問な
り。
(六) 一切智智。大
日如來、無量乘を
説く、所謂の遍一
切乘、自心成佛の教
なり。
(七) 一切智智。佛
の智慧なり。
(八) 密開道云云。
佛の説法を聞き苦
集滅道の因果の理
を達觀するもの

遮那如來加持の故に、身無盡莊嚴藏を奮迅示現し玉ふ。是の如く語意平等の無盡莊嚴藏を奮迅示現し玉へる。(二) 毗盧遮那佛の身、或は語、或は意より生ずるに非ず、一切處に起滅すること邊際不可得なり。而も毗盧遮那の一切の身業、一切の語業、一切の意業よりして、一切處と一切時とに有情界に於て眞言道句の法を宣説し玉ふ。(三) 又、執金剛、普賢、蓮花手菩薩等の像貌を現じて、普く十方に於て、眞言道清淨句の法を宣説し玉ふ。所謂の(四) 初發心より乃し十地に至るまで次第に此生に滿足す。(五) 縁と業とより生じて増長する有情類の(六) 業壽の種を除きて、復(七) 芽種生起することあり。
(七) 爾の時に執金剛秘密主、彼の衆會の中に於て、坐して佛に白して言さく、世尊、云何が如來應供正遍知、一切智智を得玉ふ、彼の(八) 一切智智を得て、無量の衆生の爲に廣演分布して、種種の趣と種種の性欲とに隨て、種種の方便道をもて、(九) 一切智智を宣説し玉ふ。或は(一〇) 聲聞乘道、或は緣覺乘道、或は大乘道、或は五通智道、或は願つて天に生じ、或は人中、及び龍、(一一) 夜叉、乾闥婆に生じ、乃至摩睺羅伽に生ずる法を説き玉ふ。若し衆生有つて佛をもて度すべき者には、即ち佛身を現し。或は聲聞の身を現し、或は緣覺の身を現し、或は菩薩の身、或は梵天の身、或は那羅延と

毗沙門の身、乃至摩睺羅伽、人と非人等の身をもて、各各に彼の言音に同じて種種の威儀に住し玉ふ。而も此の一切智智の道は一味なり。所謂の、如來の解脱味なり。世尊、譬へば虚空界の一切の分別を離れ、分別も無く無分別も無きが如く、是の如く一切智智も一切の分別を離れ、分別も無く無分別も無し。世尊、譬へば大地は一切衆生の依たるが如く、是の如く、一切智智も天人阿修羅の依たり。世尊、譬へば火界の一切の薪を焼くに厭き足ること無きが如く、是の如く、一切智智も、一切の無智の薪を焼くに厭き足ること無し。世尊、譬へば風界の一切の塵を除くが如く、是の如く、一切智智も、一切の諸の煩惱の塵を除き去る。世尊、喩へば水界は一切衆生之れに依て歡樂するが如く、是の如く、一切智智も、諸天人の利樂を爲す。世尊、是の如きの智慧は、何を以てか因と爲し、云何が根と爲し、云何んが究竟する。是の如く説き已つて、毗盧遮那佛、持金剛秘密主に告て言はく、善哉、善哉、執金剛、善哉、金剛手、汝吾に是の如きの義を問ふ。汝當に諦かに聽き、極て善く作意すべし。吾今之を説かんと。金剛手の言さく、是くの如し、世尊、願樂くは聞かんと欲ふ。佛の言はく、(一) 菩提心を因と爲し、大悲を根本と爲し、方便を究竟と爲す。(二) 秘密主、云何ん

緣覺は自身の生老病死の因起る十二因縁を觀じて人生を達觀するも、大乘道は自の爲め他の爲めに利益を計る佛の道、五通智道とは不可思議なる神力を得んことを以て此等の爲に說法するなり。
【以下三頁頭註】
○夜叉云云、譯して輕捷といふ、飛行の速なるもの、乾闥婆は天の樂神、摩睺羅伽は地龍なり。
○因と爲し云云、因と爲し、大日經の骨目なり、之を三句の間と云ふ。
【以下三頁頭註】
○菩提心を因とす云云、三句の答説なり。
○秘密主、金剛手菩薩を指す。
【以下四頁頭註】
○實の如く云云、下の悉地品に云く、摩訶薩の意處を説て曼荼羅と

が菩提とならば、謂はく(一)實の如く自心を知るなり。秘密主、是の阿耨多羅三藐三菩提は、乃至彼の法として少分も得べきこと有ること無し。何を以ての故に、虚空の相は是れ菩提なり、知解の者も無く、開曉のものも無し。何を以ての故に、菩提は無相なるが故に。秘密主、諸法は無相なり、謂く虚空の相なり。爾の時に金剛手、復佛に白して言さく、世尊、誰か一切智を尋求する。誰か菩提の爲に正覺を成ずる者ぞ。誰か彼の一切智智を發起すると。佛の言はく、秘密主、(二)自心に尋求なり、菩提なり、及び一切智なり。何を以ての故に、本性清淨なるが故に。(三)心は内に在らず、外に在らず、及び兩中間にも心不可得なり。秘密主、如來應正等覺は、青に非ず、黄に非ず、赤に非ず、白に非ず、紅紫に非ず、水精色に非ず、長に非ず、短に非ず、圓に非ず、方に非ず、明に非ず、暗に非ず、男に非ず、女に非ず、不男女に非ず。秘密主、心は欲界と同性に非ず、色界と同性に非ず。無色界と同性に非ず、天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人、非人趣と同性に非ず、秘密主、心は眼界に住せず。耳鼻舌身眼界に住せず。見に非ず、顯現に非ず。(四)何を以ての故に、虚空相の心は諸の分別と無分別とを離れたり。所以は何となれば、(五)性、虚空と同なれば

四

名く、諸の眞實の心住を了知すれば、果を成ずることを得と。
【以下三頁頭註】
○自心尋求一切衆生心の實相は、本際より來た常平是れ毘盧遮那の平等智身なり。
○心は内に在らず云云、以下菩提心を觀するにその執着なきを明す。
○何を以ての故に云云、これの執着なきを明す。
○情を遮す、但た情の一邊のみを説く、疏に釋して云く、此の如く諸相を離れずと、則ち表徳に明す。
○性云云、心と虚空と菩提は無二平等にして三種無二なるを示す。
【以下五頁頭註】
○心と虚空云云、心とは衆生の自心、虚空界とは大日の果徳なり、虚空界とは大日の果徳と爲すこと、無畏三藏の意なり。云何んが云

即ち心に於て同なり。性、心に於て同なれば、即ち菩提に同なり。是の如く秘密主、(一)心と虚空界と、菩提との三種無二なり。此等は悲を根本と爲して、方便波羅蜜を満足す。是の故に秘密主、我れ諸法を説くことは是の如し。彼の諸の菩薩衆をして、菩提心清淨にして其心を識知せしめんとなり。秘密主、若し族姓の男、族姓の女、菩提を識知せんと欲はば、當に是の如く自心を識知すべし。秘密主、(二)云何んが自ら心を知る。謂く、若くは分段、或は顯色、或は形色、或は境界、若くは色、若くは受想行識、若くは我、若くは我所、若くは能執、若くは所執、若くは清淨、若くは界、若くは處、乃至一切分段の中に求むるに得べからず。秘密主、此の菩薩の淨菩提心門を(三)初法明道と名く、菩薩此れに住して修學すれば、久く勤苦せずして便ち(四)除一切蓋障三昧を得るなり。若し此れを得つれば、則ち諸佛菩薩と同等に住して、當に(五)五神通を發し、無量の語言音陀羅尼を獲て、衆生の心行を知り、諸佛に護持せられ、生死に處すと雖も而も染著無く、法界の衆生の爲に勞倦を辭せず、(六)住無爲戒を成就し、邪見を離れ、正見に通達すべし。復次に秘密主、此の除一切蓋障に住する菩薩は、信解力の故に、久く勤修せずして一切の佛法を満足す。秘密主、要を以て之を言はば、是の善男子善女

し、或は地は萬物
の因なりと執する
もの、水火風空に
於て同じく執着
す。
(六) 瑜伽の我
定を修する内心の
我は眞我なり常住
不動なりと執する
もの。
(七) 建立云云一
法を構へて修する
を建立の淨さを
す、我は此の法に
ありと云ふ。
(八) 那羅延天
本と譯す、大梵王
なり、外道は一切
の人は皆梵王より
生ずるが故にと云
ふ。
(九) 商羯羅天、骨
鏤天と譯す、梵王
の初め人間を化す
る貌なり。
(一〇) 黒天、自在天
の眷屬、大黒天な
り。
(一一) 俱吠盞、即ち
毘沙門なり。
(一二) 波頭摩云云
以下、世界に奉養す
る神なり、園陀論
師とは園陀論を學
ぶ人を云ふ。

こと有り、所謂る持齋なり。彼れ此の少分を思惟して歡喜を發起し數數に修習す。秘
密主、是れ初めの種子善業の發生するなり。復た此を以て因と爲して、六齋日に於て、
父母と男女と親戚とに施與す、是れ第二の芽種なり。復た此の施を以て親戚に非る者
に授與す、是れ第三の疱種なり。復此の施を以て器量高德の者に與ふ、是れ第四の葉種
なり。復此の施を以て歡喜して伎樂の人等に授與し及び尊宿に獻る、是れ第五の敷華
なり。復此の施を以て親愛の心を發して、而も之を供養す、是れ第六の成果なり。復
次に秘密主、彼戒を護つて天に生ずるは、是れ第七の受用種子なり。復次に秘密主、
此の心を以て生死に流轉して、善友の所に於て是の如きの言を聞く、此れは是れ天な
り、大天なり。一切の樂を與ふる者、若し虔誠に供養すれば一切の所願皆滿つ、所謂る、
自在天と、梵天と、(一) 那羅延天と、(二) 商羯羅天と、(三) 黒天と、自在天と、日天と、月
天と、龍尊等と、及び(四) 俱吠盞毗沙門と、(五) 釋迦毗樓博叉と、(六) 毗首羯磨天と、閻魔と、
閻魔后と、梵天后と、世の宗奉する所の火天と、迦樓羅子天と、自在天后と、(七) 波頭
摩と、(八) 德叉迦龍と、和脩吉と、(九) 商佉と、(一〇) 羯句皀劍と、大蓮と、(一一) 俱里劍と、(一二) 摩訶泮尼と、
阿地提婆と、薩陀難陀等の龍と、或は天仙と大園陀論師となり、各各に善く供養すべ

(一) 以下煩惱の六
十心を明す、即ち
具感なり。
(二) 秘密主云云
已下、是れ六十心を説
く、是れ心相の句
なり。

し。彼れ是の如くなるを聞いて、心に慶悅を懷ひて、殷重に恭敬し、隨順し修行す。
秘密主、是を愚童異生の生死流轉の無畏依の第八の嬰童心と名く。秘密主、復次に殊
勝の行あり。彼の所説の中に隨て殊勝に住して解脱を求むる慧生ず、所謂る常無常空
なり。是の如きの説に隨順す。秘密主、彼の空と非空とを知解するに非ず、常と斷と、非
有と非無とを、俱に彼は分別を以て分別無しとす。云何んが空を分別する。諸空を知
らざれば彼能く涅槃を知るに非ず。是の故に應に空を了知して斷と常とを離るべし。
(一) 爾の時に金剛手、復た佛に請うて言さく、唯願くは世尊、彼の心を説き給へ。是
の如く説き已て、佛、金剛手秘密主に告て言はく、(二) 秘密主諳かに聽け、心相といふ
は、謂く貪心、無貪心、瞋心、慈心、癡心、智心、決定心、疑心、暗心、明心、積聚
心、鬪心、諍心、無諍心、天心、阿脩羅心、龍心、人心、女心、自在心、商人心、農
夫心、河心、陂池心、井心、守護心、慳心、狗心、狸心、迦樓羅心、鼠心、歌詠心、
舞心、擊鼓心、室宅心、師子心、鶴鷄心、鳥心、羅刹心、刺心、窟心、風心、水心、
火心、泥心、顯色心、板心、迷心、毒藥心、絹索心、械心、雲心、田心、鹽心、剃刀
心、須彌等心、海等心、穴等心、受生心なり。秘密主、彼れ云何んが貪心、謂く染法に

隨順す。云何んが無貪心、謂く無染の法に隨順す。云何んが瞋心、謂く怒法に隨順す。云何んが慈心、謂く慈法に隨順し修行す、云何んが癡心、謂く修行不觀の法に隨順す。云何が智心、謂く殊勝増上の法に隨順す。云何んが決定心、謂く尊の教命を説の如く奉行す。云何んが疑心、謂く常に不定等の事を收持す。云何んが開心、謂く疑慮無き法に於て疑慮の解を生ず。云何んか明心、謂く不疑慮の法に於て疑慮無くして修行す。云何んが積聚心、謂く無量を一とするを性と爲す。云何んが闘心、謂く互相に是非するを性と爲す。云何んが諍心、謂く自己に於て是非を生ず。云何んが無諍心、謂く是非俱に捨つ。云何んが天心、謂く心念に隨て成就せんと思ふ。云何んが阿脩羅心、謂く生死に處せんと樂ふ。云何んが龍心、謂く廣大の資財を思念す。云何んが人心、謂く利他を思念す。云何んが女心、謂く欲法に隨順す。云何んが自在心、謂く思惟して我一切意の如くならんと欲ふ。云何んが商人心、謂く初には收め聚めて後には分析する法に隨順す。云何んが農夫心、謂く初に廣く聞て而も後に求むる法に隨順す。云何んが河心、謂く二邊に依り因る法に隨順す。云何んが陂池心、謂く渴して厭き足ること無き法に隨順す。云何んが井心、謂く是の如く思惟すること深くして復た甚深なり。

り。云何んが守護心、謂く唯此の心のみ實なり、餘心は不實なり。云何んが慳心、謂く己が爲にして、他に與へざる法に隨順す。云何んが狸心、謂く徐ろに進む法に隨順す。云何んが狗心、謂く少分を得て以て喜び足れりと爲す。云何んが迦樓羅心、謂く朋黨羽翼の法に隨順す、云何んが鼠心、謂く言の繫縛を斷せんと思惟す。云何んが歌詠心、云何んが舞心、謂く是の如きの法を修行して、我當に上昇して種種に神變すべし。云何んが擊鼓心、謂く是の法に修順して、我當に法鼓を擊つべし。云何んが室宅心、謂く自ら身を護る法に隨順す。云何んが師子心、謂く一切の無怯弱の法を修行す。云何んが鶻鷄心、謂く常に暗夜に思念す。云何んが鳥心、謂く一切處に驚怖して思念す。云何んが羅刹心、謂く善の中に於て不善を發起す。云何んが刺心、謂く一切處に惡作を發起するを性と爲す。云何んが窟心、謂く窟に入ることを爲す法を隨順す。云何んが風心、謂く一切處に變じて發起するを性と爲す。云何んが水心、謂く一切不善を洗濯する法に隨順す。云何んが火心、謂く熾盛の炎熱を性と爲す。云何んが泥心、云何んが顯色心、謂く彼に類するを性と爲す。云何んが板心、謂く量に隨ふ法に隨順して、餘善を捨棄するが故に。云何んが迷心、謂く執する所異に、思

(一) 秘密主一云云
云、已下三劫は十地
の位にあるを示す、
一行位あるを示す、
疑の五根本煩惱
なり、故に再数す
れば十なり、第三に
十二に再数すれば二
十なり、第三に再
四には八十なり、第
五には八十なり、第
一に六十心とな
る。
(二) 世間の三妄
執、已下劫は明
す、妄執とは煩惱
ない、洪寂、洪寂の
菩薩なり。

ふ所異なる。云何んが毒藥心、謂く生分無き法、順修す。云何んが羅索心、謂く一切處に我縛に住するを性と爲す。云何んが械心、謂く二足止まり住するを性と爲す。云何んが雲心、謂く常に雨を降す思念を作す。云何んが田心、謂く常に是の如く自身に事ふることを修す。云何んが鹽心、謂く思念する所に彼復た思念を増加す。云何んが剃刀心、謂く唯是の如く剃除する法に依り止まる。云何んが彌盧等心、謂く常に思惟して心高擧なるを性と爲す。云何んか海等心、謂く常に是の如く自身に受用して而も住す。云何んが穴等心、謂く先には決定して、彼後には復變改するを性と爲す。云何んが受生心、謂く諸の行業を修習して、彼に生ずること有り。心是の如く同性なり。
(三) 秘密主、一三三四五再数すれば凡そ百六十心あり。(四) 世間の三妄執を越えて世間の心生ず。謂く是の如く唯蘊無我を解し、根と境界とに淹留して修行し、業と煩惱、株杭と無明の種子、十二因縁を生ずるを抜く、建立宗等を離れたり。是の如きの(五) 洪寂は一切の外道の知ること能はざる所、一切の過を離れたりと、先佛は宣説し玉へり。秘密主、彼の出世間の心、蘊の中に住するに、是の如くの慧隨て生ずることあり。若し蘊等に於て著するに離るることを發起して、當に聚沫と、浮泡と、芭蕉と、陽

(一) 謂く蓋處界なり。
已下は第五住心なり。

(二) 復次に云云
已下第二劫第六住心なり。

(三) 復次に云云
已下第三劫八九十の三箇の住心あり。
(四) 所謂空性此
の一段の文は八
の二心に同じく引
證したまふ、能寄
の眞言行者空性極
無の二心即法華華
嚴の行者の心品に
齊し、故に寄顯す
も、但始より三密
入具すると初地に
入具する三密を具
するとの異なるの
み。

焰と、幻等とを觀察して解脱を得べし。(二) 謂く蘊と、處と、界と、能執と、所執と、皆法性を離れたり。是の如きの寂然界を證する、是を出世間心と名く。秘密主、彼の違と順との八心の相續と、業と煩惱との網を離るるは、是れ一劫を超越する瑜祇の行なり。(三) 復次に秘密主、大乘の行あり。無縁乗の心を發して法に我性なし。何を以ての故に、彼の往昔に是の如く修行せしもの如く、蘊の阿頼耶を觀察して、自性は幻と、陽焰と、影と、響と、旋火輪と、乾闥婆城との如しと知る。秘密主、彼是の如く、無我を捨つれば、心主自在にして自心本不生を覺る。何を以ての故に、秘密主、心は前と後との際に得べからざるが故に。是の如く自心の性を知るは、是れ二劫を超越する瑜祇の行なり。(四) 復次に秘密主、眞言門に菩薩の行を行する諸菩薩は、無量無數百千俱胝那由多劫に積集する無量の功德智慧と、具さに諸行を修する無量の智慧方便と皆悉く成就す。天人世間の歸依する所にして、一切の聲聞と辟支佛地とを出過せり。釋提、桓因等親近し敬禮す。(五) 所謂空性は根と境とを離れ、相も無く境界も無く、諸の戲論を越えたり。虚空に等しき無邊一切の佛法、此に依て相續して生ず、有爲と無爲との界を離れ、諸の造作を離れ、眼と耳と鼻と舌と身と意とを離れて、極めて自

(一) 業と煩惱業
煩悩は解脱し畢れ
ば還て菩提心の功
徳なることを明
す。
(二) 復次 已下眞
言行者修行の位
十地を明す。三妄
執の煩悩等は前
三劫に斷盡すれ
ども、十地の位に
成佛の威儀を修
す、故に無惑の十
地と云ふなり。
(三) 信解行地 已
下は眞言にして
解行地は即ち十
の異名なり。十
の初地なるは十箇
の前に建立する
に無惑の十地と云
ふ。
(四) 四分 四分と
は下方便、中方便、
上方便、上方便
の四なり。上方便
一とはその上方
便にして佛果を云
ふ。
(五) 爾の時云云
已下六種の無畏を
修行する中の修
の難所をいふ。修
な六無畏段といふ
之を行

性無き心を生ず。秘密主、是の如きの初心をば、佛は成佛の因と説き玉ふ。故に業と煩惱とに於て解脱すれども、而も業と煩惱との具依たり、世間宗奉して常に供養すべし。(二) 復次に秘密主、(三) 信解行地には三心を觀察す、無量の波羅蜜多の慧を以て、四攝の法を觀す。信解地は對無く、量無く、不思議なり。十心を建立し、無邊の智生ず、我が一切の諸の説く所あるは皆此に依て而も得るなり。是の故に智者は當に此の一切智と、信解智とを思惟すべし。復一劫を越えて此の地に昇り住す。此の四分の一に信解を度するなり。

(五) 爾の時に、執金剛秘密主、佛に白して言さく、世尊、願はくは救世者、心相を演説し玉へ、菩薩は幾種の無畏處をか得ることある。是の如く説き已つて、摩訶毗盧遮那世尊、金剛手に告げて言はく、諦に聽き、極て善く思念せよ。秘密主、彼の愚童凡夫は諸の善業を修し、不善の業を害するときは、當に善無畏を得べし。若し實の如く我を知るときは、當に身の無畏を得べし。若し取蘊の集むる所の我身に於て、自の色像を捨てて觀するときは、當に無我無畏を得べし。若し蘊を害して、法の攀縁に住するときは、當に法無畏を得べし。若し法を害して、無縁に住るときは、當に法無我無

(二) 秘密主以下
迷情を遮する觀門
にして之を十喻段
に於て之を十喻を
明す。

(三) 半呼栗多時
の最少一刹那
云ふ六十刹那
那を六十刹那
ふ六十刹那
三十一の羅婆
須臾といふ。呼

畏を得べし。若し復た。一切の蘊と、界と、處と、能執と、所執と、我と、壽命等と、及び法と、無縁と、空にして自性無性なり、此の空智生するときは、當に一切法自性平等無畏を得べし。(一) 秘密主、若し眞言門に菩薩の行を修する諸菩薩は、深く修して十緣生句を觀察し、當に眞言の行に於て通達して證を作すべし。云何んが十と爲す。謂く幻と、陽焰と、夢と、影と、乾闥婆城と、響と、水月と、浮泡と、虚空華と、旋火輪との如し。秘密主、彼れ眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩は、當に是の如く觀察すべし。云何んが幻と爲す。謂く咒術と、藥力との能造と、所造との種種の色像の如きは、自の眼を惑はすが故に希有の事を見る。展轉相生じ十方に往來すれども、然も彼去るに非ず、去らざるに非ず。何を以ての故に、本性淨の故に。是の如く眞言の幻を持誦し、成就して、能く一切を生ず。復次に秘密主、陽焰の性は空なり。彼世人の妄想に依て成立して談義する所あり。是の如く眞言の想も、唯是れ假名なり。復次に秘密主。夢中に見る所の晝日と、(三) 半呼栗多と刹那との歳時等に、種種の異類に住して、諸の苦樂を受くるが如きは、覺め已て都て見る所無し。是の如く夢の眞言行も、應に知るべし亦爾なり。復次に秘密主、影の喩を以て、眞言の能く悉地を發くことを

此の如く、彼の眞言の悉地も當に是の如く知るべし。復次に秘密主、乾闥婆城の譬を以て、悉地宮を成就することを解了すべし。復次に秘密主、響の喩を以て眞言の聲を解了すべし。聲に縁て響あるが如く、彼の眞言者當に是の如く解すべし。復次に秘密主、月の出るに因るが故に、淨水を照して月の影像を現はすが如く、是の如く眞言の水月の喩を以て彼の持明者、當に是の如く説くべし。復次に秘密主、天より雨を降し泡を生ずるが如く、彼の眞言の悉地種種の變化も、當に知るべし亦爾なり。復次に秘密主、空中には衆生も無く、壽命も無く、彼の作者も得べからざるなり。心迷亂するを以ての故に、是の如きの種種の妄見を生ずるが如し。復次に秘密主、譬へば火燼の、若し人執持して手に在りて、而も以て空中に旋轉するに、輪の像生することあるが如し。秘密主、應に是の如く大乘の句と、心の句と、無等等の句と、必定の句と、正等覺の句と、漸次大乘生の句とを了知すべし。當に法財を具足し、種種の工巧大智を出生し、實の如く遍く一切の心想を知ることを得るなり。

入曼荼羅具緣眞言品第二

諸佛自證云、實の如く前住心の説文を云ふ。

爾の時に執金剛秘密主、佛に白して言さく、希有なり、世尊、此の諸佛自證の三菩提を説き玉ふ、不思議法界は心地を超越せり。種種の方便道を以て、衆生類の爲に、本性信解の如く、而も法を演説し玉ふ。唯願くは世尊、次に眞言行を修して、大悲胎藏より大曼荼羅王を生ずることを説き玉へ。彼の諸の未來世の無量の衆生を満足せしめ救護し安樂ならしめんが爲の故に。

爾の時に薄伽梵毗盧遮那、大衆會の中に於て遍く觀察し已て、執金剛秘密主に告げて言はく、諦に聽け、金剛手、今曼荼羅の行を修行して、一切智智を満足する法門を説かん。爾の時に毗盧遮那世尊、本昔無盡法界を成就し、無餘の衆生界を度脱せんと誓願し玉ふが故に、一切如來同じく共に集會して、漸次に大悲藏發生三摩地に證入し玉ふ。世尊一切の支分より、皆悉く如來の身を出現し玉ふ、彼の初發心より、乃至十地の、諸の衆生の爲の故に、遍く十方に至り、佛身の本位に還り來つて、本位の中に住して、而も復還り入り玉ふ。時に薄伽梵、復執金剛秘密主に告げて言はく、諦に聽け、金剛手、曼荼羅の位の初の阿闍梨は、應に菩提心を發し、妙慧と慈悲とあつて、兼て衆藝を綜べ、善く巧に般若波羅蜜を修行し、三乘に通達し、善く眞言の實義を解し、

(一) 若し衆生云
弟子の相を明

衆生の心を知り、諸佛菩薩を信じ、傳教灌頂等を得、妙へに曼荼羅の畫を解し、其性調柔にして我執を離れ、真言行に於て善く決定することを得、瑜伽を究め習ひ、勇健の菩提心に住すべし。秘密主、是の如きの法則の阿闍梨は、諸佛菩薩の稱讃し玉ふ所なり。復次に秘密主、彼の阿闍梨は、(二)若し衆生を見るに法器と爲るに堪へて、諸垢を遠離し、大信解と、勤勇と、深信とありて常に利他を念せん。若し弟子是の如きの相貌を具せば、阿闍梨應に自ら住いて勸發して是の如く告げて言ふべし。

佛子此の大乗 真言行道の法 我今正しく開演せん 彼の大乗の器の爲なり

過去の等正覺 及及び未來世 現在の諸の世尊 饒益衆生に住し玉ふ

是の如きの諸賢者は 真言妙法を解して 勤勇にして種智を獲 無相の菩提に坐せり

真言の勢は無比なり 能く彼の大力の 極忿怒の魔軍を摧く 釋師子救世なり

是の故に汝佛子 應に是の如きの慧の 方便を以て成就を作し 當に薩婆

若を獲べし 發起して増廣せしめ 彼堅住にして教を受けば 當に

行者悲念の心をもて

(二) 薩婆若 佛の
智慧なり。

(一) 山林云云 曼荼羅を建立する地處を揀擇する事な
明す
(二) 圓壇 輪圍具
足の義なり 曼荼羅
總じて三あり 曼荼羅
二には秘密曼荼羅 一
には自性曼荼羅
三には悲生曼荼羅
持外現の化他の曼荼羅
茶羅なり 擇地造壇
壇にして機を見て弟子
子を入する故なり
(四) 制定 塔なり
なり 火神祠の淨行
をなす火詞の所なり
(五) 牛欄 西方の聚落の牧牛に共に
去る或は十里 村を
の尿屎積みて地に
遍てり 俗之を稱
して淨となす
(七) 河潭 雨水流
れて共に礫をな
し
(八) 天廟 世天に
宗事する室なり
(九) 仙人云云 世

爲に平地を擇ぶべし

(一) 山林に華果多く 意を悦ばしむる諸の清泉は 諸佛の稱歎し玉ふ所なり

應に(二)圓壇の事を作すべし

或は河流の處に在て 鵝鴈等の莊嚴をなせば 彼處に慧解をもて (三)悲生曼荼羅を作るべし 彼處に慧解をもて (三)悲生曼

正覺と緣導師と 聖者と聲聞衆と 曾し此の地分に遊び玉ふ 佛常に稱譽し

玉ふ所なり 及及び餘の諸の場所 僧坊と阿練若と 華房と高樓閣と 勝妙の諸池と苑と

(四)制定と(五)火神祠と (六)牛欄と(七)河潭の中と (八)諸天の廟と空室と (九)仙人

得道の處と 如上の所説と 或は所意樂の處に 弟子を利益せんが故に 當に曼荼羅を畫

くべし

(一)秘密主、彼地を揀擇して礫石と、碎瓦と、破器と、鬻體と、毛髮と、糠糟と、灰

炭と、刺骨と、朽木等、及び蟲と、蟻と、蝻と、毒螫との類を除去すべし。是の如

國譯大毘盧遮那成佛神變加持經卷一

一九

同に五通を求むるもの、樓む處。
○秘密主云云
已下は七日作壇の曼荼羅を明す。
○宿直云云 曼荼羅を建立するに日時と曜宿とを擇ぶべきことを明す。
○是の如き云云 驚發地神の作法を明す。

くの諸過を離れ、良日晨に遇ひ、日と時分とを定め、○宿直の諸執皆悉く相應して、食前の時に於て吉祥相に値ふて、先づ當に一切如來の爲めに禮を作し、是の如き偈を以て、地神を驚發すべし。

汝天は親護者なり 諸佛導師に於て 殊勝の行を修行し 地波羅蜜を淨む
魔軍の衆を破せし 釋師子救世の如く 我も亦魔を降伏す 我曼荼羅を畫くべし

彼應に長跪して手を舒べ、地を按じて頻りに此の偈を誦し、塗香と華等とを以て供養すべし。供養し已て、眞言者は應に復一切如來を歸命すべし。然して後に地を治して、其次第の如く當に衆徳を具すべし。爾の時に執金剛秘密主、頭面を以て世尊の足を禮して、偈を説て言さく、

○佛法は諸相を離れたり 法は法位に住せり 所説は譬類無し 相も無く爲作も無し
何んが故ぞ大精進 此の有相 及及び眞言行とを説き玉ふ 法然の道に順せず 爾の時に薄伽梵 毗盧遮那佛 執金剛手に告ぐ 善く法の相を聴け

○佛法は云云 已下八句は事法の壇を問ひ玉ふ。

○實には時方云云 此の四句の偏は方違の札に書くはなり。或は自身他行する時、若し行く方悪き時は此の文を書き又は觀するなり。
○復次に云々 有相の方便を説く佛意を明す。

法は分別と 及び一切の妄想を離れたり 若し妄想と 心思と諸の起作とを淨除せば
我最正覺を成す 究竟すること虚空の如し 凡愚は知らざる所 邪妄にして境界を執す
時と方と相貌等の 樂欲は無明に覆はる 彼等を度脱せんがための故に 隨順して方便を以て説く
而も○實には時と方となく 作も無く造者も無し 彼の一切の諸法は 唯實相に住せり
○復次に秘密主 當來世の時に於て 劣慧の諸の衆生は 癡愛を以て自ら蔽はるるを以て
唯有相に依て 恒に諸の斷常と 時方と所造の業の 善不善の諸相を樂ふ
盲冥にして果を樂ひ求め 此の道を知解せず 彼等を度せんが爲の故に 隨順して是の法を説く
秘密主、是の如くの所説の處所に隨て、一地在るに治めて、堅固ならしめて未だ地に

(一) 瞿摩夷云云
牛糞なり、瞿換世
羅牛糞なり、共に
梵語なり。
(二) 灑淨 灑水の
法を明す。

(三) 行者云云 此
の文は五佛の名を
説く、但し現圖は
茶羅の五佛の形像
釋迦所説の五佛頂
經に出でたり。

(四) 佛室 現圖受
茶羅に約せば、般
佛母の位なり、今
の經には是れなき
が故に不動と降三
世との中間はれ行
者の座位なり。

至らざる(一)瞿摩夷、及び瞿換世羅を取て和合して之を塗り、次に香水の眞言を以て(二)灑淨せよ。即ち眞言を説て曰く、

南摩三曼多勃駄喃、凡そ眞言の中に平聲字あらば、皆上聲アハラチナシイギキヤナクサシイナシマ
之を呼べ、已下此に準じて之を呼べ 阿鉢囉底三迷、伽伽那三迷、三摩
多奴揭帝、鉢囉吃囉底微輸睇、達摩駄賭微成達徐、莎訶。

(三)行者次に中に於て 意を定めて大日を觀せよ 白蓮華の座に處し 髮髻を以て冠と爲す

種種の色光を放ち 身に通じて悉く周遍せり 復當に正受到に於てすべし 次に四方佛を想ふべし

東方をば寶幢と號け 身色日暉の如し 南方の大勤勇は 遍く覺華開敷し 金色にして光明を放ち 三昧にして諸の垢を離れたり 北方は不動佛なり 惱を離れたる清涼の定なり。

西方は仁勝者なり 是を無量壽と名く 持誦者思惟して (四)佛室に住せよ 當にこの地を受持せんには 不動の大名を以てし 或は降三世を用ゐ 一切の利成就すべし

(一)白檀を以て 圓妙の曼荼羅を塗り畫け 中の(二)第一は我身 (三)第二は諸の救世

(四)第三は彼に同じて等ふせよ 佛母虛空眼なり 第四は蓮華手 第五は執金剛 第六は不動尊なり 想念して其下に置け 塗香と華等とを奉れ 諸の如來を思念せよ

誠を至して殷重を發し 是の如きの偈を演說せよ (五)諸佛慈悲者 我等を存念し玉ふが故に 明日地を受持すべし 并に佛子當に降し玉ふべしと

是の如く説き已て、復當に此眞言を誦すべし、曰く、
南摩三曼多勃駄喃、薩羅婆怛他藥多、地瑟訶那地瑟社帝、阿耨麗、微麼麗、娑麼羅
姍鉢囉、吃囉底鉢囉輸睇、莎訶。

(六)眞言を持する行者 次に悲念の心を發して 彼の西方に依て 繫念し以て安寢し

菩提心 清淨の中の無我を思惟せよ 或は夢の中に於て 菩薩の大名稱と

國譯大毘盧遮那成佛神變加持經卷一 二二三

(六)眞言云云 已下は相好を祈る。弟子に約する説なり。

(五)諸佛云云 地を擇治する法を明す。

(一)白檀云云 白檀九位の曼荼羅を明す。
(二)第一我身 毘盧遮那の位なり。
(三)第二諸の救世 諸佛菩薩なり。
(四)第三云云 佛母なり。

諸佛の量ある無きと 衆の事業を現作し玉ふとを見て 或は安慰の心を以て

行者を勸囑し玉ふ

汝衆生を念ふが故に 曼荼羅を造作す 善哉摩訶薩 盡く所甚だ微妙なり

復次に餘日に於て 度すべき人を攝受せよ 若し弟子の信心あつて 種姓

清淨に生れ 三寶を恭敬し 深き慧を以て身を嚴り 堪忍にして懈倦無く 尸羅淨ふ

して缺ること無く 忍辱にして慳慳ならず 勇健にして行願を堅くせん 是の如くを應に攝取すべ

し 餘は則ち所觀なし 或は十或は八七 或は五二一四に 當に灌頂を作すべし 若は復數此れを

過ぎてませよ 爾の時に金剛手秘密主、復佛に白して言さく、世尊當に云何が此を曼荼羅と名くべ

き。曼荼羅とは其の義云何ん。佛の言はく、此は發生諸佛の曼荼羅と名く。極比無

味、無過上味なり。是の故に説て曼荼羅と爲す。又秘密主、無邊の衆生界を哀れみ

て、其の本性の如く而も法を演説し玉ふ。秘密主、大乘の宿習無く、未だ曾て眞言乘

の行を思惟せざるものは、彼れ少分をも見聞し、歡喜し、信受すること能はず。又金

剛薩埵、若し彼の有情、昔大乘眞言乘道の無量の門に於て、進趣し已て、曾て修行す。

彼等が爲の故に、此に限りて名數を造立す。彼の阿闍梨も亦當に大悲心を以て、是の如

くの誓願を立てて、無餘の衆生界を度せんが爲の故に、應當に彼の無量の衆生を攝受

して、菩提種子の因縁を作すべし。

眞言を持する行者 是の如く攝受し已て 彼に命じて三たび自歸して 説

いて先罪を悔いしめよ 塗香華等を奉り 諸の聖尊を供養せしめ 彼に三世 無障礙智戒を授くべし

國譯大毘盧遮那成佛神變加持經卷一 二五

(一) 若し弟子云 明す 弟子の十徳を 明す 深き慧云云 無邊の佛法は劣慧 の心器の能く堪ゆ る所に非ず、故に 智性深利にして自 爲に莊嚴せるもの、 爲めにのみ説く可 し。尸羅 戒法の 事。

(四) 或は十云云 一期の道場に阿闍 梨の灌頂を作すの 限數なり。是の故 に一曼荼羅の中に 同時に三人六人九 人の爲めに灌頂す ることを得ず。之 れ如來の密意な り。又の説に傳法 は三六九を斥く、 之れ三六九趣九界 に通ず。曼荼羅の時云云 曼荼羅名義を問答 して明す。

(二) 一の衆生云 云 是の故に法を 慳慳して與へざる 等は大罪人なり。 (三) 無餘記 分明 に記刺したまふな り。 (四) 有餘記 未來 に其の佛に値ふて 記刺を得べし等と 言ひたまふなり。

(四) 眞言云云 弟子の支分の中、護 持建立の方便を明

(二) 齒木 齒木を授與して諸の弟子をなして之を嚙ましめ、及び非器の相を見らるなり。
 (三) 優曇鉢羅 陀羅尼集經第九に翻じて王樹と云ふ。
 (四) 阿説他 今時白楊を用ふ。
 (五) 面を云云 齒木を投ぐる時の方向なり。
 (六) 修多羅 云云 金剛線を結ぶことなり。

次に當に(二)齒木を授くべし 若は(三)優曇鉢羅 或は(四)阿説他等を 結護して而も淨を作せ
 香華を以て莊嚴せよ 端直にして本末を順にせよ (五)面を東にし或は面を北にして、嚼み已て而も之れを擲げしめよ
 當に彼の衆生の 成器と非器との相を知るべし (六)修多羅を三結して 次に等持の臂に繋げよ
 是の如くして弟子に受けしむれば 諸の塵垢を遠離す 信心を増發せしめんが故に 當に隨順して法を説き
 慰諭して其の意を堅うせしむべし 是の如く偈を告げて言はく
 汝無等の利を獲て 位大我に同じ 一切の諸の如來 此の教の菩薩衆皆已に汝を攝受して 大事を成辨せしむ 汝等明日に於て 當に大乘の生を得べしと
 是の如く教授し已て 或は夢寐の中に於て 僧の住處と 園林の悉く嚴妙なると

(一) 女人 女人とは是れ三昧の像なり。
 (二) 男子 智慧の像なり。

(三) 諸果 世に希有なる所の珍奇の妙果なり。

堂宇の相殊特なると 顯敞なる諸の樓觀と 幢と蓋と摩尼珠と 寶と刀と悦意の華と
 (一) 女人の鮮白の衣をき 端正にして色殊麗なると 密親と或は善友と (二) 男子の子の天身の如くなると 經卷の淨無垢なると 遍知と因緣覺と 并に佛の群牛の特乳に豊かなると 聲聞衆と
 大乘の諸菩薩と 現前に(三)諸果を授け 大海と河と池とを度り 及び樂ふ所の聲を聞き
 空中に吉祥と言ふと 當に意樂の果を與ふべしと言ふことを 是の如き等の好相を 宜しく應に諦に分別すべし
 此と相違せんものをば 當に善夢に非すと知るべし 善く戒に住せんもの晨に起き師に白し已れ
 師は此の句法を説て 諸の行人を勸發せよ 此の殊勝の願道は 大心の摩訶衍なり

(一) 自然智 是れ如來自覺自證の智にして昔より未だ聞かざる所の法を自然に了々に現前して聖證する所なきが故に云ふ
 (二) 二諦 世諦と眞諦とあり種々の具支の方便を作す事皆世諦に隨ふ此の因縁に因て一切智々の印を得るは即ち是れ眞諦なり
 (三) 爾の時云云 以下灌頂入壇の前方便三昧耶戒の説相なり

(四) 是の戒に云云 生佛の三密平等不二なり故に此の平等界に住するを合して一となすとす

汝今能く志求して 當に如來(一)の 自然智の大龍を成就すべし 世間に敬ふ

こと塔の如し

有と無と悉く超越して 垢無きこと虚空に同じ 諸法は甚だ深奥なり 了じ

難くして含藏無し

一切の妄想を離れ 戲論本より無なるが故に 作業妙にして無比なり 常に

(二) 二諦に依る

是の乗の殊勝の願なり 汝當に斯の道に住すべしと

(三) 爾の時に住無戲論執金剛、佛に白して言さく、世尊、願くは三世無礙智戒を説き玉へ、若し菩薩此に住するときに、諸佛菩薩をして皆歡喜せしむるが故に、是の如く説き已て、佛、住無戲論執金剛等に告て言はく、佛子、諦に聽け、若し族姓の子、(四) 是の戒に住する者は、身と語と意とを以て合せて一と爲して、一切の諸法を作さざれ、云何なるをか戒とする。所謂る觀察して自身を捨てて諸佛菩薩に奉獻す。何を以ての故に、若し自身を捨つる時は、彼の三事を捨つと爲す、云何なるをか三とする、謂く身と語と意となり、是の故に族姓の子、身語意の戒を受くるを以て菩薩と名くることを得。所以

(一) 淨香水 金剛香水を明す、弟子其の心に誓つて必ず其の心未だ際菩提心を捨離せずと盟誓する作法なり
 (二) 時分 初めて曼荼羅を誦き事の竟るまでの時分限濟なり

(三) 五色云云 是れ金剛線にあらす、壇地に耕するなり、壇地に耕するなり、五色の粉に浸して耕するなり、(四) 東方云云 已

何んとなれば、彼の身語意を離れたるが故に。菩薩摩訶薩應に是の如く學すべし。次に

明日に於て、金剛薩埵を以て自身を加持し、世尊毗盧遮那の爲に禮を作せ、淨き瓶を

取て香水を盛り滿てて、降三世の眞言を持誦して用て之を加し、初門の外に置いて用

て是の諸の人等に灑ぐべし。彼の阿闍梨、次に(一) 淨香水を授與して彼に飲ましめよ、

心清淨の故に、爾の時に執金剛秘密主、偈を以て佛に問ひ上つる。

種智説中の尊 願はくは彼の(二) 時分を説き玉へ 大衆は何れの時に於てか

普く集りて靈瑞を現じ

曼荼羅の闍梨は 慇懃に眞言を持せしめんと 爾の時に薄伽梵 持金剛慧に

告げ玉ぐ

常に當に此の夜に於て 曼荼羅を作るべし 傳法の阿闍梨 是の如く應に

次に

(三) 五色の修多羅を取て 一切の佛に稽首すべし 大毗盧遮那を以て 親たり

自ら加持を作せ

(四) 東方を以て首と爲し 對つて修多羅を持せよ 齋に至り空に在け 漸次に

下六句は之れ空中
準走を説く。
第二云云此
は地上耕線にして
壇上に耕なり。

右方云云右
方は南、後方は西
なり、勝方は北な
り。

涅槃底 孔雀
明王軌に西南方に
羅刹王を置く涅槃
底は羅刹王な

伊舍尼 東北
に位す。

右に旋り轉じて

是の如く南及び西

終に北方に竟はれ

第二に界を安立せんとき

亦初方

より起せよ

諸の如來を憶念し

所行は上の説の如くせよ

右方及び後方

復た勝方に

周らせよ

阿闍梨次に廻て

涅槃底に依れ

受學對持のものは

漸次に以て南に行れ

此れより右に旋り繞つて

轉じて風方に依る

師位は本處を移して

火の方

に居せよ

眞言を持する行者

復是の如きの法を修せよ

弟子は西南にあり

師は伊

舍尼に居す

學者復た旋繞し

轉じて火の方に依れ

師位は本處を移して

風方に住せよ

是の如く眞言者

普く四方の相を作る

漸く次に其の中に入る

三位を以て

之れを分つ

已に三の分位を表して

地相普く周遍せば

復一一の分に於て

差別して以

て三とせよ

この中の最初の分は

作業所行の道なり

其餘の中と後との分は

聖天の

住處なり

方に等しく四門あり

其の分劑を知るべし

誠心を以て愍重に

諸の聖尊

を運布せよ

是の如く衆相を造んには

均調にして善く分別せよ

内心に妙白蓮をかけ

胎藏は正しく均等にして

藏の中に一切の

悲生曼荼羅を造れ

十六尖具梨にせよ

此れを過ぎても是

れ其の量なり

八葉正しく圓滿にし

鸞鷲皆嚴好にせよ

金剛の智印

遍く諸葉の間に出せ

此の華臺の中より

大日勝尊現れ玉ふ

金色にして暉曜を具し

首に髮髻

冠を持せり

救世圓滿の光ありて

熱を離れ三昧に住せり

彼の東には

一切遍智印を

畫き作るべし

誠心云云 愍重に衆くの聖尊を運布す、即ち圖畫の時、此の先づ、羅の大衆會の一、の形色相威儀等、を觀じて悉く現前、を具足し然して後、恭敬の心を以て之、を彩畫するなり。之れ衆生の本心の、密の標職なり。又、曼荼羅の中、八葉、を明す、即ち一、曼荼羅の惣体なり。

勝尊 大日如來を云ふ。

一切遍智印 已下、遍知院を明す。

(二)三角云云 大師御請來の曼荼羅は三角形の尖なる方外院に向ふ。
(三)導師云云 佛眼佛母尊なり。

(三)北方云云 觀音院を明す、大精進は院主なり。
(四)軍那華 鮮白の華なり。
(五)多羅尊 此の尊は觀音の眼より生ずるが故に多羅を以て稱となす。
(六)中年の女人 盛年の形の如し。
(七)毗俱胝 觀音の額の歡の中より現ぜし尊なり、額

(二)三角にして蓮花の上にあり 其の色皆鮮白なり 光焰遍く圍遶し 皓潔にして普く周遍せり
次に其の北の維に於る (三)導師諸佛の母は 晃曜ありて眞金色なり 稿素を以て衣と爲せり
遍く照すこと猶し日光のごとし 正受にして三昧に住せり 復彼の南方に於て救世の佛菩薩

大德聖尊の印をなせ 號して滿衆願と名づく 眞陀摩尼珠を 白蓮の上に住せしめよ

(三)北方に大精進 觀世自在者あり 光色皓月と 商佉と(四)軍那華との如し 微笑して白蓮に坐し 髻に無量壽を現はせり 彼の右に大名稱 聖者(五)多羅尊あり

青と白と色を相ひ雜へて (六)中年の女人の狀にせよ 合掌して青蓮を持し 圓光遍せざることを靡くして 暉り發せること淨金の猶し 微笑して白衣鮮かなり 左邊に(七)毗俱胝ををけ

上を毗俱胝といふ。

(二)明妃 蓮華部の明妃にして耶輸陀羅なり。

(二)鉢胤遇 華の名なり。

亂脫

(三)訶耶揭利婆云 馬頭觀音なり 即ち蓮花部の忿怒明王なり。

手に數珠鬘を垂れ 三目にして髮髻を持し 尊形皓素の如し 圓光の色主無くして 黃赤白相ひ入れり

次に毗俱胝に近く 得大勢尊を書け 彼の服は商佉色 大悲蓮花手なり 滋榮して未だ敷けず 圍繞する圓光を以てす (三)明妃を其の側に住せしめよ 持名稱者と號す

一切の妙なる瓔珞を以て 金色の身を莊嚴せり 鮮妙の華の枝を執れり 左は(二)鉢胤遇を持せり 聖者の多羅に近づきて 白處尊を住せしめよ 髮冠にして純帛を襲ひて 鉢曇摩花の手あり

聖者の前に於て (三)大力持明王を作せ 晨朝の日暉の色にして 白蓮を以て身を嚴る

赫奕として焰鬘を成し 吼へ怒て牙を出現せり 利爪にして獸王の髮あり (三)訶耶揭利婆なり

亂脱
復次云云
金剛院を明す、持
剛薩埵にして院主
なり
鉢孕遇華蓮
花なり
緑なる寶璫
瓊のことなり

披折羅 五股
金剛なり

執金剛云云
下の降三世不動
は持明院を明
瞭尊と名く

是の如き三摩地は 觀音の諸眷屬なり (一)復次に華臺の表 大日の左方に
能く一切願を満たせる 持金剛慧者あり (二)鉢孕遇華の色なり 或は復(三)緑

なる寶の如くせよ 首に衆寶の冠を戴き 璽珞を以て身を莊嚴せり 間錯して互に嚴飾し 廣多
にして數無量なり

左に(四)披折羅を執り 周環して光焰を起せり 金剛藏の右には 所謂(五)忙莽
雞あり

亦堅慧の杵を持し 身を嚴るに璽珞を以てせり 彼の右の次に 大力金剛針
を置くべし

使者衆圍繞し 微笑して同じく瞻仰せり 聖者の左方は 金剛商羯羅なり
金剛の鐐を執持し 自部の諸使と俱なり 其の身淺黄色にして 智杵を以て

標幟とせり (六)執金剛の下に於て 忿怒降三世あり 大障を摧伏するものなり 號して月
曆尊と名く

三目にして四の牙を現せり 夏時の雨雲の色にして 阿吒吒の笑ふ聲あり
金剛寶をもつて璽珞とし 衆生を攝護するが故に 無量の衆圍遶せり 乃至百千の手に 衆くの器械を

操持す 是の如くの忿怒等は 皆蓮華の中に住せり 次に西方に往いて 無量の持金
剛を書け

種種金剛の印と 形と色と各の差別にして 普く圓滿の光を放つ 諸の衆生
の爲の故なり

眞言主の下に 涅槃底の方に依て 不動如來使あり 慧刀と縞索とを持し
頂髪を左肩に垂れたり 一目は諦に觀 威怒にして身に猛き焰あり 安住し
て磐石に在す

面門に水波の相ありて 充滿せる童子の形なり 是の如きは具慧者なり
次に(七)風方に往いて 復忿怒尊を書くべし 所謂勝三世なり 威猛の焰圍遶し 寶冠にして金剛

(一)風方 蘇悉地
經四に云く西北方
に於て風神を置く
と

亂脱

を持せり
自の身命を顧みず 専ら請ふて教を受く 已に初の界域の 諸尊の方位等を説く

(一) 眞言云云以下第三院を明す。(二) 次には第二院云云。實には是れ第三院なり。釋尊は即ち三乘五道の教主となる故に、然るに隱密して第二院と云ふ。(三) 彼に住云云。白蓮華臺なり。能寂母釋迦如來の眷屬の佛眼なり。

持(一)眞言行人 (二)次に第二院に往て 東方の初門の中に 釋迦牟尼を畫け
圍繞して紫金色なり 三十二相を具し 袈裟衣を被服し 白蓮華臺に坐り
教をして流布せしめん爲に (三)彼に住して法を説く 次に世尊の右に於て
遍知眼を顯示せよ
無怡の相にして微笑せり 遍體に圓淨の光あり 喜見無比の身なり 是れを
(四)能寂母と名く

(五) 如來の五頂の頂なりと。

復彼の尊の右に於て 毫相の明を圖寫せよ 鉢頭摩華に住し 圓かに照して
商佉の色なり 衆の希願を満足す 暉光ありて大精進なり 救世の釋師
如意寶を執持して 衆の希願を満足す 暉光ありて大精進なり 救世の釋師
子なり
聖尊の左の方に (五)如來の五頂あり 最初をば白傘と名く 勝頂と最勝頂と

(一) 三佛頂 是れ如來の三部の衆徳の頂なり。

衆徳の火光聚と 及(オ)與(シ)捨(シ)除(シ)頂(ト) 是を五大頂と名く 大乘の釋種なり
應當に是處に依て 精進にして衆相を造るべし 次に其の北の方に於て 淨
居衆を布列せよ
自在と普華と 光鬘と及び意生と 名稱遠聞と等なり 各其の次第の如し
毫相の右に於て 復(二)三佛頂を畫け 初をば廣大頂と名け 次をば極廣大と
名く

(二) 火仙 像法は二臂左に數珠を持し右に深瓶を持す。

(三) 閻魔 靜慮と翻す。

及び無邊音聲となり 皆善く安立すべし 五種の如來の頂は 白と黃と眞金
との色なり
復次の三佛頂は 白と黃と赤とを兼ね備へり 其の光普くして深廣なり 衆
の瓔珞を以て莊嚴せり
發す所の弘誓力 一切の願を皆滿す 行者東の隅に於て (三)火仙の像を作れ
熾焰の中に住す 三點して灰を以て標と爲す 身色皆な深赤なり 心に三角
の印を置く
圓焰の中に在て 珠と及び深瓶(サロビヤウ)とを持せり 左の方に (三)閻魔王あり 手に

(二) 壇拏 集經四に
杖と云ふ棒なり
(三) 七母 女鬼なり

(四) 涅哩底 護方の
羅刹王西南隅なり

(五) 輿輅 八馬の
車輅の中にあリ

(六) 勝無勝妃 日
天の妃なり

(七) 庵字 字なり
左の一手頭指を
して餘指を立つる
印なり 印を右に
向ふ
(八) 塞建那 童子
天なり

(一) 壇拏の印を乗り
水牛を以て座と爲す 震電玄雲の色なり
續せり (二) 七母と并に黑夜と 死后等と圍

(三) 涅哩底鬼王は 刀を執て恐怖の形にせよ 縛嚙拏龍王は 羅索を以て印と爲せり

初の方には釋天王あり 妙高山に安住せり 寶冠の瓔珞を被りて 跋折羅の印を持せり

及び餘の諸の眷屬を 慧者善く分布せよ 左に日天衆を置く (四) 輿輅の中に在らしめよ

(五) 勝無勝の妃等 翼從して侍衛せり 大梵を其の右に在け 四面にして髮冠を持す

(六) 庵字の相を印と爲し 蓮を執て鷺の上に在り 西方には諸の地神と 辯才と及び毗紐と

(七) 塞建那と風神と 商羯羅と月天となり 是等は龍方に依て 之を書いて遺

謬すること勿れ

持眞言行者 不迷惑の心を以てせよ 佛子次に應さに 持明大忿怒を作るべし

右をば無能勝と號し 左は無能勝妃なり 持地神は瓶を奉げて 虔敬して長跪せり

及び二の大龍王の 難陀と跋難陀と 對して(一)廂の曲中に處せり 通門の大護なり

所餘の釋種尊の 眞言と印壇との 所説の一切の法は 師具に開示すべし

持(三)眞言行者 次に(四)第三院に至て 先づ妙吉祥を圖せよ 其の身爵金色なり

五髻の冠り其の頂にあり 猶し童子の形の如し 左に青蓮花を持し 上に金剛印を表せり

慈顔にして遍く微笑し 白蓮臺に坐し 妙相圓普の光 周匝して互に暉映せり

(一) 廂の曲中云云
の如く其の形
の曲れる處に
王相對せり
(二) 眞言云云
二院を明す
(三) 眞言云云
院と云ふは
先づ第一の
を畫して越
二に畫して
を畫して越
殊に畫して
故に畫して
院と云ふは
院と云ふは
院と云ふは

右邊に次に應に 網光童子の身を畫くべし 衆の寶網を執持し 種種の妙たる瓔珞あり

寶蓮華座に住す 而も佛の長子なりと觀せよ 左邊には五種の 與願の金剛使を書け

所謂る髻設尼と 優婆髻設尼と 及與び質多羅と 地慧と並に請召となり 斯の如きの五使者に 五種の奉教者あり 二衆共に圍繞して 無勝智を侍衛せり

せり

(一)行者右方に於て 次に大名稱の (二)除一切蓋障を作れ 如意寶を執持せり

二分の位を捨てて 當に入菩薩を畫くべし 所謂る除疑恠と 施一切無畏と

除一切惡趣と 救意慧菩薩と 悲念具慧者と 慈起大衆生と

除一切熱惱と 不可思議慧となり 次に復斯の位を捨てて 北の勝方に至れ

行者一心を以て 憶持して衆綵を布して 善忍を具する 地藏摩訶薩を造れ

其の座極めて巧麗ならしめよ 身(三)焰胎に處せり 雜寶莊嚴の地 綺錯互に

相ひ間へたり

(一)行者云云 次に第二重に於て大日如來の左の方に除蓋障菩薩を畫けよ (二)除蓋障 蓮華、蓮華の上に摩尼寶珠を置く、右は施無畏の手なり

(三)焰胎 光熾其の身に周遍して胎藏にあるが如し

四寶を以て蓮華と爲す 聖者の安住する所なり 及與び大名稱の 無量の諸

の菩薩あり 謂く寶掌と寶手と 及與び持地等と 寶印手と堅意となり 上首の諸の聖尊

各無數の衆と 前後に共に圍繞せり 次に復龍方に於て 當さに虚空藏を畫

くべし

勤勇にして白き衣を被 刀の焰光を生せるを持す 及與び諸の眷屬 (二)正覺

所生の子

各其の次第に隨て 正蓮の上に列坐せり 今彼の(三)眷屬の 大乘の菩薩衆を

説かん

應に善く圖し藻續すべし 諦誠にして迷忘すること勿れ 謂く虚空無垢と

次をば虚空慧と名くると

及び清淨慧等と 行慧と安慧と等なり 是の如きの諸の菩薩は 常に勤めて

精進のものたり

各其の次第の如く 畫いて身を莊嚴せよ 略して大悲藏 曼荼羅の位を説き

(一)正覺 所生の子 佛弟子を指して云ふ

(二)眷屬 虚空無垢と虚空慧と清淨慧と行慧と安慧との五尊なり

(一)爾の時云云
已下は阿闍梨所傳
の曼荼羅を説きた
まふ。

覺りぬ

(一)爾の時に執金剛秘密主、一切衆會の中に於て、諦に大日世尊を觀じ奉つて、目暫くも瞬かす、而して偈を説て言く、

一切智慧者 世間に出現し玉ふ 彼の優曇華の時時に乃ち一たび現はるるが如し

眞言所行の道は 倍復甚だ遇ひ難し 無量俱胝劫に 作れる所の衆の罪業

此の曼荼羅を見るときは 消滅して盡く餘すことなし 何に況んや無量に稱して

眞言の行法に住するをや

此の無上の句の 眞言救世者を行すれば 諸の惡趣を止斷し 一切の苦生せず

若し是の如きの行を修するときは 妙慧深くして動せざるなり

時に普く集會の一切大衆、及び諸の持金剛者、一音聲を以て金剛手を讃歎して言く、

善哉善哉大勤勇 汝已に眞言の行を修行して

能く一切眞言の義を問はんとす 我等も咸く意に思惟することあり

一切現に汝が證驗となるべし 眞言の行法に住するに依るなり

(一)云何云云
曼荼羅彩色の義を問ふ。

(二)門標云云
諸門の標相を問ふ。

及び餘の菩提大心の衆も 當に眞言の法に通達することを得べし

爾の時に執金剛秘密主、復世尊に白して、而も偈を説て言さく、

(一)云何なるか彩色の義 復當に何の色を以てすべき 云何なるか而も運布せん

是の色は誰をか初とせん

(二)門標の旗の量等 廂衛も亦是の如し 云何なるか諸門を建てん 願くは尊

其の量を説き玉へ

食と華と香等と 及與び衆の寶瓶とを奉る 云何んが弟子を引かん 云何ん

が灌頂せしめん

云何なるか師を供養せん 願くは護摩の處を説き玉へ 云何んが眞言の相

(三)云何んが三昧に住する

是の如く問を發し已て 牟尼諸法の王 持金剛慧に告げ玉はく 一心にして

諦に聽くべし

最勝の眞言の道は (一)大乘の果を出生す 汝今ま我に請問す 大有情の爲に

説かん

(一)云何云云
七眞言三昧門淺深
差別の相を問ふ、
此れ持曼荼羅を建
立する支分なり。

(二)大乘云云
即ち是れ佛の無上の
覺智なり。

(二) 法界云云 眞淨の菩提心を法界の味と云ふ。即ち無過上味にして曼荼羅味なり。
 (三) 潔白云云 白色は日如来、赤は寶華王如来、黄は開敷華王如来、青は無量壽如来、黒は天鼓雷音如来の色なり。

(四) 華臺 十六指の量なり。是は極少量なり。此の句は是れ亂脱なり。第二卷九丁右より來る。此れ正覺壇に釋するが如し。疏

(五) 大護者 實に其の門の形亞字の如くして彼の曲の處に二龍と門の兩方に大護者と之れあるべし。然れども略受茶羅の故に唯だ門を畫きて下人に畫き亞曲の形なきなり。

四四

彼の衆生界を染るに (二) 法界の味を以てす 古佛の宣説し給ふ所なり 是れを名けて色の義と爲す

先づ内色を安布す 外色を安布するに非ず (三) 潔白を最も初と爲して 赤色を第二と爲す

是の如く黄と及び青と 漸次にして彰かに著けよ 一切の内は深き玄にせよ 是れを色の前後と謂ふ

門の標幟を建立せんこと 量中胎藏に同うせよ 廂衛も亦是の如し (四) 華臺は十六節にせよ

應さに知るべし彼の初門は 内壇と齊等にせよ 智者外院に於ては 漸次に増加す

彼の廂衛の中に於て 當に (五) 大護者を建つべし 略して三摩地を説かん

心にして縁に住せよ 廣義は復た殊異なり 大衆生諦かに聽け 佛一切空と 正覺の等持とを説き玉ふ

三昧を以て心を證知す 異縁に従つて得るに非ず 彼れ是の如くの境界は一切如来の定なり

故に説いて大空と爲し 薩婆若を圓滿せり

國譯大毘盧遮那成佛神變加持經卷一 終

國譯大毗盧遮那成佛神變加持經卷二

入曼荼羅具緣真言品第二の餘

爾の時に毗盧遮那世尊、(一)一切の諸佛と同じく共に集り會して、各各に一切の聲聞と、緣覺と、菩薩との三昧道を宣説し玉ふ。時に佛(二)一切如來一體速疾力三昧に入り玉ふ。是に於て世尊、復執金剛菩薩に告げて言はく、

我れ(三)昔し道場に坐して 四魔を降伏し 大勤勇の聲を以て 衆生の怖畏を除く

是の時に梵天等 心に喜んで共に稱説す 此に由て諸の世間に 號して大勤勇と名けき

我れ本不生を覺り 語言の道を出過す 諸の過を解脱することを得て 遠く因縁を離れたり

空は虚空に等しと知つて 如實相の智生ず 已に一切の暗を離れて 第一實にして無垢なり

(一)一切の諸佛云々 三重曼荼羅に示す所の種々の類形は皆是れ如來の一種の法門身なり此の故に悉く名けて佛とす云々 (二)一切如來云々 大日如來は一體證得して一念中に無量の衆生を濟度する故に一體速疾力三昧と云ふ (三)我れ者云々 成佛の外迹を示す 我れ本不生云々 已下の五句は梵字の阿婆羅漢、實字の之れ菩提の實義なり

(一)此の第一云云 此の第一は復世諸を釋通して起頼師の由を明すと依りて加持説の證となす (二)爾の時云云 已下金剛手の領解を明す (三)一切の戲論三妄執なり

(一)二諦 密教は二諦は世諦即ち第一義諦なりとす

(一)默然 甚深の法門は言語の失あるを避けて默然といふ (二)一生補處 是れ最上灌頂位なり (三)佛地 佛の心地なり (四)佛地 佛の心地なり (五)佛地 佛の心地なり (六)佛地 佛の心地なり (七)佛地 佛の心地なり (八)佛地 佛の心地なり (九)佛地 佛の心地なり (十)佛地 佛の心地なり

諸趣は唯相と名とのみなり 佛相も復亦然なり (一)此の第一の實際は 加持力を以ての故に

世間を度せんが爲めに 而も文字を以て説き玉ふ

爾の時に執金剛具德者、未だ會て有らざる開敷の眼を得て、頂を以て一切智を禮して、偈を説いて言さく、

諸佛は甚だ希有なり 權智は不思議なり (一)一切の戲論を離れて 法佛自然の智あり

而も世間の爲に説て 衆の希願を満足せしめ玉ふ 眞言の相は是の如し (二)

常二諦に依る 若し諸の衆生有て 此の法教を知る者は 世人の應に供養する事 猶し制底を敬ふが如くすべし

時に執金剛 此の偈を説き已て、諦かに毗盧遮那を觀たてまつつて、目暫くも瞬かず、默然として住す。是に於て世尊、復執金剛秘密主に告げて言はく、復次に秘密主、(一)一生補處の菩薩は、(二)佛地の三昧道に住して造作を離れ、世間の相を知り、業

(二) 八地云云 八地は不退地の故なり七地までは尚ほ二乘に墮する位あり故に沈没の位なり此の八地を觀音の三昧といふ有の生三有にして三界なり

地に住し、堅く佛地に住す。復次に秘密主、(三) 八地の自在の菩薩の三味道は、一切の諸法を得ず。(四) 有の生を離れて、一切の幻化なりと知る。是の故に、世に觀自在者と稱す。復次に秘密主、聲聞衆は、有縁の地に住して、生滅を識り二邊を除き、極觀察智を以て、不隨順の修行の因を得、是れを聲聞の三味道と名く。秘密主、緣覺は、因果を觀察し、無言説の法に住して、無言説を轉せず、一切の法に於て、極滅語言三昧を證せり、是れを緣覺の三味道と名く。秘密主、世間の因果と及び業とは、若は生じ、若は滅して他の主に繫屬して空三昧生ず、是れを世間の三味道と名く。爾の時に世尊、偈を説いて言はく、

秘密主當に知るべし 此等の三味道は 若し佛世尊と 菩薩救世者と

緣覺と聲聞との説に住するときは 諸過を摧害す 若し諸天世間の 眞言法

教の道は

是の如くなるは勤勇者 衆生を利せんが爲の故なり

(三) 復次に云云 已下曼荼羅具様の中眞言の支分を明す

(三) 復次に世尊、執金剛秘密主に告げて言はく。秘密主、汝が當に諦に諸の眞言の相を聽くべし。金剛手の言さく、唯然り、世尊、願樂くは聞かんと欲す。爾の時に世尊、

復頌を説て曰はく。

(一) 等正覺の眞言は 言名成立の相 (二) 因陀羅宗の如くにして 諸義利成就

せり (三) 増加の法句と 本名と行と相應することあり 若は唵字と吽字と 及與び

發磔迦と (四) 増加の法句と 是れ佛頂の名號なり 若は揭唎俱拏と 佉陀耶畔闍と

或は頤唎鳩と等は 是れ佛頂の名號なり 若は揭唎俱拏と 佉陀耶畔闍と

訶那と摩囉也と 鉢吒也等の類は 是れ奉教使者の 諸の忿怒の眞言なり

若し納麼の字と 及び莎縛訶等あらば 是れ三摩地を修する 寂行者の標相なり

若し扇多の字と 微戍陀の字等あらば 當に知るべし能く 一切の希願する所を満足す

此れ正覺佛子 救世者の眞言なり 若し聲聞の所説は (四) 一一の句安布せり 是の中に辟支佛は 復た少しきの差別あり 謂く三昧分異にして 業生を淨め除く

(一) 等正覺云云 眞言の字の無碍を説く時其の義あり説く時其の義あり言さするを言名成立といふ (二) 因陀羅宗 帝釋なり帝釋自ら聲論を造りて一言に於て具に衆義を包含するを喩ふ (三) 増加の法句云 相云 已下眞言の別相を明す眞言は一言の中に具に衆徳を具足せり

(四) 一一の句云 聲聞の眞言には衆徳を含まざるが故に

（一）此の眞言云
云已下眞言の如
實相の義を説く
なり。

（二）等正覺云云
以下隨緣の文字を
明す。秘密主云云
世間の文字語は實
義なるを以ての故
に、眞言の如來來
即ち眞言の實義を
以て之を加持した
まふ、若し法性を
出で、外に別と云
は間の文字ありと
説なり。秘密主云
眞言を乘るとなし、
悉地を求むるもの
新に於て信ずべし
密加特の眞言に依
る成就の故に佛果
云云何なるか云
の母、就中下字義
り字につぎ擧げた

復次に秘密主、（一）此の眞言の相は、一切の諸佛の作る所に非ず、他をして作らしめず、亦隨喜せず、何を以ての故に。是の諸法は、法として是の如くなるを以ての故に。若し諸の如來出現し玉ふにまれ、若は諸の如來出でたまはざるにまれ、諸法は法爾として是の如く住す。謂く、諸の眞言は眞言にして法爾なるが故に。秘密主、（二）等正覺を成せる一切知者、一切見者、世に出興して而も自ら此の法を以て、種種の道を説き種種の樂欲と、種種の諸の衆生の心とに隨つて、種種の句と、種種の文と、種種の方に隨ふ語言と、種種の諸趣の音聲とを以て、而も加持を以て眞言の道を説き玉ふ。秘密主、云何なるか如來の眞言道なる。謂く、此の書寫の文字を加持するなり。秘密主、如來は無量百千俱胝那由他の眞實の誦語、四聖諦、四念處、四神足、十如來力、六波羅蜜、七菩提寶、四梵住、十八佛不共法を、積集し修行し玉へり。秘密主、要を以て之れを言はば、諸の如來の一切智智と、一切如來の自福智力と、自願智力と、一切の法界の加持力とを以て、衆生に隨順して、其の種類の如く、眞言教法を開示し玉ふ。云何なるか眞言教法なる。謂く阿剌字門は一切の諸法は本より生ぜざるが故に。迦字門は一切の諸法は作業を離れたるが故に。佉字門は一切の諸法は虛

空に等しくして得べからざるが故に。哦字門は一切の諸法は一切の行得べからざるが故に。伽字門は一切の諸法は一合相得べからざるが故に。遮字門は一切の諸法は一切の遷變を離れたるが故に。車字門は一切の諸法は影像得べからざるが故に。若字門は一切の諸法は生得べからざるが故に。社字門は一切の諸法は戰敵得べからざるが故に。吒字門は一切の諸法は慢得べからざるが故に。陀字門は一切の諸法は長養得べからざるが故に。拏字門は一切の諸法は怨對得べからざるが故に。茶字門は一切の諸法は執持得べからざるが故に。多字門は一切の諸法は如如得べからざるが故に。他字門は一切の諸法は住處得べからざるが故に。娜字門は一切の諸法は施得べからざるが故に。駄字門は一切の諸法は法界得べからざるが故に。波字門は一切の諸法は第一義諦得べからざるが故に。頗字門は一切の諸法は堅からずして、聚沫の如くなるが故に。麼字門は一切の諸法は縛得べからざるが故に。婆字門は一切の諸法は一切有得べからざるが故に。野字門は一切の諸法は一切乘得べからざるが故に。囉字門は一切の諸法は一切の諸の塵染を離れたるが故に。邏字門は一切の諸法は一切相得べからざるが故に。縛字門は一切の諸法は語言道斷の故に。奢字門は一切の諸法は本

性寂の故に。沙^{シヤ}字門は一切諸法は性鈍の故に。娑^サ字門は一切諸法は一切諦得べからざるが故に。訶^カ字門は一切諸法は因得べからざるが故に。祕密主、仰^{オウ}て若^{ニヤク}摩^マ那^ナ、爾^ニの時に世尊、而も偈を説いて言はく、

(二) 勝願 功德なり。

眞言の三昧門は 一切の願を圓滿す 所謂の諸の如來の 不可思議の果なり
衆の(二)勝願を具足するは 眞言の決定の義なり 三世を超越して 垢無きこと虚空に同じ

不思議の心に住して 諸の事業を起作す 修行の地に到るものに 不思議の果を授け給ふ

是れ第一の眞實なり 諸佛の開示し給ふ所なり 若し此の法教を知りぬれば 當に諸の悉地を得べし

最勝眞實の聲と 眞言と眞言の相と 行者諦かに思惟して 當さに不壞の句を得べし

(三) 爾時云云 上來は廣く受茶羅に入るの眞言の支分なを説く已下は上を踏みて入受茶羅に須る所の次第を説かんことを請ふなり。

(三) 爾の時に執金剛秘密主、佛に白して言さく、希有なり世尊、佛不思議の眞言の相の

道法を説き玉ふ、一切の聲聞緣覺に共せず、亦普く一切衆生の爲に非ず。若し此の眞言道を信する者は、諸の功德の法は皆當に満足すべし。唯願くは世尊、次に曼茶羅に須る所の次第を説き玉へ。是の如く説き已て、世尊復金剛手に告げて、偈を説いて言はく、

持眞言行者 諸の聖尊を供養せんには 當に(一)悦意の華の 潔白黃朱色なる

鉢頭摩と青蓮と 龍華と(二)奔那伽と (三)計薩囉と末利と 得葉藍と瞻蔔と

無憂と底羅劍と 鉢吒羅と娑羅と 是れ等の鮮妙の華は 吉祥にして衆の樂

ふ所とを奉るべし

採り集て以て(四)鬘と爲して 敬心にして而も供養すべし (五)梅檀と及び青木

と 苜蓿香と鬱金と

及び(六)餘の妙塗香とを 盡く持ち以て奉獻すべし (七)沈水と及び松香と 嚩

藍と龍腦と

白檀と膠香等と (八)失利婆塞迦と 及び餘の焚香の類との 芬馥にして世に

稱美せしむ

(一) 悦意云云 供養の具の中、先づ花を明し、佛部には白、蓮華部には黄、金剛部には赤を以てすべし。又諸佛には白、諸菩薩には黄、諸世天には赤を以てすべし。(二) 奔那伽、紅蓮華と譯す、龍の中に向ふ所の花。(三) 計薩囉、計薩囉より娑羅に至る花は皆是れ印度の(四) 鬘、錯雜と莊嚴し或は綴り或は結べるなり。(五) 梅檀、次に塗香を明す。(六) 餘の妙塗香、沈水、甘松、丁香等なり。(七) 沈水、及び松香、次に焚香を明す。(八) 失利婆塞迦、薰陸香なり。

當に法教に随つて 聖尊に奉るべし 復次に大衆生 教に依て諸の食を獻むべし

(一) 曼茶迦 薄餅

(二) 布利迦 著饅餅云ふ

(三) 未塗と失囉

(四) 嬌諾迦

(五) 嬌諾迦

(六) 嬌諾迦

(七) 嬌諾迦

(八) 嬌諾迦

(九) 嬌諾迦

(十) 嬌諾迦

(十一) 嬌諾迦

(十二) 嬌諾迦

(十三) 嬌諾迦

(十四) 嬌諾迦

(十五) 嬌諾迦

(十六) 嬌諾迦

(十七) 嬌諾迦

(十八) 嬌諾迦

(十九) 嬌諾迦

(二十) 嬌諾迦

(二十一) 嬌諾迦

(二十二) 嬌諾迦

(二十三) 嬌諾迦

(二十四) 嬌諾迦

(二十五) 嬌諾迦

(二十六) 嬌諾迦

(二十七) 嬌諾迦

(二十八) 嬌諾迦

(二十九) 嬌諾迦

(三十) 嬌諾迦

(三十一) 嬌諾迦

(三十二) 嬌諾迦

(三十三) 嬌諾迦

(三十四) 嬌諾迦

(三十五) 嬌諾迦

(三十六) 嬌諾迦

(三十七) 嬌諾迦

(三十八) 嬌諾迦

(三十九) 嬌諾迦

(四十) 嬌諾迦

(四十一) 嬌諾迦

(四十二) 嬌諾迦

(四十三) 嬌諾迦

(四十四) 嬌諾迦

(四十五) 嬌諾迦

(四十六) 嬌諾迦

(四十七) 嬌諾迦

(四十八) 嬌諾迦

(四十九) 嬌諾迦

(五十) 嬌諾迦

乳の糜と酪の飯と 歡喜と(一)曼茶迦と 百葉の甘美の餅と 淨妙の砂糖餅と
(二)布利迦と間穴と 及び(三)未塗と失囉と (四)嬌諾迦と無憂と 播鉢吒食等と
是の如きの諸の饅餅と 種種の珍妙の果と 塞茶と石蜜と 糖と蜜と生と熟と蘇と
種種の諸の漿飲と 乳と酪と淨牛味とを奉れ 又諸の燈燭を奉るには 異類の新淨の器に
妙なる香油を盛り満て、 布列して照明を爲せ 四方の縮幡蓋は 種種の色を相ひ間へよ
(五)門標は異形類にして 并に懸くるに鈴と鐸とを以てす (六)或は心を以て供養す 一切皆な之れを作せ
眞言を持する行者 意に存して遺忘すること勿れ (七)次に迦羅奢を具せよ

(五) 門標 内の萬徳を眞に金剛蓮華等の外相に顯示するを云ふ
(六) 或は心云云
(七) 三密の理供養なり

(一六) 二、四、三、五、七、
(二) 迦羅奢 瓶なり

(三) 兼服 上服なり

(三) 次に度云云 受者な道場に引入するの法を明す

六 或は六或は十八なり
二 諸の寶と樂とを備足し 衆の香水を盛り満てよ 枝條上に垂れ布いて 華の果實を間へ挿さめ
塗香等嚴飾し 結護して作淨すべし 頸に繋くるに妙なる衣を以てし
五 瓶の數或は増廣にす
七 上首の諸尊等に 各各に(一)兼服を奉れ 諸餘の大有情にも 一一に皆之れを獻れ
是の如く供養を修して (二)次に度すべき者を引け 之れに灑ぐに淨水を以てし 塗香と華とを授與し
菩提心を發して 諸の如來を憶念せしめよ 一切皆當に 淨き佛家に生るることを得べし
法界生の印と 及與び法輪の印を結んで 金剛有情等 而も用て加護を爲せ
次に當に 自ら諸佛の三昧耶を結んで 三轉して淨衣を加し 眞言法教の如くして

一三三 三たび云云、
是は耳語成なり、
諸餘の未入壇の
のなして聲を聞か
しめざるようにな
す。
一三二 四、亂脱

一三三 寂然護摩
摩法を明す。

而して用て其の首に覆ふ 深く悲念の心を起して (一)三たびを三昧耶を誦すべし
頂に戴くに囉字を以てし
嚴るに大空點を以てし 周帀して焰燈を開け 字門より白光を生ず 一流れ
出づること満月の如し
現に諸の救世に對して 而も淨華を散せしめよ 其の所至の處に隨て 行
人而も尊奉すべし
曼荼羅の初門の 大龍廂衛の處 二門の中間に於て 學人を安立せよ
彼に住して法教に隨て 而も衆の事業を作せ 是の如く弟子をして 遠く
諸の過を離れしむべし
(二)寂然護摩を作すべし 護摩は法に依て住す 初め中胎藏より 第二の外に
至つて
曼荼羅の中に於て 無疑慮の心を作す 其の自の肘量の如く 陥りて光明壇
を作れ
四節を周界と爲し 中に金剛印を表す 師位の右方に 護摩の具支分ををけ

(一)南摩云云 火
天の眞言。

學人其の左に住して 蹲踞して敬心を増す 自ら吉祥草を敷き 地に藉いて
以て安坐す
或は衆の綵色を布すべし 形輝し極めて莊嚴ならしめて 一切の續の事を成せ
よ 是れ略護摩の處なり
周帀して祥茅を布け 端と末と互に相ひ加して 右に旋らし皆廣く厚うして
遍く灑ぐに香水を以てす
火光尊を思惟すべし 一切を哀み感むが故に 當に滿器を持して 而も以て
之れを供養すべし
爾の時に善く住する者は 當に是の眞語を説くべし
(二)南摩三曼多勃駄喃、啞揭喃曳、莎訶、
復三昧の手を以て 次に諸弟子の 慧手の大空指を持して 略して護摩を奉
持し
獻る毎に輒ち誠に誦して 各別に三七に至せ 當に慈愍の心に住すべし 法
に依て眞實の言を以てす

(一)南慶 息災の眞言。

(二)行者云云 已下阿闍梨を供養する法を明す。

(三)上の衣服 金胎兩部の禮なり。

(四)所尊に奉れ 阿闍梨を指す。

(五)今此の云云 此の四句の偈は阿闍梨布施を受くる時之を唱ふる文なり。

(一)南慶三曼多勃駄喃、阿摩訶扇底葉多、扇底羯囉、鉢囉腓摩達勝備惹多、阿婆嚩薩、嚩婆嚩、達麼娑麼多鉢囉鉢多、莎訶、

(二)行者護摩し竟て 教へて嚩施をせしむべし 金と銀と衆の珍寶と 象と馬と及び車乘と

牛と羊と(三)上の衣服と 或は復餘の資財なり 弟子當に誠を至して 恭敬して 深心に自ら忻び慶んで 而も(四)所尊に奉れ 淨捨を修行するを以て 彼をして 歡喜せしむるが故に 已に爲に加護を作して 召して告げて言ふべし (五)今此の勝れたる福田は 一切の佛の説所なり

廣く一切の 諸の有情を饒益せんと欲ふが爲なりと 一切の僧に施し奉つて 當に大なる果を獲べし

盡ること無き大資財は 世に常に随つて生ずと説けり 僧を供養するものは 徳を具するの人に施すを以てなり

是の故に世尊 當に歡喜を發して 力に随つて肴膳を辨へて 現前僧に施すべしと説き玉ふ

(一)爾の時に毗盧遮遮那世尊、復執金剛秘密主に告げて、而も偈を説いて言はく、 汝摩訶薩埵 一心に應に諦に聽くべし 當に廣く灌頂を説くべし 古佛の開示し玉ふ所なり

師(二)第二の壇を作りて 中曼荼羅に對して 外界に圖書せよ 相ひ距ること(三)二肘量なり

四方正に均等なり 内に向いて一門を開け 四執金剛を安じて 其の四維の外に居らしむ 謂く住無戲論と 及び虚空無垢と 無垢眼金剛と 被雜色衣等となり

内心には大蓮華をなせ 八葉及び鬚髮あり 四方の葉の中に於て 四伴侶の菩薩あり

彼の(四)大有情の 往昔の願力に由るが故に 云何んが名て四と爲る 謂く總持自在と

(一)爾の時云云 已下は灌頂法を明す。

(二)第二云云 十尊の灌頂壇なり。大壇に對して小の故に第二と云ふ。

(三)二肘量 正覺壇は最下一肘なり。是より狭きは供物等を置かれざるなり。

(四)大有情 四伴侶の菩薩なり。

(一) 中央云云純
白色をいふ、即ち
六大法界の標幟な
り。

(二) 四寶云云事
物は金、銀、珊瑚、
水精なり。
(三) 普賢云云三
寶院流の瓶行道に
は此の四尊の三味
に入りにて作すな
り。

(四) 攝意 意專注
して異緣せざる如
きないふ。

(五) 次に應云云
凡そ密教の深旨は
皆因縁事に託し
て以て之れを論す
故なり。

念持と利益心と 悲者菩薩等となり 所餘の諸の四葉に 四の奉教者を作る
雜色衣と滿願と 無礙と及び解脱と (一) 中央に法界 不可思議の色を示す
(二) 四寶所成の瓶に 衆の樂寶とを盛り滿つ (三) 普賢と慈氏尊と 及及び除蓋
障との

除一切惡趣と 而も以て加持を作し 彼れを灌頂の時に於て 當に妙蓮の上
に置くべし
獻るに塗香と華と 燈明と及び闍伽とを以てし 上に幢幡蓋を蔭ひ (四) 攝意
の音樂
吉慧伽陀等との 廣多の美妙言を奉れ 是の如く而も供養して 歡喜を得し
め已れ

親り諸の如來に對したてまつりて 而も自ら其の頂に灌ぐ 復當に彼の 妙
善の諸の香と華とを供養すべし
(五) 次に應さに金篋コンバイを執て 彼が前に在て住して 慰諭して歡喜せしめ 是の
如きの伽陀を説くべし

(一) 法螺 受者の
右手に法螺を授け
之を吹かしむるな
り。
(二) 救世の輪 未
來に法を弘傳して
廣く衆生を濟度す
ることなり。

佛子佛汝が爲に 無智の膜を決除し玉ふ 猶し世の醫王の 善く金篋コンバイを用る
が如し
眞言を持する行者 復當に明鏡ミヤウキヤウを執て 無相の法を顯んが爲に 是の妙伽
陀を説くべし
諸法は形像無し 清澄して垢濁無し 執無く言説を離れたり 但し因業より
起る
是の如く此の法の 自性は染汗無きことを知れば 世の無比の利を爲す 汝
佛心より生ずと
次に當に法輪を授て 二足の間に置き 慧の手に(一)法螺を傳へて 復是の如
きの偈を説くべし
汝今日より (二) 救世の輪を轉せよ 其の聲普く周遍して 無上の法螺を吹く
べし
異慧を生ずること勿れ 當に疑悔の心を離れて 世間に於て 勝行の眞言の
道を開示すべし

常に是の如きの願を作して 佛の恩徳を宣べ唱へよ 一切の持金剛 皆當に汝を護念すべし

次に當に弟子に於て 而も悲念の心を起すべし 行者應に中に入て 三昧

耶の偈を示すべし

佛子汝今より 身命を惜しまざるが故に 常に應に法を捨て 菩提心を捨

離し

一切の法を慳慳し 衆生を利せざる行をなすべからず 佛三昧耶を説き玉ふ

汝は善く戒に住する者なり

自の身命を護るが如く 戒を護ることも亦是の如くせよ 應さに誠を至して恭

敬して 聖尊の足を稽首したてまつるべし

所作教に隨て行じ 疑慮の心を生ずること勿れ

三 爾の時に云云 秘密の戒を受くる功德を問答したまふ。

爾の時に金剛手、佛に白して言さく、世尊、若し諸の善男子と善女人と有て、此の大悲藏より生ずる、大曼荼羅王の三昧耶に入る者は、彼れ幾所の福德聚をか獲るや。是の如く説き已て、佛、金剛手に告げて言はく、秘密主、初發心より乃至如來を成す

三 如來の口阿字本不生即ち法界なり。

るまでの、所有の福德聚なり。是の善男子と、善女人の福德聚は彼れと正等なり。秘密主此の法門を以て當に此の如く知るべし、彼の善男子、善女人は、如來の口より生ず、佛心の子なり。若し此の善男子と善女人との在る所の方所には、即ち爲めに佛有て佛事を施作し玉ふべし。此の故に秘密主、若し佛を供養せんと樂欲する者は、當に此の善男子と善女人とを供養すべし。若し佛を見たてまつらんと樂欲せば、即ち當に彼を觀すべし。時に金剛手等の上首の執金剛と、及び普賢等の上首の諸の菩薩と、聲を同うして説て言さく。世尊、我等今より已後、應當に是の善男子と善女人とを恭敬し供養すべし。何を以ての故に、世尊、彼の善男子と善女人とを見れば、佛世尊を見たてまつるに同じきが故なり。

爾の時に毗盧遮那世尊、復一切の衆會を觀じて、執金剛秘密主等の諸の持金剛者と、及び大衆に告て言はく、善男子、如來出世の無量の廣長の語輪の相有り。巧色摩尼の如く、能く一切の願を滿して無量の福德を積集せり、不可害の行に住する三世無比力の眞言句なりと。是の如く言ひ已て、金剛手秘密主等の諸の執金剛、及び大會の衆、同聲に説いて言さく、世尊、今正しく是れ時なり、善逝、今ま正しく是れ時なりと。

(一) 清淨云云是の如きの淨菩提心は萬行の幢旗となすなり。
(二) 明妃 明とは智光、妃とは三昧、即ち大悲胎藏三昧にして菩提の母なり。
(三) 一切云云 一切の聖衆皆實際に至るの眷屬なるが故に、菩薩即ち大日、大日即ち眷屬なるが故に。
(四) 六種云云 秘密の釋には貪瞋癡慢疑の六根本煩惱散亂して佛芽萌生するが故に六種震動と云ふ。

(五) 法界胎藏云

爾の時に毗盧遮那世尊、一切の願を滿する廣長の舌相を出して、遍く一切の佛刹に覆ふ。(一) 清淨法幢高峰觀三昧に住し玉ふ。時に佛定より起つて、爾の時に一切如來の法界に遍く無餘の衆生界を哀愍し玉ふ聲を發し、此の大力大護の(二) 明妃を説て曰はく。南麼薩婆怛他葉帝弊、薩婆佩野微葉帝弊、微濕嚩目契弊、薩婆他舍、欠羅吃沙摩訶沫麗、薩婆怛他、葉多奔呢也備闍帝、吽吽、怛囉磔怛囉磔、阿鉢囉底訶諦、莎訶。時に(三) 一切如來と及び佛子衆と、此の明を説き已て、即時に普遍く佛刹の六種に震動す。一切の菩薩、未だ曾て有らざる開敷眼を得て、諸佛の前に於て意を悦ばしむる言音を以て、而も偈を説いて言はく、
諸佛は甚だ奇特なり 此の大力護を説き玉ふ 一切の佛護持し玉ふこと 城池皆固密なるが如し
彼れの心を護つて住するに由て 有ゆる障をなす者 毗那夜迦等の 惡形の諸の羅刹
一切皆退散す 眞言を念する力の故にと
時に薄伽梵、廣大法界の加持を以て、即ち是の時に於て(五) 法界胎藏三昧に住し玉ふ。

云、成佛の相なり、弘法大師宮中に於て成佛の相は之の定なり。

此の定より起て、入佛三昧耶の持明を説て曰く、
南麼三曼多勃駄喃、阿三迷、咀囉三迷、三麼曳、莎訶
即ち爾の時に、一切の佛刹の一切の菩薩衆會の中に於て、此の三昧耶の明を説き玉ひ已て、諸の佛子等同じく是を聞くもの、一切の法に於て遠越せず。
時に薄伽梵、復法界生の眞言を説いて曰く、
南麼三曼多勃駄喃、達摩駄略、薩縛婆嚩句痕。
金剛薩埵の加持の眞言に曰く、
南麼三曼多伐折囉赦、伐折囉咀麼句痕。
金剛鎧の眞言に曰く、
南麼三曼多伐折囉赦 伐折囉、迦嚩遮鉢。
如來眼又觀の眞言に曰く、
南麼三曼多勃駄喃、怛他揭多斫吃菟尾也嚩路迦也、莎訶。
塗香の眞言に曰く、
南麼三曼多勃駄喃、微輸駄建杜納婆嚩、莎訶。

華の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、摩訶妹咀囉也、毗盧弩葉帝、莎訶。

燒香の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、達摩駄弩睹葉帝、莎訶。

飲食の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、阿囉囉、迦羅羅沫隣捺那彌沫隣捺泥、摩訶沫履、莎訶。

燈の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、但他揭多喇旨、薩巴囉囉囉婆婆婆、伽伽那囉哩耶、莎訶。

闕伽の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、伽伽那三摩三摩、莎訶。

如來頂相の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、伽伽那難多薩發囉囉、微輸駄達摩爾、闍多、莎訶。

如來甲の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、伐折囉入囉囉、微薩普囉鉢、莎訶。

如來圓光の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、入囉囉摩履爾、但他葉多囉旨、莎訶。

如來舌相の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、摩訶摩訶、但他葉多爾訶囉、薩底也達摩鉢囉底瑟恥多莎訶。

息障品第三

爾の時に金剛手、又復毗盧遮那世尊に請ひ問うて、而も偈を説いて言さく、

云何んが道場の時に 諸の障者を淨く除きて 眞言行を修する人をして

能く惱害をなすこと無からしむ

云何んが眞言を持する 云何んが彼れ果を成する 是の如く問を發し已つ

て 大日尊歎じて言はく、

善哉、摩訶薩 快よく是の如きの語を説く 汝が心の問ふ所に隨て 今當に

悉く開き示すべし

障者は自心より生じて 昔の慳慳に隨順す 彼の因を除かんが爲の故に、此の

菩提心を念すべし

息障品第三 此の息障品は金剛手佛に問ひ上るに及び眞言等持論の時に際あり等然も心の際あり等け故に彼の因を起るは則ち諸障自息む此の中能對治は則ち菩提心を念するが故に諸障の因を除去し王の力に由て能く惱害の内障を治すこと此の品にあり云何んが云下有眞言藏品にあり果を成するにあり世間成就品にあり

我も亦是の如く、諸の聖尊の本曼荼羅の位に住し、威神有らしむることを知んぬ。彼れ是の如く住するに由るが故に、如來の教勅をして能く隠し蔽ふこと無し。何を以ての故に、世尊、即ち一切の諸の眞言の三昧耶とは、所謂自種性に住するが故なり。是の故に眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩は、亦當に本位に住して諸の事業をなすべし。又秘密主、若は諸色と彼の諸の聖尊の曼荼羅位とを説かば、諸尊の形相も當に知るべし亦爾なり。是れ先佛の説き玉ふ所なり。秘密主、未來世に於て、劣慧無信の衆生、是の如きの説を聞いて信受すること能はず、無慧を以ての故に疑惑を増す。彼れ唯聞くが如く、堅く住して修行せざれば、自ら損じ他を損ず。是の如きの言を作さん、彼の諸の外道に是の如き法あり、佛の所説に非すと。彼の無智の人は當に是の如きの信解を作すべし。

爾の時に世尊偈を説いて言はく、

一切智の世尊は 諸法に自在を得たり 其の通達する所の如く 方便して衆生を度し玉ふ
是れ諸の先佛の説なり 法を求むるものを利益し玉ふ 彼の愚夫は 諸佛の

法相を知らず 我れ一切の法の 所有の相皆空なりと説く 常に當に眞言に住して 善く作業を決定すべし

(二) 普通眞言藏品第四

爾の時に諸の執金剛には秘密主を上首と爲し、諸の菩薩衆には普賢を上首と爲し、毗盧遮那佛を稽首したてまつり、各各の言音を以て世尊に請白して、此の大悲藏より生ずる大曼荼羅王に於て、通達する所の法界の清淨門の如くに、眞言の法句を演説し玉へと樂欲す。

爾の時に世尊、壞すると無き法爾の加持を以て、諸の執金剛と及び菩薩とに告げて言はく、善男子當に通達する所の法界の如くに、衆生界を淨除する眞實語句を説くべし。

時に普賢菩薩、即時に佛境界莊嚴三昧に住して、無礙力の眞言を説て曰く、南麼三曼多勃駄喃、三麼多奴揭多、微囉闍達摩囉闍多、摩訶摩訶、莎訶。

時に彌勒菩薩、發生普遍大慈三昧に住して、自心の眞言を説いて曰く、南麼三摩多勃駄喃、阿爾單若那、薩婆薩埵捨耶弩藥多、莎訶。

爾の時に虚空藏菩薩、清淨境界三昧に入て、自心の眞言を説いて曰く、

(一) 普通眞言藏 此の中の眞言は、普く一切の方便の眞言等か通該するが故に普通と云ふが故に蓋攝するが故に蓋と云ふ初に息障品の初に云何んが眞言を手にするなり。問に答ふるなり。(二) 爾の時云云 次を擧ぐることは、今上首を擧ぐることは、普賢を説くには、眞言を説くには、其の執金剛の眞言には秘密主を始めとなす。(三) 法界 法體の義にして、六大法界なり。(四) 佛境界 唯佛の自境界自心は萬徳具足の故に無盡莊嚴の義なり。(五) 清淨境界云

云自心の本性清淨の境界に達する三昧なり。
③悲力三昧 大悲の力衆生の障を除く三昧なり。
④普觀三昧 平等の智を以て衆生を觀する三昧なり。

⑤得大勢 執を離れて菩提心の大勢を得る三昧なり。

⑥多羅 眼なり觀音の眼より生じて一切衆生を度するなり。

⑦毗俱胝 觀音の額の髮の中に此の菩薩を現す。

⑧白處尊 白とは菩提心なり、之に住して諸佛を生ず。
⑨何耶揭囉嚩 馬頭と譯す。

南麼三曼多勃駄喃、阿迦奢三麼葉弩葉多、微質但囉、嚩羅達羅、莎訶。

爾の時に除一切蓋障菩薩、③悲力三昧に入て、眞言を説いて曰く、

南麼三曼多勃駄喃、阿薩埵係多毗瘦弩葉多、但嚩但嚩、嚩嚩莎訶。

爾の時に觀世自在菩薩、④普觀三昧に入て、自心と及び眷屬との眞言を説て曰く、

南麼三曼多勃駄喃、薩嚩但他葉多嚩盧吉多、羯嚩摩摩也、囉囉囉若、莎訶。

⑤得大勢の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、髻髻索莎嚩訶。

⑥多羅尊の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、羯嚩奴嚩婆、吠多嚩哆囉拏、莎訶。

⑦毗俱胝の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、薩婆陪也、但囉散爾吽吽薩破吒也、莎嚩訶。

⑧白處尊の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、但他葉多微灑也、三婆吠鉢曇摩履爾莎訶。

⑨何耶揭囉嚩の眞言に曰く、

①金剛云云 菩提心の金剛不壞なるを云ふ。

②忙莽計 母多と譯す、即ち一切の金剛の母なり。

③金剛鎖 諸佛の金剛を以て菩提心を結護して壞せざらしむるなり。

④金剛月照 慈

南麼三曼多勃駄喃、吽佉陀咩閑、薩破吒也、莎訶。
時に地藏菩薩、①金剛不可壞行境界三昧に住して、眞言を説て曰く、
南麼三曼多勃駄喃、訶訶訶、素怛弩、莎訶。

時に文殊師利童子、佛加持神力三昧に住して、自心の眞言を説て曰く、
南麼三曼多勃駄喃、係係俱摩囉迦、微目吃底鉢他悉體多、薩麼囉薩麼囉、鉢囉底然、莎訶。

爾の時に金剛手、大金剛無勝三昧に住して、自心と及び眷屬との眞言を説て曰く、

南麼三曼多伐折囉赦、戰拏麼訶路灑赦吽。

②忙莽計の眞言に曰く、

南麼三曼多伐折囉赦、但囉叱但囉吒若衍底、莎訶。

③金剛鎖の眞言に曰く、

南麼三曼多伐折囉赦、滿陀滿陀也、慕吒慕吒也伐折路嚩婆、吠、薩嚩但囉鉢囉底訶、莎訶。

④金剛月照の眞言に曰く、

怒降三世にして、
金剛手院の尊な
り。額上に月の如
きボクロありて、
電を詞して退散せ
しむ。
○金剛針 至て
細き獨股なり、故
に針といふ、針は
智の銳利を表す。

○寶處三昧 三
乘一乘等の無量の
法寶は彼の處より
出づるが故に寶處
三昧といふ。

○毫相 無量の
功德ある女形な
り。

○無能勝 釋迦
の化身にして、無
能勝は慧を表し、無
次の妃は定を表
す。

○地神 大菩提
心の大地を表す、
此亦釋迦の方便身
なり。

○毗紐 空遊の
義也、即ち迦藍羅
鳥に乗じて自在に
空中を行くなり、
即ち那羅延天な
り。
○嚩捺囉 暴惡
と譯す、他化自在
天なり。

○美音天 辨才
天を稱す。

南麼三曼多伐折囉赦、頤唎吽發吒莎訶。

○金剛針の眞言に曰く、

南麼三曼多伐折囉赦、薩婆達麼備唎吠達備、伐折囉素旨嚩、囉泥、莎訶。

一切持金剛の眞言に曰く、

南麼三曼多伐折囉赦、吽吽吽、發吒發吒發吒髻髻、莎訶。

一切諸奉教者の眞言に曰く、

南麼三曼多伐折囉赦、係係緊質囉也徒、鉈囉俱傳鉈囉俱傳、佉那佉那、鉢履布囉也、
薩婆鉢囉底然、莎訶。

時に釋迦牟尼世尊、○寶處三昧に入て、自心と及び眷屬との眞言を説いて曰く、

南麼三曼多勃駄喃、薩婆吃麗奢備素捺那、薩婆達摩嚩始多鉢囉鉢多、伽伽那三摩三
摩、莎訶。

○毫相の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、嚩囉泥嚩囉鉢囉鉢帝吽、莎訶。

一切諸佛頂の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、鑊鑊鑊、吽吽、發吒發吒莎訶。

○無能勝の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、地囉地囉、囉囉囉囉囉囉、莎訶。

無能勝妃の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、阿鉢囉爾帝、若衍底但泥帝、莎訶。

○地神の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、鉢囉體梅曳、莎訶。

○毗紐天の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、微瑟儂吠、莎訶。

○嚩捺囉の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、嚩捺囉也莎訶。

風神の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、嚩也吠娑嚩訶。

○美音天の眞言に曰く、

國譯大毘盧遮那成佛神變加持經卷二

(一) 彌哩底 羅利
天をいふ。

(二) 閻魔 斯罪と
翻す。

(三) 死王 閻羅明
王なり。

(四) 黑夜神 閻魔
の侍后なり。

(五) 七母 閻魔の
眷屬、即ち七姉妹
にして、疫神なり、
疫病を煩はしむる
ことば、人人に無我
めなり、人人が爲
臨んで必ず無我を
知る無我の大我は
大日なり。
(六) 釋提桓因 帝
釋天をいふ。
(七) 縛耆擊龍王を
いふ。

南麼三曼多勃駄喃、薩囉娑嚩底曳曳、莎訶。

(一) 彌哩底の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、囉吃灑娑地鉢多曳、莎訶。

(二) 閻魔の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、梅嚩娑嚩哆也、莎訶。

(三) 死王の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、沒唎但也吠娑嚩訶。

(四) 黑夜神の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、迦囉囉但喇曳、莎訶訶。

(五) 七母等の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、忙但囉弊、莎嚩訶。

(六) 釋提桓因の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、鏝吃囉也、莎嚩訶。

(七) 縛耆擊龍王の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、阿半鉢多曳、莎嚩訶。

梵天の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、鉢囉闍鉢多曳、莎嚩訶。

日天の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、阿爾但夜耶、莎嚩訶。

月天の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、戰捺囉也、莎嚩訶。

諸龍の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、謎伽設淳曳、莎嚩訶。

難陀と跋難陀との眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、難徒鉢難捺瑜、莎嚩訶。

(一) 時に毗盧遮那世尊、樂欲して自の教跡の不空悉地、一切佛菩薩母、虛空眼明妃の眞

言を説いて曰く、

南麼三曼多勃駄喃、伽伽那鉢囉落囉灑爛、伽伽那捺迷、薩婆觀唵菓多、避娑囉三婆

(二) 時に毗盧云
云已上の菩薩等
其の眞言を説くは、
其の同類を引攝せ
んが爲なり。

吠、入嚩羅那謨阿目伽難、莎訶。

復次ぎに薄伽梵、一切の障を息めんが爲の故に、火生三昧に住して、此の大摧障聖者不動主の眞言を説て曰く、

南麼三曼多伐折囉赦、戰拏摩訶路灑吒、薩破吒也、鉢怛囉迦、悍曼。

復次に、降三世の眞言に曰く、

南麼三曼多伐折囉赦、訶訶訶、微薩麼曳、薩婆他他揭多微灑也山婆嚩、怛囉路枳也微若也、鉢若、莎訶。

諸の聲聞の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、係路鉢囉底也、微葉多、羯磨涅、闍多、鉢。

諸の緣覺の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、嚩莎訶。

普一切佛菩薩心眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、薩婆勃駄菩提薩埵、訶唎捺耶、寔夜吠奢囉、南麼薩婆尾泥、莎訶。

(一) 降三世 三世とは貪瞋癡の三毒、亦三界なり、三界の主を現じて、亦三毒を降伏す、初發心より守護して佛果を成ぜしむるは不動明王なり。世間難調の衆生を降伏するは降三世明王なり。大日如来大悲を以て衆生を利益せんが爲に三昧の中に於て玉ふ。眞言を現じて

(二) 普一切佛云云 此の眞言は佛部の諸尊の眞言を知らざれば之を用ふべきなり。

(一) 普世天 諸天八部の通眞言なり。

(二) 一切諸佛遍知院の大勇猛菩薩の眞言となす。

(三) 不可越云云 不可越と次の相向の西門に在て之れを守り、又教命する所あれば必ず之れを行す。

(一) 普世天等の諸の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、路迦路迦羯囉也、薩婆提婆那伽藥吃沙、健達婆阿蘇囉葉嚩葵緊捺囉摩護囉伽爾、訶唎捺耶、寔夜羯囉也、微質但囉葉底、莎訶。

一切諸佛の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、薩婆他、微麼底、微枳囉儂、達摩駄路囉闍多、參參訶、莎訶。

不可越守護門者の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、訶囉駄、履沙摩訶路灑儂、佉那也薩鏤他他葉多然矩嚩、莎訶。

相向守護門者の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、係摩訶鉢囉、戰拏阿毗目佉、葉唎訶拏佉那耶、緊質囉也徒、三麼耶麼拏娑麼囉、莎訶。

結大界の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、薩婆他囉弩葉帝、滿駄也徒瞞摩訶三摩耶囉闍帝、娑麼囉囉、阿鉢囉訶諦、駄迦駄迦、折囉折囉、滿駄滿駄、捺奢囉、薩婆他他葉多拏填帝、鉢囉嚩囉達摩臘駄微若曳、薄伽縛底、微矩魔微矩麗、嚩嚩補履、毗矩履、莎訶。

已下は種子の眞言
 既に一字より能く
 説く一語に初に種
 多を生ずる故に種
 字と名く。初に種
 の字より諸字を出
 生ずる故なり。

〇菩提の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄南、阿。
 行の眞言に曰く、南麼三曼多駄喃、阿。
 成菩提の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、暗。
 涅槃の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、噯。
 降三世の眞言に曰く、南麼三曼多伐折囉報、訶。
 不動尊の眞言に曰く、南麼三曼多伐折囉報、悍。
 除蓋障の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、阿。
 觀自在の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、娑。
 金剛手の眞言に曰く、南麼三曼多伐折囉報、嚩。
 妙吉祥の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、瞞。
 虚空眼の眞言に曰く、南麼三曼多勃多喃、嚴。
 法界の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、嚩。
 大勤勇の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、欠。
 水自在の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、嚩。

多羅尊の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、耽。
 毗俱胝の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、勃囉。
 得大勢の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、參。
 白處尊の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、半。
 何耶揭哩婆の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、含。
 耶輸陀羅の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、閻。
 寶掌の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、參。
 光網の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、髻。
 釋迦牟尼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、婆。
 三佛頂の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、鉢吒嚩。
 白傘佛頂の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、藍。
 勝佛頂の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、苦。
 最勝佛頂の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、賜。
 火聚佛頂の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、怛唵。

除障佛頂の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、訶唵。
 世明妃の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、耽含半含閻。
 無能勝の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、訶。
 地神の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、微。
 髻設尼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、枳履。
 鄔波髻設尼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、徧履。
 質多童子の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、弭履。
 財慧童子の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、係履。
 除疑怖の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、訶娑難。
 施一切衆生無畏の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、囉娑難。
 除一切惡趣の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、持憎娑難。
 哀愍慧の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、微訶娑難。
 大慈生の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、詔。
 大悲纏の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、閻。

除一切熱惱の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、縊。
 不思議慧の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、汗。
 寶處の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、難。
 寶手の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、衫。
 持地の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、唵。
 復次の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、髻。
 寶印手の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、泛。
 堅固意の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、蔽。
 虚空無垢の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、含。
 虚空慧の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、唵。
 清淨慧の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、藥丹。
 行慧の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、地嚩。
 安慧の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、訶。
 諸奉教者の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、地室唎哈沒嚩。

諸菩薩所説の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、吃沙拏多囉闍劔。
淨居天の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、滿拏囉麼、達摩三婆嚩、微婆、嚩迦那、
三三三、莎訶。

羅刹婆の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、吃囉計履、

諸荼吉尼の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、訶唎訶。

諸藥叉女の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、藥吃叉尾爾夜達囉。

諸毗舍遮の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、比旨比旨。

諸部多の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、喝溢喝伊惜散寧。

諸阿修羅の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、囉吒囉吒特惜耽沒囉波囉。

諸摩睺羅伽の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、藥羅藍尾囉藍。

諸緊那羅の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、訶散難微訶散難。

諸人の眞言に曰く、南麼三曼多勃駄喃、壹車鉢嚩、麼弩麼曳迷、莎訶。

秘密主、是れ等の一切の眞言を、我れ已に宣説せり。是の中の一切の眞言の心は、汝當に誦に聽くべし、所謂る阿字門なり。此の一切諸の眞言の心を念するを最無上と爲

す。是れ一切の眞言の住する所なり。此の眞言に於て而も決定を得べし。

國譯大毘盧遮那成佛神變加持經卷第一終

(一) 尸羅 性戒といふ、性戒とは佛出世して制したまはされども、自然に本性として成就する戒なり。

(二) 若は行者云云 已下は行者の十八徳を明す。

(三) 眞言の實義 一字の中にも無盡の理趣あることを了知するをいふ。
(四) 常に坐禪 密瑜伽の三昧を云ふ。
(五) 秘密主 已下眞言成就の相を明す。
(六) 自在悦満 伊舍那天なり。明とは眞言なり。
(七) 摩醯首羅 色界第四禪なり。勝色意生は眞言の名なり。

(八) 阿修羅云云 已下世人の呪術の不思議力を以て如來の眞言加持の神力に比するなり。

(九) 三世無礙力 自證の大智。
(一〇) 如來加持不思議力 化他の大悲。
(一一) 三摩鉢底 等に至りて之れ定なり。
(一二) 一の音聲 本有の阿字なり。
(一三) 四處 四阿にして阿、阿、暗、嚵なり。
(一四) 至らざる處なし 此の眞言は、大日經一部始終の意は唯此の眞言にあり。
(一五) 聲聞 是れ二乘の聲聞にあらざる如來法界の音聲なり。

く未だ至らざる所に至らしむると、佛菩薩と處を同うすることを得るとなり。復二つの事あり、謂く(一)尸羅に住すると、人天に生まるとなり。善哉、諦に聽き善く思ひ之れを念すべし。我當に眞言の成就を流出する相應の句を宣説すべし。諸の流出相應の句は、眞言門に菩提を修する諸の菩薩。速に是の中に於て當に眞言の悉地を得べし。

(二) 若は行者曼荼羅を見奉りて、尊に印可せられ、眞語を成就し、菩提心を發し、深く信じ、慈悲あつて慳慳あることなく、調伏に住し善く縁より生ずる所を分別し、禁戒を受持し、善く衆學に住し、巧なる方便を具し、勇健にして時と非時とを知り、好んで惠捨を行じ、怖れ畏るること無く、眞言行法を勤め修し、眞言の實義に通達し、常に坐禪を樂ひ、成就を作さんと樂ふ。(三) 秘密主、譬へば欲界に自在悦満意の明あり。乃至一切の欲處の天子、此に於て迷ひ醉ふて、衆妙の雜類の戯れたる笑を出し、及び種種の雜類の受用遍受用を現して、自の變化する所を他化自在天等に授け與へ、而も亦自ら之れを受用するが如く、又善男子、摩醯首羅天の勝意生の明あり、能く三千大千世界の衆生の利益を作し、一切の受用遍受用を化して、淨居の諸天に授け與へ、亦復自ら之れを受用するが如く、又幻術の眞言の能く種種の園林人物を現するが

如く、(一)阿修羅の眞言の幻化の事を現するが如く、世の咒術の毒及び寒熱等を攝し、摩怛哩神の眞言の能く衆生の疾疫灾癘を作し、及び世間の咒術の、衆毒及び寒熱等を攝除し能く熾なる火を變じて而も清涼を生ずるが如し。是の故に善男子、當に是の如きの流出の句の、眞言の威徳を信すべし。此の眞言の威徳は、眞言の中より出るにも非ず、亦衆生に入るにもあらず。持誦者の處に於て、得べきこと有るにもあらず。善男子眞言加持力の故に、法爾にして而も生じ過ぎ越ゆる所無し、三昧を越えざるを以ての故に、甚深不思議の縁より生ずる理なるが故に。是の故に善男子當に不思議の法性に隨順し通達して、常に眞言道を斷絶せざるべし。

爾の時に世尊、復た(二)三世無礙力の依たる、(三)如來加持不思議力の依たる、莊嚴清淨藏三昧に住し給ふ。即時に世尊、三摩鉢底の中より、無盡界の無盡の語表を出し給ふ。法界力と無等力と正等覺の信解とに依て、(四)一の音聲を以て、四處に流出し玉ふなり。普く一切法界に遍く虚空と等しうして、(五)至らざる所なし。眞言に曰く、

南摩薩婆他他葉帝弊、微濕嚵目契弊、葉婆他、阿阿闇嚵

正等覺の心、是れより普く遍す、即時に一切法界の諸の聲聞、正等覺標幟の音より、而

○聲を出し、阿字の聲を出し、展轉無窮に一阿より出す。

○此を遍く云く一切世界に遍するなり。即ち阿字をいふ。

○園苑 大菩提心を表す。此處寛うして道を修するに第一の上處なり。
○巖窟 是れ甚深の禪定なり。菩提心の獅子王其中に住す。
○初安住 淺略には安樂なり。深秘には初地なり。
○一心 上の我等の中の一の眞言なり。
○心を以て 本尊の眞言の心、即阿字を以て自身の上に安くなり。

○第二正覺句 前には菩提心を觀じて、今は本尊の形を觀す。
○鏡受茶羅 幽遠の義を示す。

○一月 初地菩提心爲因の位。二月は二地以上大悲爲根、他の月(第三月)は方便爲究竟、此中には具に三句の行法を説く。
○了字 見なり。了に字輪の分明に現るゝを見るを。一落又といふ。
○第二月 是より第二月なり。大悲を根となすの句(余)他の月 第三月中の前の十五日さいふは前の十五日なり。

も互に○聲を出す。諸の菩薩是れを聞き已つて未だ曾て有らざる開敷眼を得、微妙の言音を發して、一切智離熱者の前に於て、而も頌を説いて曰く。

奇哉眞言の行 能く廣大の智を具す 若し○此を遍く布する者は 佛兩足尊と成る

是の故に勤て精進して 諸佛の語心に於て 常に無間の修を作し 心を淨め我を離るべし

爾の時に薄伽梵 復此の法句を説き玉ふ 正等覺の心に於て 成就を作さんとする者は

○園苑と僧房とに於てし 若は○巖窟の中に在てし 或は意に樂ふ所の處にして 彼の菩提心を觀せよ

乃至○初安住に至れば 疑慮の意を生せず 隨て彼の○一心を取て ○心を以て心に置き

極淨の句を證して 無垢にして安すること不動なり 分別せざることを鏡の如く現前することは甚だ微細なり

若し彼常に觀察し 修習して而も相應すれば 乃至本所尊と 自身の像と皆現す

○第二の正覺句は ○鏡曼茶羅の 大蓮華王座に於て 深邃にして三昧に住す 總持の髮髻冠にして 圍繞するに無量の光あり 妄執分別を離れて 本寂なること虚空の如し

彼の中に於て思惟して 攝意の念誦を作せ ○一月に等引を修め 持して○一落又を滿せよ 持眞言の法則と爲す 次に○第二月に於て 塗香と華とを奉つて

而も以て 種種の衆生類を饒益することを作せ 又復○他の月に於て 諸の利養を捨棄せよ 時に彼瑜伽に於て 思惟すること自在なり 一切に障なくして 諸の群生を安樂ならしめんと願へ

如來の 稱讚し給ふ所の圓果を成せんと樂欲し 或は一切の 有情の衆の希

(一) 攀縁 利他の心なり。

願を満足す

理に應じて障蓋無く

而も此の(二)攀縁を生ず

傍生相ひ噉食する

所有の苦

み永く除き

常に諸の鬼界をして

飲食皆充滿せしめ

地獄の中に苦を受くる

種種の諸

の楚毒

當に願くは速に除滅すべし

我が功德を以ての故に

及び餘の無量の門

數

數に心に思惟して

廣大の悲愍を發し

(三)三種の加持の句を以て

一切を相念して

心に眞言を

誦持す

(四)我が功德力と

如來の加持力と

及び法界力と

衆生界に周遍せるを以て

諸の念求の義利

悉く皆之れを饒益す

彼れ一切理に如へば

念所皆成就す

(五)是に於て薄伽梵、即ち爾の時に於て、虚空等力虚空藏轉、明妃を説いて曰く

南麼薩婆怛他葉帝弊、微濕嚩目契弊、薩婆他、缺、唵拏葉帝薩巨囉係門、伽伽娜劔

莎訶

(三)三種の加持下の三力の偈を指す。

(四)我が功德力云云 三力を示す。

(五)是に於て一切の所願を成就せしめん爲に此眞言を説くなり。

此を持すること(三)三たび轉すれば、彼の所生に隨て、善願皆な亦た成就す。

行人(三)滿月に於て

次に入て持誦を作せ

山峰と(三)牛欄の中と

寒林と或は

河灘と

四衢と獨樹下と

忙怛哩天の室となり

一切金剛の色にせよ

嚴淨にして金

剛に同じ

彼の中の諸の障者

攝伏せられて心迷亂せん

(四)四方相ひ周匝せよ

一門及

び通道あり

金剛互に連屬し

金剛結で相應せよ

門門に二つの守護あり

不可越と相向

となり

手を擬して而かも指を上げ

朱目にして奮怒の形なり

慍慍に隅角に

輪羅

焰光の印を畫せよ

中に(五)妙金剛の座あり

方位正しく相ひ直てよ

其の上に大蓮花あり

八葉

にして鬚髮敷けたり

當に金剛手の(六)金剛の慧印を結ぶべし

一切の佛を稽首し

數數堅く誓願して

(五)妙金剛十字獨磨の上に蓮華を畫くなり。

(六)金剛の慧印五股金剛の印なり。

(四)四方云云 其の壇は正しく四方に作る。

(三)牛欄 此の中には牛の尿尿を充滿せる故に至極の淨處となす。

(三)三たび云云 此の眞言を誦するを云ふ。

(三)滿月 白月の十五日なり、此の日作成就法をなすなり。

（二）圓光、これ成就の相なり、その上成は初夜に煙氣生じ、五更に炎出づ中成は炎の出ずる唯、煙氣の生ずるのみ、種種の色身善現色身なり。

（三）秘密主、此の下は、道場の建立を説く、この深旨を説く、一切の分別萬徳の法に分別を見るは、此の分別の故なり、此の分別は法性に亘るの體には法空といふ。故に本性

應に是の處を護持し 及び諸の藥物を淨むべし 此の夜に於て持誦すれば
清淨にして障礙なし

或は中夜分に於て 或は日出の時に於て 彼の藥物當に轉じて （三）圓光普く
暉焰すべし

眞言者自ら取て 大空に遊歩し 壽に住して大威徳あり 生死に於て自在なり
世界の頂に行いて （三）種種の色身を現す 具徳吉祥者 展轉して而も供養せよ
眞言の所成の物 是を名けて悉地と爲す 分別の藥物を以て 無分別を成就す

（三）秘密主、一切世界の、諸の現在等の如來應正等覺は、方便波羅蜜を通達し玉へり。
彼の如來は（四）一切の分別は本性空なりと知れども、方便波羅蜜の力を以ての故に、而も
無爲に於て、有爲を以て表と爲す。展轉相應して、而も衆生の爲に示現して法界に遍
す。法を見て安樂に住し、歡喜の心を發すことを得しめ、或は長壽を得、五欲に嬉
戲して而も自ら娛樂し、佛世尊の爲に供養を作す。是の如きの句を證すること、一切
世人は信すること能はざる所なり。此の義利を見玉ふが故に、歡喜の心を以て、此の
菩薩の眞言行道の次第法則を説き玉ふ。何を以ての故に、無量劫に於て、勤め求めて

（二）計都云云、幢
さいふ、羯伽は刀、
眞陀摩尼は如意
寶、安勝那藥は龍
鬚、盧遮那は牛黃
なり。
（三）秘密主云云
已上は藥力の成就
已下は藥力の成就
因縁を離れて法爾
自然の義を説く。
（四）諸の因果云
云、因の外に果を
求むるをいふ、密
の義は因即是果な
り。
（五）眞言と諸の眞
言云、上の眞言
は字相、下の眞言
の相は字義字相な
り。
（六）此の因云云
因と云ふも即ち果
にして因果一體な
り、故に因果にあら
ず、故に尙ほ空ま
いふ。
（七）悉く因果、眞
言の果は本有に
ざるが故に、あら
ざるが故に、眞
言の正等覺云云
阿の一字より四阿
の字を生ずるを正

諸の苦行を修すれども得る能はざる所なり。而るに眞言門に道を行する、諸の菩薩は
即ち此の生に於て、而も之れを獲得す。復次に秘密主、眞言門に、菩薩の行を修する
菩薩は、是の如く（一）計都と、羯伽、傘蓋と、履屣と、眞陀摩尼と、安勝那藥と、盧
遮那等とを以て、三落叉を持して而も成就を作し、亦悉地を得。（二）秘密主、若し方便を
具する、善男子と善女人とは、樂ひ求むる所に隨つて、而も所作あれば、彼れ唯心自
在にして而も成就を得。秘密主（三）諸の因果を樂欲するものは、秘密主、彼の愚夫の能
く（四）眞言と諸の眞言の相とを知るに非ず。何を以ての故に、
因は作者に非ず 彼の果は則ち不生なりと説く （五）此の因は因すら尙空なり
云何んが果あらん

當に知るべし眞言の果は （六）悉く因果を離れたり 乃至身に 無相の三摩地
を證觸するとき

眞言者は當に知るべし 悉地は心より生ずることを

爾の時に金剛手、佛に白して言さく、世尊、唯願くば、復此の（七）正等覺の句、悉地
成就の句を説き玉へ。諸の此の法を見る善男子と、善女人等とは、心に歡喜を得、安

正覺の句に於て
悉地成就する法を
問ふなり。

(三) 三落又三種語
なり、本尊と種字
と圓明との三種を
觀するを三落又こ
いふ。
(三) 耳の上云云
阿字を耳に想ひ布
して念誦すれば、
即ち耳根清淨な
り。
(四) 三時云云日
日三時なり、秘釋
せば字句と本尊
との三なり。
(五) 囉闍 王譯
す。

樂を受けて住し、法界を害せず。何を以ての故に、世尊、法界とは、一切如來應正等覺なり、説いて即ち不思議界と名く。是の故に世尊、眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩は、是の法界に通達することを得、分折し破壊すべからず。是の如く説き已て、世尊執金剛秘密主に告げて言はく、善哉善哉、秘密主、汝復た善哉、能く如來に是の如きの儀を問ひたてまつる。汝當に諦に聽き善く之を思ひ念すべし、吾今演說せん。秘密主の言さく、是の如し、世尊、願くば聞かんと欲す。佛、秘密主に告げて言はく、阿字門を以て而も成就を作すべし。若は僧の所在の處にあり、若は山窟の中にし、或は淨室に於てすべし。阿字を以て遍く一切の支分に布して、(三)三落又を持すべし。次に満月に於て、其所有を盡して以て供養すべし。乃至普賢菩薩と、文珠師利と、執金剛等と或は餘の聖天現前し、頂を摩でて唱へて言く、善哉行者と、當に稽首して禮を作すべし。闍伽水を奉れ、即時に薩提心を忘れざる三昧を得、又是の如く身心輕安なるを以て、而も之れを誦習すれば、當に隨生と心清淨と心清淨とを得べし。(三)耳の上に於て之を持すれば、當に耳根清淨なることを得べし。阿字門を以て出入の息と作し、(四)三時に思惟せよ。行者爾の時に能く持すれば、壽命長劫にして世に住す。(五)囉闍等に愛敬せられ

(二) 詞字 因不可
得の故なり。
(三) 商佉 權智説
法の德標具にて示
す。

(三) 見 世間の
果、非見は世間
の果なり。

(四) 自の眞實 自
身の實相を觀ぜよ
と。
(五) 阿字 如來な
り。
(六) 金剛の標 三
股金剛杵なり。
(七) 一切處尊佛
大日如來の形。

んと願はば、即ち(二)詞字門を以て、度すべき所の者を作て、鉢頭摩華を授け與へ、自ら(三)商佉を持して、而も互に相觀て即ち歡喜を生ずべし。爾の時に毗盧遮那世尊、復一切の大會を觀て、執金剛秘密主に告げて言はく、金剛手、諸の如來の意より生じて業戲行舞をなすことあり。廣く品類を演べ、四界を攝持して、心王に安住し、虚空に等同なり。廣大の(三)見と非見との果を成就し、一切の聲聞と及び辟支佛と諸の菩薩との位を出生し、眞言門に修行する諸の菩薩をして一切の希願皆な悉く満足して、種種の業を具して無量の衆生を利益せしむ。汝當に諦に聰き善く之れを思念すべし、吾今、演說せん。秘密主、云んが行舞して、一切の廣大の成壞の果を作し、持眞言者一切を親しく證するや。爾の時に世尊、偈を説いて曰はく、
行者次第の如く 先づ(四)自の眞實を作せ 前の如く法に依て住し 正しく(五)如來を思念せよ
阿字を自體と爲し 并に大空點を置け 端嚴にして遍く金色なり 四角に(六)金剛の標をなせ
彼の中に於て (七)一切處尊の佛を思念すべし 是れ諸の正等覺 自の眞實相

を説く

修行して疑慮せざれば 自の眞實の相生す 當に世間の 一切衆の爲に利樂を得しめ

廣大の稀有を具し 如幻の句に住す 無始の時より宿植の 無智諸有の迫は行者等引を成するを以て 一切皆な消除す 若し彼の心の 無上菩提心を觀すれば

眞言の業を持するが故に 淨と非淨との果に於て 理に應じて常に染無きこと蓮の淤泥を出るが如し

何に況んや自體に於て 人中尊と成ることを得るをや

爾の時に毗盧遮那世尊、又復降伏四魔金剛戲三昧に住して、四魔を降伏し、六趣を解脱して、一切智智を満足する、金剛の字句を説き玉ふ。

南麼三曼多勃駄喃、阿囉訶囉訶

時に金剛手秘密主等の諸の執金剛と普賢等の諸の菩薩と、及び一切の大衆と、未だ曾て有らざる開敷眼を得、一切の薩婆若を稽首して、而も偈を説いて言く、

(一) 爾の時云云 已下五字の秘密眞言にて降魔六月成就の法なり
(二) 南麼云云 五字は本經の最肝要にして又一切の教法皆五字の功能なり
(三) 薩婆若 一切智々といふ

此は諸佛と菩薩 救世の諸の庫藏なり 是に由て一切の佛と 菩薩救世者と及び因縁覺と 聲聞の煩惱を害する 能く行く所の地に遍じて 種種の神通を起す

彼無上智と 正覺無上智とを得 是の故に願くは 廣く此の教の諸の方便と及び(一)布想等との 種種の衆の事業を説き玉へ 諸の大乗 無上の眞言行を志求せんもの

法を見て安住するもの 當に歡喜住を得べし 是の如きの偈を説き已つて

大日世尊の言はく

普く皆誦に聽き 一心にして等引に住すべし (二)大金剛地際を以て 時に下身を加持す

此の法を説かんが爲の故に 而も菩提座を現す 最勝の阿字の句は 大因陀羅輪なり

當に知るべし内外等しく 金剛曼荼羅なり 中に一切を思惟す 説いて瑜伽の座と名く

(一) 布想 身に字を布するを布字と云ひ、心に觀するは想字なり

(二) 大金剛地際 已下無點の阿字を提説く。下身は菩提心ないふ。

(一) 阿字云云次已下に長聲の阿を説く即ち行なり。(二) 常に云云已下暗字を説く即ち菩薩の果なり。(三) 金剛慧印内五股の印なり。

(四) 大金剛句住處なり句は止る處の故に阿字方壇の住所なり。

(五) 攝持次に喝字を説き一切の障を攝除するなり。

(一) 阿字は第一命なり 是を引攝の句と爲す (二) 常に大空點を安すべし 能く攝して諸の果を授く

行者一月に於て (三) 金剛慧印を結で 三時に持誦を作せ 無智の城を摧き毀ち不動堅固なることを得て 天、修羅も壊ること莫し 乃至自の意に隨つて

増益の事成就す 行者一切常に 曼荼羅の中に 金色光明の身を作れ 上に髮髻冠を持す

正覺三昧に住せり (四) 大金剛の句と名く 金剛と蓮花と刀と 素鵝と及び金と地と

眞陀末尼寶と 是等の衆の器物を 大因陀羅に觀じて 而も諸の悉地を作すべし

(五) 今攝持の法を説かん 一切一心に聽くべし 行者一縁に 八峯の彌盧山を想へ

上に妙なる蓮花を觀すべし 金剛智印を立てたり 瑜伽者上に於て 字門と威焰の光あり

(一) 百轉云云喝字を以て百迴加持するをいふ。

(二) 是等云云上説の四阿は一阿を以て惣體とす。(三) 佛子云云。佛子の説文なり。(四) 體文の故に第一に云ふ。水輪曼荼羅なり。純白色圓形にして息災なり。

(五) 輪圓九重之識なり。

而も用つて其の頂に置け 安住して傾き動せず (一) 百轉する所持の藥を行者之れを服すべし

先世の業より生ずる疾 (二) 是等悉く除き癒す (三) 佛子復た應に聽くべし

第一の嚙字門は 雪と乳と商佉との色なり 而も臍の中より 鮮かなる白蓮花の臺を起して

而も彼の中に於て住す 甚深寂然の定なり 秋の夕の素き月の光あり 是の如きの曼荼羅は 諸佛希有なりと説き玉ふ

思惟するに純白を以てし (五) 輪圓九重を成ず 霏霧の中に住して 一切の熱惱を除く

淨乳は珠曼と 水精と月の光との如くにして 普遍して而も流れ注ぎ 一切の處に充ち満てり

行者心に思惟すれば 諸の障毒を出離す 是の如く圓き壇に於て 等引して成就を作せ

(二) 頗臍迦 水精
に似たり。

(三) 空點 點を安
するなり。

(四) 囉字門 火輪
の曼荼羅を明す。
(五) 無擇報 貴賤
を擇ばざるなり。

乳と酪と生と熟との酥と (二) 頗臍迦と珠曼と 藕と水と等の衆の物 次第に
 悉地を成す 當に無量壽を得べし 殊特の身を應現し 一切の患を除息し 天と人と咸く
 恭ひ敬ふ 多聞にして總持を成じ 善慧にして淨無垢なり 斯に由て成就を作せ 速に
 悉地の果に登る 是を寂災者の 吉祥曼荼羅と名く 第一攝持の相は 安するに (三) 大空點を以
 てす (四) 囉字は勝眞實なり 佛火中の上と説き玉ふ 所有の衆の罪業 應に (五) 無擇
 の報を受くべし 等引して皆消除す 住する所の三角の形 悅意にして遍く
 形赤なり 寂然にして焰曼を周らし 三角を其の心に在け 相應して彼の中に 囉字大
 空點を觀すべし

(二) 訶字已下 風
輪曼荼羅を説く。

智者瑜伽に如ひぬれば 此を以て衆の事を成す 日曜の諸の眷屬と 及び一
 切の火を作すと 衆の支分を消枯すると 是等作すべき所は 皆智火輪
 を於てす (三) 訶字は第一實なり 風輪の生ずる所なり 及び與因業と果との 諸の種子
 増長す 彼の一切を摧き壞するには 并に大空點を以てす 今彼の色像を説かん 深
 く玄くして大威徳あり 暴く怒れる形を示し現はし 焰曼普く周遍して 曼荼羅位に住す 智者眉の
 間に 深く青き半月輪を觀せよ 吹て幢幡を動すの相あり 而も彼の中に於て 最
 勝の訶字門を想へ 彼の曼荼羅に住して 所應の事を成就し 一切の義利を作し 諸の衆生に應
 現す

(一) 諸の因 空輪
曼荼羅を示す 即
ち虚空は無相なる
故に方圓三角等な
し、無相即相の故
に種種色をなすな
り。

(二) 爾時 已下上
説の五字の義を細
説するなり。
(三) 内外云 内
は自身外は所住の
壇なり。

(一) 諸の義利云
云 諸法を平等に
觀ぜよと、故に次
に礫石と金寶とを
等ふすといふ。
(二) 牟尼 諸佛の
通號なり。

此の身を捨てずして 神境通を逮得し 大空位に遊歩して 而も身秘密を成す
天耳と眼との根淨にして 能く秘密の處を開く 此の一心檀に住して 而も
衆の事業を成す

菩薩大名稱 初て菩提場に坐して 魔軍衆を降伏し玉ふ (二) 諸の因不可得なり
因に性無ければ果も無し 是の如きの業も不生なり 彼の三に性無きが故に
而も空の智慧を得

大徳正遍知 彼の色を宣説し玉ふ 佉字及び空點は 尊勝にして虚空の空な
り

兼て慧刀印を持ちぬれば 作す所速に成就す 法輪キリリンと及び羂索クンサクと 羯伽キヤガと那
刺遮ラシヤと

并に目羯嵐ガキヤラシ等と 久からずして斯の句を成す

(三) 爾の時に毗盧遮那世尊、大衆會を觀じて、執金剛秘密主に告げて、而も偈を説いて
言はく、
若し眞言門に於て 修行する諸の菩薩は 阿字を自身と爲して (三) 内外悉く

同く等しうす

(一) 諸の義利皆捨てて 礫石と金寶とを等しうす 衆の罪業 及及び貪瞋等を

遠離して 當に俱に清淨なることを得べし 諸佛(三)牟尼に同じく 能く諸の利益を作し

一切の諸の過を離る 復次に嚙字に於て 行者瑜伽に依るときは 作業儀式を解す 衆生を利益す

るが故に 内身救世者なり 一切皆是の如し 心水湛へて盈滿し 潔白なること雪乳の

猶さし 當に決定の意を生ずべし 一切の身より出て 悉く諸の毛孔に通じ 流れ注

いで極て清淨なり 此の内より充ち溢れて 遍く大地に滿つ 此の悲愍の水を以て 世の苦の衆

生を觀すべし 諸の有らゆる飲み用ゆるもの 或は復身に觸れらるるもの 一切皆決定して

菩提を成就することを得

思惟して等印に在れば 一切囉字門なり 周輪にして焰光を生じ 寂然とし

て而も普く照す

瑜祇の光外に轉じ 而も一切處に遍じて 世を利し樂欲に隨ひ 行者神通を

起す

身上に囉字門あり 囉字齋輪ガジヤリンの中にあり 火を出し而も雨を降らし 俱時に

而も應現して

(四)熾然 八大地 獄さいふ。

地獄の極寒の苦をば 囉字能く消除し 囉字は(三)熾念を獨く 眞言法に住す

るが故に

囉字を下身と爲し 訶字を標幟と爲す 作業速に成就すれば 重罪の衆生を

救く

大因陀羅に住して 水龍の事業を作すべし 一切を攝除する等 眞言者疑ふ

こと勿れ

(三)風は一切處に遍じて 一切悉く開き壞す 此の種種の雜類 各各の衆の事

(三)風は云云 訶字門の觀を明すなり

業

(二)色曼荼羅の中にして 法に依て而も之れを作せ 心に觸れて而も念持すれば

(二)色曼荼羅 半月形なり、風大は黒色の故に色を以て表す。

意根淨を逮得す

輕擧を習ふ經行の 中に誦して神足を獲べし 宴坐して阿字を觀じ 耳根に

在りと想へ

念持して一月を滿つれば 當に耳清淨を得べし

秘密主、是の如き等は、(三)意生悉地の句なり。秘密主、此れを觀するに形色有ること無けれども、種種の雜類の衆生す。思念の頃に於て、纔に之れを轉誦するときは、是の如きは一切の善業の種子を作す。復次に秘密主、如來は作さざる所無し。眞言門に於て修行する諸の菩薩は、影像に同じく、一切處に隨順し、一切衆生の心に隨順して、悉く其前に住して、諸の有情をして、咸く歡喜を得しむ。如來は分別の意無く、諸の境界を離るるに由るが故なり。而も偈を説いて言く、

(三)時と方と造作なく 法と非法とを離るれども 能く悉地の句を授くることは

眞言行より發生す

(三)時と方と造作なく 法と非法とを離るれども 能く悉地の句を授くることは

是の故に一切智の 如來悉地の果は 最も尊勝の句と爲す 當に成就を作すべし

成就悉地品第七

(一)成就悉地上品には外相の悉地を説き、今の品は金剛薩埵の内證秘密の法にして内心の成就を説く。(二)吉祥云云。金剛手菩薩の徳を歎じていふ、金剛は智徳、吉祥は福徳なり。(三)手に金剛云云。五智の金剛杵なり。(四)法自在牟尼。大日如來を云ふ。(五)過上無き句云云。過上無き句云ふ。曼荼羅を云ふ。

是の如く説き已て、世尊、執金剛秘密主に告げて言はく、
摩訶薩の意處を 説て曼荼羅と名く 諸の眞言の心位を 了知するときは 果を成ずることを得べし
諸の分別する所あるは 悉く皆意より生ず 白黃赤を辯分する 是等は心より起るなり

(六)摩訶薩の意處を指して云ふ、即ち大悲胎藏曼荼羅なり。

(一)内心處 八瓣の内圍心の處なり。

(二)八葉云云。心處を觀じて八葉の蓮花となして開敷せしむる也。凡夫の心は合蓮花の如し。(三)鬚髮 無量法門の眷屬を表するなり。阿字門 自心阿字なり。八葉と月輪とは一致なり。

(五)次に云云。已下第二暗字品を説く、即ち眞言の因なり。

(六)寂靜法身。孔涅盤點を云ふ、涅盤點にはあらず、是れ即ち空涅盤點なり。

決定の心を以て歡喜するを 説いて(一)内心處と名く 眞言斯の位に住して 能く廣大の果を授く
彼の蓮花處を念すべし (二)八葉にして(三)鬚髮敷けたり 華臺に(四)阿字門あり 焰鬘皆な妙好なり
光輝普く周遍して 衆生を照明するが故に 千電を合會するが如くして 佛の巧色の形を持せり
深く圓鏡の中に居して 諸の方所に應現すること 猶し淨水の月の如くして 普く衆生の前に現す
心性は是の如しと知りぬれば 眞言行に住することを得 (五)次に其の首の上の頂會の交際せる中に於て
標するに大空點を以てして 而も闇字を思惟せよ 妙好にして淨無垢なること
水精と月と電との如し

寂靜法身なりと説く 一切の依持する所なり 諸の眞言の悉地 能く殊類

(一) 囉字 已下第
三選字門を説く
之れを兩眼に布す
るが故に能く心性
を見らる即ち成菩
提なり。

(二) 頤を俛云云
觀法の坐を示す。

(三) 此れ從り云
云已下第四選字
品を説く。

(四) 不死の句云
云選字は入涅槃
を表す故に不死
の句と云ふ

の形を現し

天の樂と解脱とを得 如來の句を逮見す (一) 囉字を眼界と爲せ 輝燭明燈の
猶し

(二) 頤を俛ふせ小しく頭を低れ 舌を齶の間に近づけて 而して以て心處を觀す
べし 當に心に等引を現すべし

無垢にして妙に清淨なること 圓鏡の如くして常に現前す 是の如く眞實の心
は 古佛の宣説し玉ふ所なり

心明道を照了するときは 諸色皆光を發す 眞言者當に 正覺兩足尊を見る
べし

若し見るときは悉地の 第一の常恒の體を成す (三) 此れ依り次に思惟して
此の囉字門を轉すべし

選字の太空點なり 之れを眼位に置け 一切空の句を見 (四) 不死の句を成す
ることを得

若し廣大智と 或は五神通を起すと 長壽の童子の身と 持明等とを成就せ

んと欲ふに

眞言者未だ得ざるは 之れに隨順せざるに由てなり 眞言の智を發起するは

是れ最勝の實知なり

一切の佛菩薩 救世の庫藏なり 是れに由て諸の正覺と 菩薩救世者と

及び諸の聲聞等と 他の方所に遊涉し 一切の佛刹の中にして 皆是の如き
の説を作す

故に(一)無上智と 佛の(二)無過上智とを得るなり

(三)轉字輪曼荼羅行品第八

爾の時に毗盧遮那世尊、一切大會を觀察して、大慈悲を修め習ひ玉ふ眼を以て、衆生
界を觀察して、(四)甘露生三昧に住し玉ふ。時に佛是の定に由るが故に、復一切(五)三世
無礙力明妃を説いて曰く、

怛姪他、伽伽娜三迷、阿鉢囉底三迷、薩婆怛他藥多三麼哆嚧藥帝、伽伽那三摩、囉
囉落吃灑囉、莎訶

善男子、此の明妃と如來の身と無二の境界なるを以て偈を説いて言く、

(一) 無上智 權方
便の智なり。
(二) 無過上智 實
智なり。
(三) 轉字輪云云
孔字所變の百光遍
照の義を説く。即
ち是れ周遍法界の
義なり。
(四) 甘露云云 毒
を飲めば人則ち命
を失ふ。天の甘露
に遇へば不死の樂
を得るに喩ふ。則
ち孔字不生の三昧
なり。
(五) 三世云云 三
世に於て能く此の
明の力を破壊する
者あることなき故
に三世無礙力と云

是の佛加持に由て 菩薩大名稱 法に於て罣礙すること無く 能く衆の苦を滅し除く

時に毗盧遮那世尊、尋で諸佛の本不生を念じ、自身と及與び持金剛者とを加持して、金剛手等の上首の執金剛に告げて言く、善男子、諦に聽け、(一)轉字輪曼荼羅行品の、眞言門修行の諸の菩薩は、能く佛事を作し、普く其の身を現す。爾の時に執金剛、(二)金剛蓮華座より旋り轉じて而も下て、頂を以て世尊を禮して而も讚歎して言さく、
菩提心を歸命し 菩提を發す者を歸命し 行體の 地波羅蜜を稽首し
先きに造作する者を敬禮し (三)空を證する者を歸命す

(一)轉字輪云云此の阿字一切の字に入れば一切の字に於て旋り轉じ法に於て此の菩薩は五股金剛杵の上蓮華座に於て坐す是れ愛染の瓶の中蓮華に同じ空を證する云云空無相を證する人なり(二)此れを云云此れは佛更に阿字を説き説へる日如來自ら自證の覺徳を歎す密教の肝要の偶なり(三)此の等比況喻可きなき法に説き亦た無比なり

秘密主、是の如く歎じ已て、而も佛に白して言く、唯、願くは法王、我れ等を哀愍し護念して、而も此れを演説し玉へ、衆生を利益せんが爲の故に、説く所の如く、眞言を修せん者をして圓滿せしむるが故に。是の如く説き已て、毗盧遮那世尊、執金剛秘密主に告げて言く、
我は一切の本初なり 號して世の所依と名く (四)説法に等比無し 本寂にして上有ることなし

(一)勝願云云一切衆生界に於て勝願と云ふ又此の字は大地輪の故に座といふ(二)壽命云云壽命と種子と依處と救世者は皆阿字なり世出世の一切所作の妙業は皆阿字を以て命とし阿字の字とすを以て種字とす

時に佛、此の伽陀を説て是の如く而も加持を作し玉ふ。加持を以ての故に、執金剛者及び諸の菩薩と、能く(一)勝願の佛菩提座を見るに、世尊は猶ほし虚空の戲論無きが如し。無二の行にして瑜伽の相を以て是の業を成熟し玉ふ。即時に世尊の身の諸の支分より皆悉く、是の字を出現して、一切の世間出世間の聲聞緣覺の靜慮と思惟とに於て、悉地を成就することを勤修せしめ玉ふ。皆(二)壽命に同じく、種字に同じく、依處に同じく、救世者に同じ
南廔三曼多勃駄喃、阿
善男子、此の阿字は一切如來の加持し玉ふ所なり。眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩は、能く佛事を作し、普く色身を現じて、阿字門に於て、一切の法を轉ず。是の故に祕密主、眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩、(三)若し佛を見んと欲ひ、若し供養せんと欲ひ、發菩提心を證せんと欲ひ、諸の菩薩と同會せんと欲ひ、衆生を利益せんと欲ひ、悉地を求めんと欲ひ、一切智智を求めんと欲はば、(四)此の一切佛心に於て當に勤めて修習すべし。(五)爾の時に毗盧遮那世尊、復決定して大悲藏より生ずる曼荼羅王に、

(三)若し佛云云初の四の欲は東西南北の四の欲を説き後の三の欲等は中央の大徳を説く(四)此の眞言なり(五)爾の時云云上來は轉字輪の相を説き已下は曼荼羅行の尊位を説く

聖天の位を敷き置き、三昧神通の眞言行不思議の法を説き玉ふ。彼の阿闍梨、先づ阿

(一) 修多羅 壇に引く五色の線なり。之に就て經と疏と異説あり。(二) 内心云云 胎を内心と云ふ。(三) 第二云云 三重の中の第一重を云ふ。(四) 三分云云 第一行道の處、第二供養物を置く處、第三箭尊の坐處を云ふ。(五) 所餘云云 壇頂に於て正覺壇なり。(六) 是の方便云云 五色を引て界道を作す。(七) 衆色 五色を布して界道を作す。内より白赤等々次第するなり。(八) 潔白云云 白は法界の體なり。諸色は離れたり。(九) 此の類は上の五色を引く次第を釋したまふ。(一〇) 囉字門 此の囉字の五字を以て次の如く加持す。白は、赤は、青は、黃は、青は、

字の一切智門に住して(一)修多羅を持して一切諸佛を稽首したてまつる。東方より之れを申べて、旋り轉じて而も南より以て西方に及ぼし、北方に周らし、(二)次に金剛薩埵と作つて、執金剛を以て、自身を加持し、或は彼の印を以てし、或は囉字を以てして内心に入りて曼荼羅を置き、是の如く(三)第二曼荼羅も亦、本寂を以て自身を加持するが故に、無二瑜伽の形、如來の形、空性の形なり。次に所行の道と二分の聖天處とを捨て、遠く(四)三分を離れて、如來の位に住して、東方より修多羅を申べて周布し旋り轉ず。(五)所餘の二曼荼羅も、亦當に(六)是の方便を以て、諸の事業を作すべし。復大日を以て自身を加持し、廣く法界を念じて(七)衆色を布せよ。眞言行者、(八)潔白を以て先と爲すべし。伽陀を説いて曰く、
(九)此の淨法界を以て 諸の衆生を淨除すること 自體如來の如し 遠く一切の過を離る
 是の如く而も觀想して (一〇)囉字門を思惟せよ 寂然にして光焰鬘あり 淨月と商估との色なり
 第二に赤色を布すべし 行者當に憶持して 字を思惟すべし明照にして

黒は其の次第なり。今は其の始なり。(一)本無の大空點 赤色を下さんとす。當に囉字を想ふべし。

(一) 麼字門 青色の上之を想ふなり。(二) 最後云云 黒色を下す時は詞字を想ふ。(三) 寶冠云云 五股の印にして阿闍如來の忿怒身なり。(四) 爾の時云云 前に住して甘密生三昧に住して上の法門行者を説き、今は眞言行者を満足せしめん。味に入りて此明妃は能く無量勝と

(一) 本無の大空點あり 最勝にして能く壞するもの無し 第三に眞言者 熨炳にして初日の輝あり 次に黃色を運布すべし 意を迦字門に定め 當に法教に隨ふべし 身相猶し眞言のごとし 正受にして諸毒を害し 光明一切に遍す 金色にして牟尼に同じ 次に當に青色を布すべし 生死を超へ度らんには (二) 麼字門を思惟せよ 大寂の菩提座あり 身色虹霓の如し 一切の怖畏を除く (三) 最後に黒色を布せよ 其の彩甚だ玄妙なり 訶字門を思惟せよ 周遍して圓き光りを生ず 劫炭の猛き焰の如し (四) 寶冠にして手印を擧ぐ 能く一切の惡を怖れしめ 諸の魔軍を降伏す 爾の時に世尊毗盧遮那、三昧より起つて、無量勝三昧に住し玉ふ。佛定中に於て、

遍一切無能害力明妃を顯はし示し玉ふ。一切如來の境界の中より生ず。其の明に曰く南摩薩婆他業帝弊、薩婆目契弊、阿婆迷、鉢囉迷、阿者麗、伽伽泥薩麼囉囉、薩婆恒羅弩業帝莎訶

一〇明妃八遍胎藏の八葉を以て成立する故に。
一一羯磨 金剛薩埵成事業の尊なるが故に。
一二施願金剛 文殊菩薩なり。
一三内心 中胎なり。
一四髮髻 髮髻を冠となす。
一五鉢吒 極細絹を用て下裙となす。
一六消穀 絹の疎なるなり。
一七夜叉 多聞天の眷屬なるが故に律に依て名を得。
一八金剛云云 三股金剛。

次に彩色を調るには、頂を以て世尊及び般若波羅蜜を禮して、此の明妃八遍を持せよ。座より而も起つて曼荼羅を旋り繞りて、内心に入て、大慈大悲の力を以て諸の弟子を念じ、阿闍梨復羯磨金剛薩埵を以て自身を加持す。嚩字門と及び施願金剛とを以てすること已つて、當に大悲藏より生ずる大曼荼羅を畫くべし、彼安祥として内心に在て、而も大日世尊を造るべし。白蓮華に坐して首に髮髻を戴き、鉢吒を裙と爲し、上にも消穀を被たり。身相金色にして身を周りて焰鬘あり。或は如來頂印を以てし、或は字句を以てす。謂く阿字門なり。東方の一切諸佛には、阿字門及び大空點を以てす。伊舍尼の方の一切如來母虛空眼には、伽字を書くべし。火天の方の一切諸菩薩には、眞陀摩尼寶を畫け、或は迦字を置け。夜叉の方の觀世自在には、蓮華印なり。並に一生補處の菩薩眷屬を畫け、或は娑字を作せ。焰摩の方には三分の位を越えて、金剛慧印と持金剛秘密主と並に眷屬とを置け。或は嚩字を書け、彼れ復三分の位を

一〇彼の印云云 劔及び索。
一一風天 西北方なり。

一二金剛云云 三股金剛。
一三彼の印 五股金剛。
一四次に四方云云 以下四方四大護を明す、現圖曼荼羅にはなし。十大院の一なり。
一五彼の印 檀茶棒印なり。
一六彼の印 劔なり。
一七龍方 西方なり。
一八彼の印 劔形なり。
一九彼の印 劔形なり。
二〇毗俱胝 劔と大に怒る形なり、倚せる形なり。

棄てて一切の諸執金剛の印を畫け。或は字句を書け、所謂る咎字なり。次に涅槃底の方には、大日如來の下に於て不動尊を作せ。石の上に坐して絹索と慧刀とを持せり。周帀して焰曼あり、障を作す者を擬ざる。或は彼の印を置け、或は字句を書け所謂る哈字なり。風天の方には降三世尊をなせ、大障を摧くものなり。上に光焰あり、大勢威怒にして猶し焰摩の如し。其形黑色にして、怖るべき者の中に於て極めて怖れ畏れしめん。手に金剛を轉ず。或は彼の印を作せ。或は字句を書け所謂る訶字なり。次に四方に於て、四大護を畫くべし。帝釋の方をば無畏結護者と名く、金色にして白衣なり。面に少しく忿怒の相を現じ、手に檀茶を持せり。或は彼の印を作せ。或は字句を置け所謂る嚩字を作せ、夜叉の方をば壞諸怖結護者と名く、白色にして素き衣なり。手に鳩伽を持し、并に光焰あり。能く諸の怖れを壞る。或は彼の印を畫け或は字句を置け、所謂る博字なり。龍方をば難降伏結護者と名く、赤きこと無優華の色ナシヨクアノケツゴシヤの如し、朱き衣を被たり、面像微笑にして光焰の中に在り、而も一切の衆會を觀ず。或は彼の印を置け、或は字句を置け所謂る索字なり。焰摩の方をば金剛無勝結護者と名く、黑色にして玄き衣なり。毗俱胝形にして眉の間に浪の文あり、上に髮冠を戴

不空の手
供養の印にして普
賢三昧耶の印な
り。

耳語 耳語戒
なり。

無上正等戒
三昧耶戒なり。

正等三昧
三昧耶印なり。

賢三昧耶印なり。
其の所至の處に
花の墮つる處に
於て其印を授く。

如來の性 阿
字門なり。

當に諸の弟子の爲に 法界性の印を結べ 次に法輪の印を結んで 一心に彼
の體に同じうし

縮帛を以て面門を覆ひ 而も悲愍の心を起すべし 不空の手を作して 苦
提を圓滿せしめんが故に

耳語して而も彼に 無上正等戒を告げよ 次に當に彼が爲に 正等三
昧の印を結ばしめ

彼に開敷華を授けて 菩提の意を起さしむべし 其の所至の處に隨て 而
も學人を教へ

是の如く要誓を作して 一切應に傳授すべし

具德持金剛 又請うて世尊に白さく 唯願くば人中の勝 灌頂の法を演説し
給へ

爾の時に薄伽梵 法界に安住して 而も金剛手に告げ玉ふ 一心に諦に聽く
べし

我諸の法教を説かん 勝自在の攝持なり 師 如來の性を以て 自體を加持

し

或は復密印を以てす 次に應に弟子を召して 法界性の 大蓮花王の中に
住せしむべし

四大菩薩の 加持する所の寶瓶を以て 支分生の印を結んで 而も用て

其の頂に灌げ 應に大空の闍字門を授與し 心に無生の句を置き 胸に無垢の字
を表すべし

或は一切阿字なり 髮と髻とに金色の光あり 白蓮華臺に住して 仁者に
等同なり。

密印 外五股
印なり。

四大菩薩 普
賢と慈氏と除蓋障
賢と滅惡趣尊なり。
支分生 普賢
の印をいふ。

仁者 大日如
來をいふ。

國譯大毘盧遮那成佛神變加持經卷第三終

國譯大毘盧遮那佛神變加持經卷第四

(二) 密印品第九

(一) 密印品 上品に諸尊の種子を説く難未だ其の印を説かざる故に、此の品の中に一百三十九印を説けり。
 (二) 如來莊嚴云云 如來身會の三十の印なり。如來の支分を莊嚴する印なる故に。
 (三) 法界趣 法界趣とは法界身なり。此の印を以て加持する故に如來の法界身に同じ。
 (四) 身無害云云 一身遍法界の觀に入て唯一無差別なるまきは則ち能く害するものなきなり。
 (五) 無等云云 三明の眞言をいふ。

爾の時に薄伽梵毗盧遮那、諸の大衆會を觀察して、執金剛秘密主に告げて言はく、秘密主、(一) 如來莊嚴の具に同じく(二) 法界趣に同じき標幟あり。菩薩是れに由て身を嚴るが故に、生死の中に處し、諸趣に巡り歷れども、一切如來の大會に於て、此の大菩提の幢を以て、而も之れを標幟すれば、諸の天と、龍と、夜叉と、韃達婆と、阿蘇囉と、揭嚩茶と、緊那羅と、摩睺羅伽と、人と、非人と等、敬て而も之れに遠ざかり、教を受けて而も行ず。汝今諦に聽き極て善く思念せよ、吾當さに演説すべし。是の如く説き玉ひ已つて、金剛手白して言さく、世尊、今正しく是れ時なり、世尊、今正しく是れ時なり。爾の時薄伽梵。即便ち(一) 身無害力三昧に住し玉ふ。斯の定に住し玉ふが故に、一切如來の三昧耶に入り、一切に逼じて能く障礙する無き力ある(二) 無等の三昧力の明妃を説いて曰く、

南麼三曼多致駄喃、阿三迷、咀囉、三迷、三麼曳、莎訶

(一) 三法道 本尊の身と眞言と印となり。
 (二) 當に云云 佛三昧耶の印相を明す。
 (三) 空心合掌 虚空合掌なり。
 (四) 又定と慧 左右の掌は色と心に於て即ち六大法界を表す。

秘密主、是の如きの明妃は、一切如來の地を示現す、(一) 三法道の界を越えざれば地波羅蜜を圓滿す。是の密印の相は、(二) 當さに定と慧との手を用て(三) 空心合掌を作し、定と慧との二の虚空輪を以て並べ合せて、而も之れを建立す。頌に曰く、

此れ一切の諸佛の 救世の大印 正覺の三昧耶なり 此の印に於て而も住す

(四) 又定と慧との手を以て拳になして、虚空輪を掌の中に入れて、而も風輪を舒ぶべし、是れを淨法界の印となす、眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、達摩駄略、薩嚩、婆嚩句痕、

復定と慧との手を以て、五輪皆等しく迭に翻へし相ひ鈎し、二の虚空輪の首俱に相ひ向くべし。頌に曰く、

是れを名けて勝願の 吉祥法輪の印となす 世の依たる救世者は 悉く皆な此の輪を轉じ玉ふ

眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、伐折囉咀麼句痕、

復定と慧との二手を舒べて(五) 歸命合掌に作し、風輪を相ひ捻して二空輪を以て上に加

(五) 歸命合掌 大慧刀印なり。

(一) 羯伽 刀なり

(二) 大慧刀印 左右の地水火を立合せて二風二空を相捻するなり。

(三) 商佉 螺貝の梵號にして法螺の印相なり。

(四) 健吒 鈴の梵號なり。

ふべし、形(一)羯伽の如し。頌に曰く、

此の(二)大慧刀の印は 一切の佛の説き玉ふ所なり 能く諸の見を斷す 謂く 俱生の身見なり

眞言に曰く、

南摩三曼多勃駄喃、摩訶羯伽微囉闍、達摩瑠捺囉奢、迦娑訶闍、薩迦耶捺囉、瑟致聖諾迦、但他莫多地目吃底爾社多、微囉伽達摩爾社多併

復定と慧との二手を以て、虚心合掌に作し、二の風輪を屈して、二の空輪を以て之れを絞ふべし、形(三)商佉の如し。頌に曰く、

此を名けて勝願の 吉祥法螺の印と爲す 諸佛世の師 菩薩救世者 皆な無垢の法を説いて 寂靜の涅槃に至る

眞言に曰く

南摩三曼多勃駄喃 暗

復定と慧との手を以て、相ひ合せて普く之れを舒べ散ず、猶し(四)健吒の如し、二の地輪と二の空輪と相ひ持して、火と風との輪をして和合せしむべし。頌に曰く、

吉祥願の蓮華は 諸佛救世者の 不壞金剛の座なり 覺悟するを名て佛となす

菩提と佛子と 悉く皆是れより生ず

眞言に曰く、

南摩三曼多勃駄喃、阿

(一) 五輪云云 外縛の拳をいふ。

(二) 跋折羅 外縛五股の印なり。疏は内縛五股なり。

復定と慧との手を以て(一)五輪を外に向けて拳になし、火輪を建立て、二の風輪を舒べ屈して鈎の形になし、傍に在て之れを持すべし。虚空と地との輪を並べて而も直く上げ、水輪を交へ合せて(二)跋折羅の如くすべし。頌に曰く、
金剛大慧の印は 能く無智の城を壞り 睡眠の者を曉寤す、天人も壞すること能はず。

眞言に曰く、

南摩三曼多伐折羅赧、併

(三) 復定と慧との手を以て、五輪を内に向けて拳になして、火輪を建立て、二の風輪を以て傍に置き、二の虚空を屈して相ひ並ぶべし。頌に曰く

(三) 復定と慧頂の形を表す。佛

此の印は摩訶の印なり 所謂る如來頂なり 適に纒に之れを結び作せば 即ち世尊に同じ

眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、^{ワムラ}鉢鉢

復次に智慧の手を以て拳になして、(二)眉の間に置き。頤に曰く、

此を(三)毫相藏と名く 佛の常滿願の印なり 纒に此を作すを以ての故に 即ち人中の勝に同じ

眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、^{アラカシヤ}阿痕惹

瑜伽の座に住して、鉢を持するに相應す、定慧の手を以て俱に臍の間に在く、是を釋迦牟尼の(三)大鉢の印と名く。

眞言に曰く

南麼三曼多勃駄喃、^婆

復次に智慧の手を以て上に向けて、而も(四)施無畏の形に作すべし。頤に曰く、

眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、^婆

(二)眉の間 佛の白毫を表す。
(三)毫相藏 慧の手屈して拳に成して風の節を肩間に置く。

(三)大鉢の印 如來鉢の印を作り左の手に二指を角な持す。

(四)施無畏 如來摩頂の印なり。

(一)施願の形 左の手亦衣の角を持す。
(二)與願 施願を與へ同じく膝の上へに仰げ五指を伸ぶるなり。
(三)毗俱胝前に註す。

能く一切の 衆生類に無畏を施し與ふ 若し此の大印を結ぶを 施無畏者と名く

眞言に曰く

南麼三曼多勃駄喃、^{サラガ}薩婆他 ^{ゾナラ}爾娜爾娜、^{ハヤナラ}佩也那奢那、^{ソハカ}莎縛訶

復次に智慧の手を以て、下し垂れて(一)施願の形を作すべし。頤に曰く、

是の如き(二)與願の印は 世依の所説なり 適に纒に此を結ぶものは 諸佛其の願を満し玉ふ。

眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、^{サハカ}嚩囉娜伐折羅但麼迦、^{ソハカ}莎縛訶

復次に智慧の手を以て拳となして、而も風輪を舒べ。(三)毗俱胝の形を以て等引に住す

べし。頤に曰く、

是の如くの大印を以て 諸佛救世の尊 諸の障者を恐怖し、 意に隨て悉地

を成し玉ふ

是の印を結ぶに由るが故に 大惡の魔軍衆と 及び餘の諸の障者は、 馳せ

眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、阿沒囉觀唵婆嚩、莎嚩訶

即ち此の印を以て直く水輪を舒べ、餘亦之れを堅つべし、如來腰の印と名く、彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、但他葉多三婆嚩、莎嚩訶

復定慧の手を以て、空心合掌に作し、二の風輪を以て内に屈して入るべし、二の水輪亦然なり。其の二の地輪少し屈せしめて、而も火輪を伸ぶべし、此は是れ(二)如來藏の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼薩婆但他葉帝弊、嚩嚩嚩嚩、莎嚩訶

即ち此の印を以て、其の水輪を散じて上に向けて之れを置き、大界の印と名く。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、麗魯補嚩微矩麗、莎訶

即ち此の印を以て、其の二の火輪を鈎屈して相ひ合せて、風輪を散じ舒ぶべし、無堪忍大護の印と名く。彼の眞言に曰く、

(二) 如來藏の印
是印ち如來の陰藏
の印なり。

南麼薩婆但他葉帝弊、薩婆佩也微葉帝弊、微濕嚩目契弊、薩婆他哈缺、囉吃灑摩訶沫麗、薩婆但他葉多本拏也彌社帝、鉢鉢但囉吒囉吒、阿鉢囉底訶誦、莎訶
復風輪を以て、而も之れを散じ舒べ、空輪を並べて其の中に入るべし、(三) 普光の印と名く。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、入嚩羅摩履爾、但他葉修嚩旨、莎訶

又定慧の手を以て、空心合掌を作して、二の風輪を以て火輪の側に持すべし、(四) 如來甲の印と名く。二の水輪を屈し、二の空輪を合せて掌の中に入れて、二の水輪の甲の上を押せ、是を(五) 如來舌相の印と名く。眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、但他葉多爾訶嚩薩底也達摩鉢囉底瑟耻多、莎訶

此の印を以て、風と水との輪をして、屈して而も相ひ捻せしめ、空輪を上に向けて而も少しく之を屈し、火輪を正しく直くして相會すべし。地輪も亦是の如し、(六) 如來語門の印と名く。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、但他葉多能瑟吒羅、囉娑囉娑吃囉、參鉢囉、博迦、薩婆但他葉多、微灑也參婆嚩、莎訶

(二) 普光の印
の法界を照す光明
の印にして、之に
異説あり、二火を
圓かに立て合せて
二大を二火の下に
並へ立て、餘は散
じ立つ。
(三) 如來甲の印
眞言なきも、後人
具緣品所説の言を
以て之を加ふ。
(四) 如來舌相
風を二火に附くる
こま少しばかりな
り。

(五) 如來語門
頭の問少し明ける
なり、語門は口の
故に即ち大空の口
なり。

(二) 上に向く云
は二大指反らし風
して牙の如くする
なり、謂く二風の
因業を大空の牙な
り。以て嗽食する義な

(三) 如來辯舌印
二火は正體智、二
風は後得智なり、
說法は此の二智に
依るなり。

前の印の如く、二の風輪を以て屈して掌の中に入れて(二)上に向くべし、如來牙の印と名く。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、但他葉多能瑟吒囉、囉莎囉娑吃囉、參鉢囉博迦、薩婆但他葉多、微灑也參婆嚩、莎訶

又前の印相の如くして、二の風輪を以て上に向けて之れを置き、第三の節を屈すべし、

(三) 如來辯説の印と名く。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、阿振底夜那部多、路波嚩增三麼哆鉢囉鉢多、微輪駄娑嚩囉、莎嚩訶

復次に定慧の手を以て和合して、一相の空心合掌を作し、二の地輪空輪を屈し入れて相ひ合すべし、此は是れ如來の持十方の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、捺奢麼浪伽達囉、訶參髻莎訶

又前の印の如くして、二空輪と風輪とを以て、上節を屈して相合すべし。是れ如來念處の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、但他葉多娑麼嚩底、薩埵係哆弊嚩多伽、伽那穆忙穆麼、莎訶

(一) 一切法平等云
云二水を内に屈
して二空を以て上
を以て如來身會畢
るなり。

(二) 普賢如意珠
已下は諸尊の密印
の中初に四大菩薩
を説く。

(三) 慈氏の印 寶
瓶の印なり。又三
寶珠塔の印とい
ふ。

(四) 虚空藏 寶珠
の印なり。

(五) 除一切蓋障
二地二水は生死の
淤泥にして蓋障な
り。大空を以て之
を押すは除の義な

又前の印の如くして、二の空輪を以て水輪の上に在くべし、(一)一切法平等開悟の印と名く。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、薩婆達麼三麼哆鉢囉鉢多、但他葉哆弩葉多、莎訶

復定慧の手を以て合して、一となして、二の風輪を以て、火輪の上に加ふべし、餘は前の如し、是れ(二)普賢如意珠の印なり。眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、參麼哆弩葉多、微囉惹達摩爾社多、摩訶摩訶、莎訶

即ち此の虚心合掌、二の風輪を以て、屈して二の火輪の下に在け、餘は前の如し、是れ(三)慈氏の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、阿爾單惹也、薩婆薩埵奢夜弩葉多、莎訶

又前の印の如くして、二の虚空輪を以て中に入るべし、(四)虚空藏の印と名く。眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、阿迦奢參麼哆弩葉多、微質恒嚩嚩囉達囉、莎訶

又前の印の如くして、二の水輪と二の地輪とを以て、屈して掌の中に入れて、二の風輪と火輪と相ひ合すべし、是れ(五)除一切蓋障の印なり。彼の眞言に曰く、

〔二〕鈴鐸 八葉の印は鈴鐸に似たるが故に。

〔三〕得大勢 未敷蓮の印なり。

〔三〕毗俱胝 觀音部の明王なり、觀音降を怖れしむるなり。

南廔三曼多勃駄喃、阿薩埵係修弊囉囉多、但嚙但嚙、但嚙、莎訶

前の如くして、定慧の手を以て相ひ合して、五輪を散じ舒べて猶し〔二〕鈴鐸の如くし、虚空と地輪との如きは、和合して相ひ持して蓮花の形に作れ、是れ觀自在の印なり。眞言に曰く、

南廔三曼多勃駄喃、薩婆但他葉哆囉路吉多、羯嚙摩摩也、囉囉囉訶若、莎訶

前の如くして定慧の手を以て、空心合掌に作して、猶し未開敷蓮の如くすべし、是れ

〔三〕得大勢の印なり。彼の眞言に曰く、

南廔三曼多勃駄喃、髻髻娑、莎訶

前の如くして定慧の手を以て、五輪を内に向けて拳と爲して、二の風輪を擧げて猶し針の鋒の如くし、二の虚空輪を之れに加ふべし、是れ多羅尊の印なり。彼の眞言に曰く、

南廔三曼多勃駄喃、哆囉囉囉囉、羯嚙摩摩娑、莎訶

前の印の如くして、二の風輪を擧げて參へ差へて相押せ、是れ〔三〕毗俱胝の印なり。彼の眞言に曰く、

〔二〕白處尊 觀音部の部母なり、水空相合するは法性同體の大慈なり。

〔三〕何耶揭哩 馬頭なり、二地は耳、二水を風したるは眼、二火を立て合せたるは空を髮、二風を二空をの間に口、二空を以て一切の煩惱業障を破食す。至極は鉢の印に今の眞言を用ひ、今の文は内縛二大を立て著け地水を立て合す。〔三〕文殊師利 已下文殊師利の印契を明す、疏には常の如く下の三指は蓮華、空風は劍なり、即ち蓮上の劍なり。

南廔三曼多勃駄喃、薩婆佩也但囉散爾、訶娑破吒也、莎訶

前の如くして、定慧の手を以て空心合掌になし、水輪と風輪と皆中に入るべし、是れ〔二〕白處尊の印なり。彼の眞言に曰く、

南廔三曼多勃駄喃、但他葉多微灑也三婆吠、鉢曇摩忙履爾、莎訶

前の印の如くして、二の風輪を屈して虚空輪の下に置き、相去ること猶し穠麥の如くすべし、是れ〔三〕何耶揭哩の印なり、彼の眞言に曰く、

南廔三曼多勃駄喃、佉那也畔惹娑破吒也、莎訶

前の印に同じくし、二の水輪と風輪とを伸べて、餘は拳の如くすべし、是れ〔三〕地藏菩薩の印なり。彼の眞言に曰く、

南廔三曼多勃駄喃、訶訶訶、蘇怛弩、莎訶

復定慧の手を以て空心合掌に作して、火輪と水輪と交へ結すんで相ひ持し、二の風輪を以て二の虚空輪の上に置き、猶し鈎の形の如し、餘は前の如くすべし、是れ聖者〔三〕文殊師利の印なり。彼の眞言に曰く、

南廔三曼多勃駄喃、係係矩忙囉、微目吃底鉢他悉體多、娑麼囉娑麼羅、鉢囉底然、

(一) 光網前の文
殊は表情の極、光
網は表徳なり、主
件合して述表不二
なり。

(二) 無垢光 大なる
ば風の側に付くる
なり、その地水火
は三毒、風は業果
にして三道の空指
に於ては、空指に
は無の字に當る。
三道の字に當る。
は大道の智光なり
已下の五尊は文殊
内證の五智を表
す。
(三) 繼室尼 刀印
なり、智を表する
故に右の手を用ひ
るなり。

(四) 優波云云 右
の手不動の刀印に
して三度擬る勢に
せよ。
(五) 水輪云云 地
水輪は輪なり。

(一) 奉教者 文殊
の使者なり、八字
文殊軌には不思議
童子といふ。内縛
して二風、劍形な
り。
(二) 除疑惟 已下
あり、除疑惟の印
は内縛二火、劍形な
り。又二空は並べ
て立つ。
(三) 毗鉢舍那 慧
觀を翻す、即右の
手なり、五指伸べ
て掌を外に向け高
く立つるを施無畏
と云ふ。五指は信
進念定慧の五力を
表す。
(四) 除惡趣 是は
滅惡趣なり、此の印
は惡趣を遠離する
形なり。

莎訶

三昧の手を以て拳となして、而も風輪を擧ること猶し鈎の形の如くすべし、是れ(一)光
網の鈎印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、係係炬忙囉、忙耶菓多娑嚩婆嚩悉體多、莎訶

即ち前の印の如くして、一切の輪相皆な少しく之れを屈すべし、是れ(二)無垢光の印な
り。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、係炬忙囉、微質恒囉底矩忙囉、麼弩娑麼囉、莎訶

前の如くして、智慧の手を以て拳となして、其の風と火との輪相ひ合して一と爲して
之れを舒ぶべし、是れ(三)繼室尼の刀印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、係係炬忙履計、娜耶壤難娑麼囉、鉢囉底然、莎訶

前の如くして、智慧の手を以て拳と爲して、而も火輪を伸べ猶し戟の形の如くすべし。
是れ(四)優波髻室尼の戟の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、頻娜夜壤難、係炬忙履計、莎訶

前の如くして三昧の手を以て拳となし、而も(五)水輪と地輪とを舒べよ、是れ地輪慧輪

の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、係娑麼囉壤那計觀、莎訶

慧の手を以て拳になして、而も風輪を舒べて猶し鈎の形の如くすべし、是れ請召童子の
印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、阿羯囉灑也薩鏗矩魯阿然、矩忙囉寫、莎訶

前の如くして、定と慧との手を以て拳となし、二の風輪を舒べ、節を屈して相ひ合すべ
し、是れ諸の(一)奉教者の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、阿微娑麼也澤曳、莎訶

前の如く定と慧との手を以て拳となし、而も火輪を舒べ第三の節を屈すべし、是れ(二)
除疑惟の金剛印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、微麼底掣諾迦、莎訶

前の如く(三)毗鉢舍那の臂を擧げて、施無畏の手を作す、是れ施無畏者の印なり。彼の眞言に曰く
南麼三曼多勃駄喃、阿佩延娜娜、莎訶

前の如くして智の手を舒べ、而も上に之れを擧ぐべし、是れ(四)除惡趣の印なり。彼の

(二) 救護慧 五指を以て心蓮を加持する義なり。空持立つるは慧は果徳の故なり。

(三) 悲念者 掌を伸べて心を覆ひ、火指を屈して心に當て、之れを柱ふるなり。

(四) 施願 左手を舒べ掌を仰けて之れを垂れ下すを施願の相と云ふ。

(五) 不思議慧 華印の如くして火指を少し内に屈するは寶珠の光炎なり。

眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、阿弊達囉儂、薩埵駄敦、莎訶

前の如くして慧の手を以て心を掩ふべし、是れ(三)救護慧の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、係摩訶摩訶、娑麼囉鉢囉底然、莎訶

前の如く慧の手を持華の狀に作すべし、是れ大慈生の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、娑嚩制妬囉囉多、莎訶

前の如く慧の手を以て心を覆ひ、稍火輪を屈すべし、是れ(三)悲念者の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、羯嚩儂沒灑呢多、莎訶

前の如くして、慧の手を以て(四)施願の相を作すべし、是れ除一切熱惱の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、係嚩囉娜、嚩囉鉢囉鉢多、莎訶

前の如くして智慧の手を以て眞多摩尼寶を執持する形の如くすべし、是れ(五)不思議慧の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、薩磨舍鉢履布囉、莎訶

前の如くして、定と慧との手を以て拳となして、二の火輪をして開敷せしむ、是れ(二)地藏旗の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、訶訶訶微娑曼曳、莎訶

前の如くして、定と慧との手を以て拳となして、二の火輪をして開敷せしむ、是れ(二)地藏旗の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、訶訶訶微娑曼曳、莎訶

慧の手を拳となして而も三輪を舒ぶべし、是れ(三)寶處の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、係摩訶摩訶、莎訶

此の慧の手を以て其の水輪を舒ぶべし、是れ(三)寶手菩薩の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、囉怛怒囉婆囉、莎訶

定と慧との手を以て反相又合掌に作り、定の手の空輪と慧の手の地輪と相交へよ。般若を三昧に於てすることも亦復是の如し。餘は跛折羅の狀の如くすべし、是れ(四)持地の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、達囉尼達囉、莎訶

前の如くして、五股金剛の戟の形に作れ、是れ(五)寶印手の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、囉怛娜囉喇爾多、莎訶

南麼三曼多勃駄喃、囉怛娜囉喇爾多、莎訶

(五) 寶印手 外五股金剛杵の印なり

(四) 持地の印 是は金剛部三昧耶の印なり

(三) 寶手 拳は佛心の故に寶珠なり水を舒るは寶上の一殷なり

(二) 三輪 地水火なり、即ち三股の上の寶珠なり

(一) 地藏旗 已下の第五地藏院の六尊の印契を明す、印は内縛して二火を立て散す

(二) 發堅固の印、五股の印なり、都五を一心に具する義なり、五智は無分別の故に堅固意といふ。

(三) 虚空無垢、已下虚空藏院なり、印は大慧刀なり。

(四) 清淨慧、商法は説法の義、清淨の慧を以て自在に説法するなり。

(五) 行慧、八業なり。

(六) 安住慧、稍々開くは十葉の印なり。

即ち此の印を以て一切の輪をして相ひ合せしむべし、是れ(二)發堅固意の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、伐折羅三婆嚩、莎訶

前の如くして定と慧との二手を以て刀に作れ、是れ(三)虚空無垢菩薩の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、伽伽娜阿難多愚者囉莎訶

前の輪印の如し、是れ虚空慧の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、斫囉嚩嚩底、莎訶訶

前の商法の印の如し、是れ(四)清淨慧の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、達磨三婆嚩、莎訶訶

前の蓮花の印の如し、是れ(五)行慧の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、鉢曇摩阿羅耶、莎訶訶

前の青蓮華の印に同くして、而も稍しく開敷するは、是れ(六)安住慧の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、壞弩囉婆嚩、莎訶訶

(一) 前の如くして、二手を以て相ひ合して而も水輪を屈して、相ひ交へて掌中に入れ、二の火輪と地輪と上に向け相ひ持して而も風輪を舒べ、第三の節を屈して相著けざらしむること猶し穢の如くすべし、是れ(二)執金剛の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多伐折囉根、戰孛摩訶路灑擊舒、

前の印の如くして、二の空輪と地輪とを以て屈して掌の中に入るべし、是れ(三)忙菴雞の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多伐折囉根、但嚩吒但嚩吒、若衍底、莎訶訶

前の如くして定の慧との手を以て、諸輪反し又へて相ひ糺ふて、自體に向へて而も之れを旋轉し、般若の空輪を三味の虚空輪に加ふべし、是れ(四)金剛鎖の印なり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多伐折囉根、鉢滿駄滿駄、慕吒耶慕吒耶、伐折路囉婆吠、薩婆但囉鉢嚩底訶帝、莎訶

此の金剛慧印を以て、少し虚空輪を屈して、以て風輪を持して而も相ひ至らざらしむ、

(一) 前の如く云云、已上金剛手院の印を説く。

(二) 執金剛、金剛薩埵の印にして内五股の印。

(三) 忙菴雞、母と翻す、金剛部の母なり。

(四) 金剛鎖、是れは轉法輪反しの印なり。

(一) 忿怒月窟 内
縛五股の印の如し
二風を屈し勾の如
くにし、二空を捻
するが如くして、
相着けざらしむ。

(二) 金剛拳 内縛
の印を心に置くな

(三) 無勝已下 四
大護院の印を説
く此の印は右の
風指は諸佛の教を
表し、左の手に打
の勢の如くして衆
生の長眠を驚か
す。阿毗目法相
向と翻す、相向金
剛と云ふ、慧の奉
は佛心なり。

是れ(一) 忿怒月窟の印なり。彼の真言に曰く、

南麼三曼多伐折囉赧、曷唎鉢發吒、莎嚩訶

前の如く定と慧との手を以て拳と爲し、二の風輪を建立て而も以て相ひ持すべし、是れ金剛針の印なり。彼の真言に曰く、

南麼三曼多伐折囉赧、薩婆達磨備吠達備、伐折囉素旨嚩囉泥、莎嚩訶

前の如く定慧の手を以て拳に爲して、而も心に置き、是れ(三) 金剛拳の印なり。真言に曰く、

南麼三曼多伐折囉伐、薩破吒也伐折囉三婆吠、莎訶

三昧の手を以て拳に爲て翼を舉げて開敷し、智慧の手亦拳に作し、而も風輪を舒べて、猶し忿怒して相擬する形の如くすべし、是れ(三) 無能勝の印なり。彼の真言に曰く、

南麼三曼多伐折囉赧、訥達哩沙摩訶盧灑拏、佉捺耶薩鑊薩他藥單然矩嚩、莎訶

慧の手を以て拳に爲して、相ひ撃つ勢に作して之れを持すべし、是れ(四) 阿毗目法の印なり。彼の真言に曰く、

南麼三曼多伐折囉赧、係阿毗目佉摩訶鉢囉戰拏、佉那也緊旨囉也徒、三麼耶麼誓薩

麼囉、莎訶

(一) 前の鉢を持する相の如くなるは、是れ釋迦の鉢の印なり。彼の真言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、薩嚩吃麗奢爾素捺耶、薩婆達摩嚩始多鉢囉鉢多、伽伽那三迷、

莎嚩訶

釋迦毫相の印は上の如し、又慧の手の指の峯を以て聚めて頂上に置き、是れ(二) 一切佛頂の印なり。彼の真言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、鑊鑊、鉢鉢鉢、發吒、莎訶

三昧の手を以て拳に爲して火と風との輪を舒べ、而も虚空を以て地と水との輪の上に加へ、其の智慧の手は、風と火との輪を伸べて三昧の掌の中に入るべし、亦虚空を以て地と水との輪の上に加へて、刀の鞘に在るが如くすべし、是れ不動尊の印なり。前の(三) 金剛慧の印の如くなるは、是れ降三世の印なり

(四) 前の如く定慧の手を以て合して一相と爲して、其の地水の輪皆下に向け、而も火輪を伸べ二の峯相連ね、二の風輪を屈して第三の節の上に置く、虚空輪を並べて三目の形の如くすべし、是れ如來頂の印、佛菩薩の母なり。復三昧の手を以て覆せて而も之れ

(一) 金剛慧 前の
外五股の印なり。
(二) 前の如く云
す、地水輪の下に
向ふは内縛なり。

(三) 一切佛頂の
印 五指を聚めて
頂上に置くを觀す
るなり、此の印は
五佛頂の總印な
り。

(一) 前の鉢云云
已下釋迦院主件十
七尊を明す。

(一) 勝佛頂 大悲
刀の印なり。
(二) 最勝佛頂 轉
法輪の印なり。

(三) 火聚佛頂 上
の佛眼の三眼の印
の如く二空附けざ
るなり。
(四) 眞多摩尼云
云 便ち風指を以
て眉間に於て之を
拮ぶ。
(五) 佛眼の印 二
羽虚中合にして風
相著けす空輪開立
して五眼成す。
(六) 金剛の標相
五股杵の如くなる
故に金剛の標相と
いふ。
(七) 五輪云云 其
手を頭より高から
しむるなり。
(八) 無能勝 佛部
の教令輪なり。佛部
の内内にて云
云 内縛なり。

を舒べ、慧の手を拳に爲して而も風輪を擧ること、猶し蓋の形の如くせよ、是れ白傘
佛頂の印なり。

前の刀印の如くなるは、是れ(一)勝佛頂の印なり。

前の輪印の如くなるは、(二)是れ最勝佛頂の印なり。

前の鈎印の如く慧手を拳に爲して、其の風輪を擧げ而も少しく之を屈すべし、是れ除
業佛頂の印なり。

前の佛頂の印の如くするは、是れ(三)火聚佛頂の印なり。

前の蓮華の如くするは、是れ發生佛頂の印なり。

前の商法の印の如きは、是れ無量音聲佛頂の印なり。

智慧の手を以て拳と爲して、眉間に置在するは、是れ(四)眞多摩尼毫相の印なり。

前の佛頂の印の如くするは、是れ(五)佛眼の印なり。復少し異なるは、所謂(六)金剛の標相
なり。智慧の手を心に在き、蓮華を執る像の如くし、直く奢摩他の臂を伸べ、(七)五輪
上げ舒べて而も外に向けて之れを距ぐは、是れ(八)無能勝の印なり。

定と慧との手を(九)内に向けて拳と爲し、二の虚空輪上へに向けて之れを屈すること口

(一) 智慧の手云
云 已下世天の印
契四十を説く。
(二) 普華天子 右
の手拳にして風火
の立て風少し屈し
て火の側に付く。
(三) 光鬘天子 一
度上下するなり。
(四) 空を以て掌に入る
は虚空を以て四
佛智を開く。
(五) 滿意天子 持華
の印なり。
(六) 地神の印 此
の印は鉢の印に似
て少し異なるなり。

(七) 一切諸仙火
天の眷屬の五仙な
り。

の如くすべし、是れ無能勝明妃の印なり。

(一) 智慧の手を以て頬を承るは、是れ自在天の印なり。即ち此の印を以て風と火との輪
をして差に戻て之れを舒ぶるは、是れ(二)普華天子の印なり。

前の印に同じく虚空輪を以て掌中に在くべし、是れ(三)光鬘天子の印なり。

前の印に同じく虚空と風との輪を以て、華を持ちたる相に作れ、是れ(四)滿意天子の印
なり。智慧の手を以て虚空と水との輪相加へ、其の風と火との輪と地輪と、皆之れを
散し舒べて以て其の耳に掩ふ、是れ(五)遍音聲天の印なり。

定慧の手相ひ合して、二虚空輪圓かに屈し、其餘四輪も亦是の如くす、是れを(六)地
神の印と名く。

前の如く智慧の手を以て施無畏の相に作し、空輪を以て掌中に在け、是れ(七)請召火天の
印なり。

即ち施無畏の形を以て、虚空輪を以て、水輪の第二の節を持す、是れ(八)一切諸仙の印
なり、其の次第に隨て相應して之れを用ゆべし。

前の如く定と慧との手を以て相ひ合して、風輪と地輪と掌の中に入れ、餘は皆上に向く

(二) 乾闥婆 内縛
二水を開き散す。

(三) 一切藥又 内縛
二風を扇す。

(三) 毗舍遮 厨神
なり、遮情の義に
は、鬼道は熱情多き
なり、表徳の義に
は、佛の智火なり、
故に佛智を以て彼
を燒盡するなり。

印なり。真言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、藥囉邏延、莎訶

内に向けて拳と爲して、而も水輪を舒るは、是れ(二)乾闥婆の印なり。真言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、微輸駄薩縛囉嚩係爾、莎訶

即ち此の印を以て、而も風輪を屈する、是れ(三)一切藥又の印なり。真言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、藥乞釵濕囉囉、莎訶

又此の印を以て、虚空輪と地輪と相ひ持して、火と風とを伸ぶべし、是れ藥又女の印

なり。真言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、藥乞又尾爾耶達履、莎訶

内に向けて拳と爲して、而も火輪を舒ぶべし、是れ諸(三)毘舍遮の印なり。真言に

曰く、

南麼三曼多勃駄喃、比舍遮藥底、莎訶

改めて火輪を屈すべし、是れ諸毗舍支の印なり。真言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、比旨比旨、莎訶

(二) 一切執囉 七
囉九執十二宮な

(三) 一切宿 二十
八宿なり、合掌し
て右を以て左を以
して二火を交へ二
空を交へるなり。
(三) 羅刹婆 二水
を内に入ると、大
怖畏の内にして外
に怖畏の相を示す

(四) 爾賀囉 舌の
梵語なり。左の
掌を仰で舌を以て
觸るゝこと、人の
心を食する表示な
り。
(五) 諸の如來 已
上の諸尊皆大日如
來の示現の故に。
(七) 又秘密主 已
下は無相の三密を
明す。

前の如くして定と慧との手を以て相合し、虚空輪を並べ之れを建立す、是れ(二)一切執囉の印なり。真言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、藥囉醯濕囉履耶鉢囉鉢多、孺底麼耶、莎訶

復此の印を以て、虚空と火との輪相交ふ、是れ(三)一切宿の印なり。真言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、但吃灑娜囉、爾囊捺爾曳、莎訶

即ち此の印を以て、二の水輪を屈し掌中に入る、是れ諸(三)羅刹婆の印なり。真言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、囉吃灑娑地鉢多曳、莎訶

三昧の手を伸べて以て、面門に覆ひ、(四)爾賀囉を以て之れを觸るべし、是れ諸の(五)茶吉尼の印なり。真言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、頡履訶

秘密主、是の如くの上首の(六)諸の如來の印は、如來の信解より生ぜり、即ち同じく菩薩の標幟にして其の數無量なり。(七)又秘密主、乃至身分の舉動住止は、應に知るべし皆是れ密印なり、舌相の轉する所衆多の言説は應に知るべし皆是れ真言なり。是の故に秘密主、真言門に菩薩の行を修する諸の菩薩は、已に菩提心を發し、當に(八)如來地に

(一) 如来地 本不生の實義を解了するなり。
(二) 三昧耶 一切如来の本所立誓願を云ふ。

住して曼荼羅を畫くべし。若し此に異なるものは諸佛菩薩を誘するに同じ、(三)三昧耶を越ふ、決定して惡趣に墮せん。

國譯大毘盧遮那成佛神變加持經卷第四 終

國譯大毘盧遮那成佛神變加持經第五

(一) 字輪品第十

爾の時に薄伽梵毗盧遮那、持金剛秘密主に告げて言はく、諦に聽け秘密主、(二)遍一切處の法門有り。秘密主、若し菩薩此の字門に住すれば、一切の事業皆成就することを得べし。

- 南麼三曼多勃駄喃、阿
- 南麼三曼多勃駄喃、娑
- 南麼三曼多伐折囉赧、嚩
- 迦、佉、哦、伽、遮、車、惹、社、吒、吒、拏、茶、多、他、娜、駄、波、頗、麼、婆
- 野、囉、囉、嚩、奢、沙、娑、訶、吃、灑二合右此一轉皆上聲なり短に之れを呼べ
- 南麼三曼多勃駄喃、阿
- 南麼三曼多勃駄喃、娑
- 南麼三曼多伐折囉赧、嚩

(一) 字輪品 一
具の字輪に衆徳を圓
いふ。即ち此の字輪と
に三部四處輪を説
きたまふ。密印の品
に普門の密印を説
く。處の法門を説
ざるが故に此の品
阿耨の三部に於ては
示し、修行の三部に
淫染の四輪を轉
す。此の遍一切處門
には陀羅尼形と疏
せり。是れ文字は釋
法身の義にして法
界曼荼羅を成ずる
義なり。

(一) 暗 已に菩提の行を具足せし故に次に大空點を付して字輪を明す。

(二) 嚙 已に菩提を成ぜし故に次に涅槃を付したる字輪を明す。

迦、佉、哦、伽、遮、車、惹、社、吒、吒、拏、茶、多、他、娜、駄、波、頗、麼、婆
野、囉、邏、嚙、奢、沙、娑、訶、吃、灑、聲なり長に之れを呼べ

南麼三曼多勃駄喃、暗

慘

南麼三曼多伐折囉根、鏤

劔、欠、儼、儉、占、檐、染、瞻

帖、諂、喃、湛、擔、探、喃、淡

唵、咬、曠、曉

閻、噉、監、鏤、淡、衫、參、話

吃、衫、二合其の口邊字は皆第一轉を帶す本音に之れを呼べ

南麼三曼多勃駄喃、嚙

南麼三曼多勃駄喃、索

南麼三曼多伐折囉囉、嘆

屠、却、虐、嚙、灼、綽、弱、杓、磔、圻、擗、擇、博、託、諾、鐸

漣、泊、漠、嚙、藥、曙、落、嘆、鏤、唵、索、囉、吃、索、二合皆第一轉の音を帶す入聲に之れを呼べ

伊、縊、鳩、烏、哩、哩、里、翳、瀉、汗、泉

仰、壤、嚙、曠、莽、喝、穰、傳、曠、忙、唵、髻、喃、南、鏤、嘘、弱、擗、諾、莫

(一) 字門道 此は字門の善巧に依て即ち直言の道に成就するなり。
(二) 一切如來云 斯の如くの悉曇の字母は皆是れ如來の加持神力を以て法界體性より流出し給ふ。故に是の不思議の業用あり。若し人此中ば、即菩提に通過す。
(三) 行舞 衆生に隨順して種種の威儀を現するを云ふ。
(四) 過去云云 三世の諸佛同道を示す。
(五) 迦遮吒云云 最初の五類聲句の頭字を擧ぐるなり。前の迦遮吒多るは各四字の最初の字を擧げて餘を顯すなり。
(六) 初中後 阿阿引暗嚙の五字を初とし、迦等の二十字を中とし、

秘密主、是の如く(一)字門道は善巧法門なり、次第に眞言の道に住すべし、(二)一切如來の神力の加持し玉ふ所なり。善く正遍知の道を解するは、菩薩の(三)行舞なり。(四)過去と未來と現在との諸佛世尊已に説き、當に説き今説き玉ふ。秘密主、我れ今普く諸佛の刹土を觀するに、此の遍一切處の法門を見ざるることなし。彼の諸の如來宣説し玉はざるものあることなし。是の故に秘密主、若し眞言門に菩薩の行を修せんことを了知せんと欲はば、諸の菩薩は此の遍二切處の法門に於て、應に勤て修學すべし。(五)迦遮吒多波に於て、(六)初中後相ひ加し、(七)等持の品類を以て相入すれば、自然に菩提心と行と成等正覺と及び般涅槃とを獲得す。此等の説く所の字門、相ともに眞言法教に和合して初中後俱なることあり。眞言者若し是の如く知るときは、其の自心に隨て而も自在を得べし。此の(八)一一の句に於て決定の意を以て之れを用ゆべし。慧を以て覺知するときは當に無上殊勝の句を授けらるべし。是の如く一輪より字輪を(九)輪轉す、眞言者此れを了知するが故に、常に世間を照すこと(一〇)大日世尊の如くして而も法輪を轉す。』

秘密曼荼羅品第十一

野羅等の字は依等
 點の字なる故に
 後三昧の故に
 故に摩多なり此
 生ずる故に相如
 千餘の文字皆如
 句の住處なるが
 此の法門は阿闍
 梨子の爲に受茶
 羅を立自せんと
 來る時成りて之
 以て身に布して
 即大日如來なり
 此の品の中に秘
 密の深奥を以て
 心へり、謂く種
 即ち秘密茶羅を
 成就したまふ。上
 の字成就の義な
 り。【以上二卷頁
 二】法界俱舍譯

爾の時に薄伽梵毗盧遮那、如來眼を以て一切法界を觀察して、(一)法界俱舍に入り玉ふ。
 (二)如來平等莊嚴藏三昧を奮迅し玉ひ、(三)法界無盡莊嚴を現じ玉ふを以ての故に、是の
 眞言行門を以て、無餘の衆生界を度し、本願を満足し玉ふ。故に時に佛三昧の中に在
 まして、是の如くの無盡の衆生界に於て、衆の聲門より隨類の音聲を出し玉ふこと、
 其の本性の如く、業生成熟して、果報を受用する顯と形との諸色の、種種の語言と、
 心の思念する所において、而も爲に法を説き、一切衆生をして、皆歡喜を得しめ玉ふ、
 復た一一の毛孔より法界の(四)増身を出現し玉ひ、出し已て虚空に等同なり。無量世界
 の中に於て、一の音聲の(五)法界の語表を以て、(六)如來發生の偈を演説し玉ふ。
 能く隨類の形 諸法と法相とを生ず 諸佛と聲聞と 救世の因緣覺と
 勤勇の菩薩衆と 及人尊も亦然なり 衆生と器世界と 次第に而も成立し
 生住等の諸法 常恒に是の如く生ず (七)智と方便とを具するに由て (八)無慧
 の疑を離る
 而も此の道を觀じ玉へるが故に 諸の正遍知を説き玉へり
 爾の時に(九)法界生の如來の身、一切法界に於て、(一〇)自の身表を化して雲の如く遍滿

謂く如來印現の處
 一切如來其の中に
 處在したまふ。
 (二)如來平等云
 云如來の加持を
 以て種種の形相を
 示現して法界に遍
 滿するを云ふ。
 (三)法界無盡云
 云平等法界を以
 て法身を莊嚴し衆
 生を度するなり。
 (四)増身六大よ
 り無量の衆生を出
 現するを云ふ。
 (五)法界の語表
 阿字を説て衆生に
 阿字門を示すをい
 ふ。
 (六)如來發生有
 情非情皆如來なる
 が故なり。故に此
 を大師は此の文を
 證として六大能生
 の義を建立せり。
 (七)智と方便と
 は本不生の慧に
 諸法同時不二
 如の位、方便とは
 三密方便なり。上
 同の無慧の疑
 明の異名なり。無

せり、毘盧遮那世尊纔に心を生じ給ふ頃に、諸の毛孔中より無量の佛を出して、(一)展轉
 して加持し已つて還つて(二)法界宮の中に入りぬ。是に於て大日世尊、復持金剛秘密主に
 告げて言はく、秘密主、曼荼羅の聖尊の分位と種子と標幟とを造ることあり、汝當に
 諦に聽き善く思ひ之れを念すべし、吾今演説せん。持金剛秘密主言さく、是の如く世
 尊願樂くは聞かんと欲す。時に薄伽梵偈頌を以て曰く。
 (一)眞言者は圓壇を 先づ自體に置き 足より而も齋に至ては 大金剛輪を成す
 此れより而も心に至ては 當に水輪を思惟すべし 水輪の上に火輪あり 火
 輪の上に風輪あり
 次に持地を念じて 而も衆の形像を圖くべし
 爾の時に金剛手、大日世尊の身と語と意との地に昇て、法において平等觀を以て、彼
 の未來の衆生を念じて、一切の疑を斷せしめんが爲の故に、(二)大眞言王を説て曰く、
 南麼三曼多勃駄喃、阿三忙鉢多達摩駄觀、葉登葉哆喃、薩婆他、暗欠暗唵、糝索、
 含鶴、嚩嚩、鑿嚩、莎訶鉢、嚩嚩訶囉、鶴、莎訶嚩落、莎訶
 持金剛秘密主、此の眞言王を説き已ぬ。時に一切如來(三)十方世界に住して、各の右の

法界生。如來の身は六大法界より生ず。而も實に六大即ち如來身なり。
○自の身表。法身の如來を出現したまふ。身は能く見る故に表といふ等流身なり。
【以上五言頭註】
○展轉化身。曼荼羅の第一重より第二重、第二重より第三重を生ずるが如し。
○法界宮。自性法身は法界體の故に。
○眞言者。阿闍梨弟子の爲に灌頂の時、先づ自身を觀する。五字嚴身觀を明す。圓壇を空大なり。
○大眞言王。十二眞言王なり。此の暗欠已下十二眞言は一曼荼羅を成就する眞言也。
○十方世界。金剛手十方世界に現じて説き玉ふが故に。
【以上五言頭註】

手を舒べて執金剛の頂を摩でて、「善哉」の聲を以て而も稱歎して言く、善哉善哉佛子、汝已に毗盧遮那世尊の身と語と意との地に超昇せり。一切の方所の平等の眞言道に住する諸の菩薩を照明せんと欲ふが爲の故に、此の眞言王を説く。何を以ての故に、毗盧遮那世尊應正等覺、菩提の座に坐し玉ひしとき、○十二句の法界を觀じて、四魔を降伏し玉ふ。此の法界生は、三處より流出して天魔の軍衆を破壊す。次に世尊の身と語と意と平等を得て、身量虚空に等同なり、語と意との量も亦是の如し。無邊の智生することを得得して、一切の法に於て自在に而も法を演説し玉ふ。所謂此の十二句は眞言の王なり。佛子、汝今現に毗盧遮那世尊の平等の身と語と意とを證するが故に、衆に知識せらるること正遍知者に同じ。而も偈を説いて言く、

○汝一切智の 大日正覺世尊に 最勝の眞言の行を問ひたてまつる 當に法教を演説すべし
我、往昔是れに由て 妙菩提を發覺し 一切の法を開示して 滅度に至らしむ
現在十方界の 諸佛咸く證知し玉ふ
爾の時に具徳金剛手、心に大に歡喜し、諸佛の威神に加持せらるるが故に、而も偈を

即ち十二句云云なり。此眞言王は法界の體性なり。汝は金剛薩埵を指す。十方の如來汝大日正覺尊に問ひしと成り。
○優陀那。常に無問自説の義は、今は惣じて攝するの義なり。一偈を以て無量の法義を攝するが故に。
○我衆生。此より已下に四十七問あり。

○地相。壇地の好惡の相に依て悉地の相を知るべし。
○云何んが云。覺障の爲に惱まざる故に之れを避けて安穩に住すること問ふなり。

説いて言さく、
是の法は盡くすること有ることなく 自性も無く住も無し 業と生とに於て解脱して 正遍知に同じ
諸の世を救ふ方便を以て 悲願に隨て轉じて 無生智を開悟し玉ふ 諸法は是の如きの相なり
時に執金剛秘密主、復(ウダナ)優陀那の偈を説いて、毗盧遮那世尊に請問したてまつりて、此の大悲藏より生ずる大曼荼羅に於て、疑ふ所を決斷す、未來世の諸の衆生の爲の故なり。
已に一切の疑を斷じ玉へる 種智は熱惱を離れたり 我衆生の爲の故に
導師に請問したてまつる 唯大牟尼説き玉へ 阿闍梨に幾かある 弟子に復曼荼羅は何をか先とする 幾種かある
云何んが地相を知る 云何にしてか而も擇治せん 云何んが當に作淨すべき 云何んが彼に堅住せん

及び諸の弟子を淨むる 唯願くは、導師説き玉へ 云何なるか已に淨むる相なる 何を以てか而も護ることを作す

云何んが地を加持する 事業には誰をか初とする 修多羅シユトヲに幾かある 云何にしてか地分を作す

幾種の供養を修する 云何なる華香等をかせん 此の華當に誰にか獻るべき 香も亦復是の如し

云何んが而も奉獻せん 何の華香をか以てすべき 諸の食と護摩と 各の何の軌儀をか以てせん

及び諸の聖天の座 願くは此の教法を説き玉へ 身相の顯と形との色 唯次第に開演し玉へ

尊ぶ所の密印と 及與び自ら敷座とを説き玉へ 何が故にか名て印と爲し 是の印何に従てか生ずる

灌頂に復幾種かある 三摩耶に幾かある 眞言者は幾時にか 眞言の行を勤修して

(二)正覺一切智
已下大日如來の答
説

當に菩薩の道を具すべき 云何にしてか眞諦を見る 悉地に幾の種かある 及與び成就の時

云何にしてか大空に昇る 云何なるか身秘密 此の身を捨てずして 而も天身と成ることを得る

種種の諸の變化 彼れ復何に従てか生ずる 日と月と火と方と等 曜と宿との星の時分の

現する所の諸の不祥と 生死の乗苦を受くるとを 云何にして起らざらしむ 起す所を盡く除滅せしめて

而も常に 諸佛兩足尊に親近することを得ん 幾種の護摩の火かある 幾の事を以てか而も威を増す

諸佛の差別の性 唯願くば導師説き玉へ 無餘の諸世界と 及與び出世間と 彼の果と及び數と量との 殊勝の三摩地と 成熟すること何の所にか在る 成熟せざること云何ぞ

復幾の時を齊てか 業と生とを解脱することを得る (二)正覺一切智 熱惱を

離れたる世尊 金剛手に告げて言はく 善哉大勤勇秘密曼荼羅に 聖天の位を決定す

大悲を根本として生ぜる 無上の摩訶衍は 諸佛の最秘密なり 汝が問ふ所の如く

大力持金剛 我今略して 曼荼羅の初業を宣説すべし 佛子應に諦に聴くべし

十二支句生の 大力持明王は 最も先きに作すべき所なり 本三昧に住し

瑜伽の道を解了して 而も衆の事業を作せ 阿闍梨に二あり 印と眞言と

に通達せり 彼の相も亦是の如し 深秘と顯略との分あり 能く深廣の義を知て 傳ふべき者には方に授く

正覺の長子なり 遠く世の樂を離す 第二は現法を求め 深く癡の攀縁に著す

世間の曼荼羅なり 一切斯れが爲に作る 諸佛二足の尊 灌頂傳教の者に

四種の弟子を説き玉ふ 時と非時と差別なり 一には時念誦と 非時と

俱と非俱とあり

具に一切の相あるは 佛親の弟子なりと説き玉ふ 最初に地相を知るべし

即ち所謂る心地なり 我已に作淨を説き 前の如く事業を修せよ 若し過患を離るれば 心地に畏

る所なし 當に眞淨を成ずることを得て 一切諸の過を離るべし 堅く是の如きの知に住すれば 自の三菩提を見る

若し此に異なるものは 能く淨地を清むるにあらず 若し妄分別に住せば 行者其の地を淨むべし

秘密主淨に非れば 菩提心を離るるを以てなり 故に應さに分別を捨てて 一切の地を淨除すべし

我廣く法教に ある所の曼荼羅を説くべし 是の中に先とする所の事を 愚癡にして知解せざれば

世間の覺と名くるに非ず 亦一切智に非ず 乃至 分別諸苦の因を捨ること

國譯大毘盧遮那成佛神變加持經卷五 一六三

(二)心地 擇地造 壇の如し。

(二)十二支句生 十二支句より生ずる大力持明王なり (一)阿闍梨 深秘と顯略とを阿闍梨は出世間の阿闍梨なり (二)阿闍梨 深秘と顯略とを阿闍梨は出世間の阿闍梨なり (三)阿闍梨 深秘と顯略とを阿闍梨は出世間の阿闍梨なり (四)阿闍梨 深秘と顯略とを阿闍梨は出世間の阿闍梨なり (五)阿闍梨 深秘と顯略とを阿闍梨は出世間の阿闍梨なり (六)阿闍梨 深秘と顯略とを阿闍梨は出世間の阿闍梨なり (七)阿闍梨 深秘と顯略とを阿闍梨は出世間の阿闍梨なり (八)阿闍梨 深秘と顯略とを阿闍梨は出世間の阿闍梨なり (九)阿闍梨 深秘と顯略とを阿闍梨は出世間の阿闍梨なり (十)阿闍梨 深秘と顯略とを阿闍梨は出世間の阿闍梨なり (十一)阿闍梨 深秘と顯略とを阿闍梨は出世間の阿闍梨なり (十二)阿闍梨 深秘と顯略とを阿闍梨は出世間の阿闍梨なり

能はず

應當に弟子の爲に 而も菩提心を淨むべし 護るに不動尊を以てす 或は降三世を用ゆる

若し弟子 妄執の爲に動せられざれば 當に最正覺を成すべし 垢なきことを虚空に喩ふ

初には是の地を加持すること 諸佛の教に依る 第二に心自在なり 唯此れ餘教に非るなり

四種の(一)蘇多羅あり、謂く白と黄と赤と黒となり、第五に念すべき所は 所謂る虚空の色なり

空の中に而も等しく持して 曼荼羅を印定す 第二に(二)經を持して 道場の地に置け

(三)一切如來の座と 及び諸佛智子には 悦意の妙蓮華なり 世間に吉祥と稱す

緣覺と諸の聲聞とは 所謂る邊智の者なれば 當に知るべし敷く所の座は

(一)蘇多羅 雜多翻す、衆德を連持して散逸せざらむ。

(三)一切如來座 如來の座は八葉蓮華の如く、菩薩の座は半開なり。

(一)菱荷 二字共に蓮即ち荷葉なり。

(二)供養云 亂脱あり。

(三)手より云 合掌の印なり。

(四)支分生云 合掌二空を立て風するなり。

(五)法界云 一香一華も六大より出生するが故に。

(一)菱荷青蓮の葉なり

世界の諸天神は 梵衆を以て初と爲す 赤色の鉢曇華なり 彼を稱して座の王となす

此を降ては應き所の如く 念じて其地分に居らしめよ (二)供養に四種あり 謂く作禮と合掌と

并及びに慈と悲と等と 世間の華と香とを與ふると (三)手より發生する華とを 諸の救世者に奉る

(四)支分生の印を結んで 而も菩提心を觀せよ 各各の諸の如來と 彼の所生の子と等に

是の無過の華の 芬妙あり復光顯にして 法界を樹王と爲るを以て 人中の尊に供養す

眞語を以て加持し 三昧自在に轉ず 勝妙にして廣大の雲の如くして (五)法界の中より出生す

彼れより衆華を雨らして 常に諸佛の前に遍す 其餘の世天等に 亦此の

(一)性類云云各の本類といふこと

(二)空水輪 空・水・合する三股印なり

(三)護摩 護摩は燒の字義なり護摩は世間事火の護摩を外護摩となし佛法の護摩を内護摩となす又佛法の中にも内外あり外は事作法に由り内は内觀なり(四)復芽云云 菩提心の芽は菩提心の種より生ず(五)三位 三位は三の中に住すとは三密なり本尊は意密、壇口は語密即ち眞言、自身は身密即ち印なり(六)三業道 三密觀なり

(一)如來部云云色及び形類を釋す

(二)四方云云 四方は増益(黃色)の輪(白色)は息災、三隅(黑色)は降伏、半月は(雜色)鈎召なり

(三)諸佛云云 此印は何れより生ずと云ふを釋す(四)此法生の印 即ち法界にして六大法界の義なり

華を散すべし

奉獻せんとときには隨て

本眞言と(一)性類とに相應せよ

是の如く塗香等も

亦其の所應に隨ふべし

(三)空水輪を相持する

是れを吉祥の印と謂ふ

彼の所奉の華等は

自心に當

てて之れを獻るべし

若し諸の世天神ならば

齋の位に在りと知るべし

或は金剛拳の印

若くは

復蓮華鬘を以て

而も空中に在て

導師救世者に獻るべし

乃至諸の世天は

各の其の次第の

如くすべし

(三)護摩に二種あり

所謂る内と及び外となり

業と生とに解脱を得て

(四)復

芽は種より生ずることあり

能く業を燒くを以ての故に

説いて内護摩と爲す

外用に(五)三位あり

三位

は三の中に住して

(六)三業道を成就す

世間の勝護摩なり

若し此れに異て作すものは

護摩の

業を解せざるなり

彼癡にして果を得ず

眞言の智を捨離す

(一)如來部の眞言と

及び諸の正覺

の説とは

當さに知るべし白と黄となり

金剛には衆色を具す

觀自在の眞言は

純素

にして事に隨て遷す

(二)四方相ひ重て普し

輪圓なること次第の如し

三隅と半月輪と

而も形を

説くこと亦然なり

初に應さに色像を知るべし

所謂る男女の身なり

或は復一切處に

其の類

の形色に隨て

不思議の智より生ず

是の故に不思議にして

物に應じて殊異あれども

智

と智證と常に一なり

乃至心の廣博なること

當さに知るべし是れ其の量なり

座と印とも亦是の如

し 以て諸の天神に及ぼす

(三)諸佛の生ずる所の如く

印も彼れに等同にして生ず

(四)此法生印を以て

灌頂云云已下印法三種灌頂を以て常三昧耶灌頂と云ふは未傳法者を除く

三種五種云云五種は見受茶羅第一は結緣灌頂第二は明灌頂第三は復次云云是れ第四傳法灌頂なり

諸の弟子を印持す

故に略して法界を説いて 是を用ひて標幟と爲す (一) 灌頂に三種あり 佛子

至心にして聴くべし

若し秘印の方便は 則ち作業を離る 是れを初の勝法と名く 如來の灌頂し玉ふ所なり

所謂る第二とは 衆事を起作せしむ 第三には心を以て授く 悉く時と方とを離る

尊をして歡喜せしむる故に 所説の如く作すべし 現前に佛灌頂し玉ふ 是れ則ち最も殊勝なり

正等覺 略して (二) 五種の三昧耶を説き玉ふ 初は曼荼羅の 具足せるを見る三昧耶なり

未だ眞實の語を傳へず 彼の密印を受けず (三) 第二の三昧耶は 入て聖天の會を觀るなり

(四) 第三は壇と印とを具し 教に隨て妙業を修す (五) 復次に傳教を許すには

三昧耶を具すことを説く

印壇の位を具して 教の所説の如くすと雖 未だ心灌頂に逮ばざれば 秘密の慧生せず

是の故に眞言者 秘密道場の中に於て (一) 第五の要誓を具して 法に隨て灌頂すべし

當さに知るべし 此に異なるものは 三昧耶と名くるに非ず 善く住して若し意を觀すれば 眞言者心を覺る

(二) 三處を得ざれば 彼れを説いて菩薩と爲す 無緣の觀行を得て 方便を以て衆生を利す

衆の善本を植ゑしめんが爲めなり 故に人中の勝と號す 諸法の本寂にして常に自性無き中に於て

安住すること須彌の如し 是れを名て見諦と爲す 此の空は即ち實際なり

虚妄の言説に非ず 見る所猶し佛の如し 先佛も是の如く見玉へり 菩提心を逮得する 悉地は

圖釋大毘盧遮那成佛神變加持經卷五 一六九

三處 自身と所觀の法と成就の時と云ふ

第五 是れ秘密灌頂にして瑜祇灌頂なり

最も無上なり
 此れより五種の 諸の悉地に差別あり 所謂る修行に入ると 及び諸地に勝進すると
 世間の五神通と 諸佛の縁覺と等なり 修業に間息無くして 乃至心續淨に至り
 未だ熟せざるを成熟せしむ 爾の時に悉地成す 彼の一時の頃に於て 淨業と心と俱に等し
 眞言者當さに 悉地意に隨て生ずることを待べし 悉地は空界に昇ることは 幻の畏るる者無きが如し
 咒術の網に惑はさるること 帝釋の網に同じく 乾闥婆城の 所有の諸の人民の如し
 身の秘密も是の如し 身に非ず亦識に非ず 又睡夢に於て 諸天の宮に遊べども
 此の身をも捨てず 亦彼にも至らざるが如し 是の如く瑜伽の夢の 眞言行

(二) 正覺云云 前に略して護摩の相を説くも、又更に内外の護摩を説く
 (三) 増威 供物を加持して威光を増すなり。

に住するもの
 功徳の業より生ずるところの 身相は猶し虹霓のごとし 眞言の如意珠は 意と語と身とより出生して 而も分別の想なし 十方の虚空の 諸の有爲念に隨て衆の物を雨らせども
 眞言者も 一切の分別の行に染せられず 唯想のみありと解了して 是の如く遍く觀察すべし
 爾の時に眞語者を 諸佛同じく隨喜し玉ふ (二) 正覺兩足の尊 二種の護摩を説き玉ふ
 所謂る内と及び外となり (三) 増威も亦是の如く 諸尊の殊類と性とを 觀察して當さに證知すべし
 世間の諸の眞言には 今彼の限量を説く 福德自在等の 衆の知識の天神と彼の所説の明咒と 及及び大力の印とは 彼は皆現世の果なり 故に分量ありと説く

〔一〕最初云云。大
日受茶羅なり。

〔二〕復次に巴下
蓮花部の曼茶羅を
明す。今此は三部
各別に於て、蓮花
部は觀音を以て主
とし、中臺に置き
次に外三重の第一
重には十方諸佛、一
重には諸尊、第三重
は八部衆なり。

せり

當に知るべし此れ〔一〕最初の 悲生曼茶羅なり 此れより諸壇を流す 各の其
の本教の如し

事業と形と悉地と 諸の佛子を安置するなり 〔二〕復次に秘密主 如來の曼茶

羅は

猶し淨圓月の如く 内に商佉の色を現す 一切の佛三角にして 白き蓮華に

在す

空點を標幟と爲し 金剛印をもて圍繞し 彼の眞言主より 周布して光明を

放つ

疑慮のなき心を以て 普遍して而も流出す 復次に秘密主 觀世自在者の

秘密曼茶羅は 佛子一心に聽け 普遍四方の相にして 中に吉祥の商佉あり

鉢曇華を出生し 開敷して果實を含めり 上へに金剛の慧を表し 承るに大

蓮の印を以てせり

一切の種子を布して 善巧にして以て種となすべし 多羅と毗俱知と 及與

〔一〕明王 巴下金
剛部曼茶羅を明
す。金剛手を以て
中臺とし、餘の部
類を第二院とし、
八部を第三院とな
すなり。
〔二〕金剛 五股金
剛なり。
〔三〕迦羅奢 華の
上に瓶あり。

び白處尊と

明妃資財主と 及與び大勢至と 諸の吉祥の受教と 皆曼茶羅に在り

得自在者の印は 殊妙にして標相を作せ 何耶揭哩婆は 法の如く三角に住

して

曼茶羅圍繞せり 嚴好にして初日の暉あり 當に〔一〕明王の邊に在くべし 巧

慧のもの安立せよ

復次に秘密主 今ま第二壇を説かん 正等四方の相なり 〔二〕金剛の印を以て

圍繞し

一切妙にして金色なり 内心に蓮華を敷け 臺に〔三〕迦羅奢を現す 光の色淨

月の如し

亦大空點を以て 周布して自ら莊嚴せよ 上に大風の印を表す 靈慧として

猶し玄雲のごとし

鼓動せる幢幡の相なり 空點を標幟とせよ 其の上に猛焰を生ず 劫災の火

に同じくして

(一)朱黠 赤黒く
紫なり、謂く火
盛なる時は其火
黒き故に。中蓋
(二)金剛印 大日
の下の持明院の
不動の降三世の
中間に置くべき諸
金剛を擧ぐ。

而も三角の形を作せ 三角を以て之れを圍らせ 光鬘相周普くして 晨朝の日の暉の色なり

是の中に鉢頭摩あり (一)朱黠なること猶し劫火のごとし 彼の上へに(二)金剛印あり 流れ散じて焰暉を發す

持するに(三)字の聲を以てせよ 勝妙種子の字あり 先佛も是れ汝が 勤勇の曼荼羅なりと説き玉へり

部母と商賈羅と 及び金剛部主と 金剛鉤と素支と 大徳持明王と 一切皆な此の 大曼荼羅の中に於て 印と壇と諸の佛子との 形と色とあり 各の次の如く

類に隨て而も相應すべし 諸業善く成就す 復次に我が説く所の 金剛自在者は

謂く虚空無垢と 金剛輪と及び牙と 妙住と名稱と 大忿と及び迅利と 寂然と大金剛と 並に及び青金剛と 蓮華と及び廣眼と 妙金剛と金剛と 及び住無戲論と 無量虚空歩となり 是れ等の曼荼羅に 説く所の白と黄と赤と

(一)不動云云 不動の曼荼羅を明す、半月の壇中に三角形を畫き、其中に不動尊を安す。

(二)復次 已下佛母曼荼羅を示す。

(三)如來頂 即ち佛頂の印なり。
(四)中分 中蓋なり。
(五)三分の位 外三重なり。

乃至黑色等と 印と形と及び所餘となり 三戟と一股印と 二首皆五峯なると 或は執金剛の鬘と 色類に隨て區ちに別なり 一切に種子を作せ 大福徳當に知るべし

(一)不動の曼荼羅は 風輪と火と俱なり 涅槃底の方に依て 大日如來の下にあり

及び種子圍繞し 微妙の大慧刀と 或は復繙索印と 具慧の者を安布せよ 降三世は殊異なり 謂く風輪の中に在て 繞すに金剛印を以てすべし 而も三處に住せり

(二)復次に秘密主 先づ曼荼羅の 諸佛菩薩の母を説かん 壇の形像を安置せば方正にして眞金色にして 金剛印を以て圍繞せよ 最勝の曼荼羅なり 今當さに尊相を示すべし

彼の中に大蓮華あり 暉焰遍くして黄色なり 中に(三)如來頂を置け (四)中分を超越して

而も(五)三分の位に至て 應さに如來眼を作すべし 自ら光焰の中に住す 遍

く彼の種子を布すべし

(二)次に一切菩薩の 大如意寶尊あり 謂く彼の曼荼羅は 圓白にして而も四に出でたり

(一)次に一切云 諸菩薩の曼荼羅を置く、中央に如意珠を安く、其上に復次に已下釋迦曼荼羅を明す。

遍く寂にして極て清淨なり 一切の希願を満す (三)復次に應さに諦に聽くべし 釋迦師子の壇は

(三)大因陀羅 方壇を云ふ、心王の義なり。

謂く(四)大因陀羅なり 妙善眞金色にして 四方の相均等なること 前の如くにして金剛印あり

(四)大鉢 三股金剛の上に紅蓮花ありて、其上に大鉢を安く、是れ釋迦の三昧耶身なり。

上に波頭摩を現じ 周遍して皆な黃暉あり (五)大鉢に光焰を具せり 金剛印圍繞せり 袈裟と錫杖等と 之れを置くこと次第の如し 五種の如來頂は 諦に聽け今當に説くべし

白傘は傘印を以てす 具慧者勝頂は 圍すに大慧刀を以てし 普遍く皆流光あり

(五)髻の相 佛頂形の上分に髻あるなり。

最勝頂は輪印なり 除障頂は鈎印なり 大士頂は(六)髻の相なり 是れを火聚

の印と名く

廣生は跋折羅 發生は蓮華を以てし 無量聲は商佉なり 觀察して像類を知るべし

(六)大口 忿怒の口に雙牙を出せる者を云ふ。

毫相は摩尼珠なり 佛眼は次に當に聽くべし 頂髻にして遍く黄色なり 圍

(七)黒蓮 黒色蓮花に故に標示なり。

すに跋折羅を以てす 無能勝妃の印は 手を以て蓮華を持す 無能勝は(八)大口にして 而も(九)黒蓮の上に在り

(八)淨境界 已下は淨居天を始として外淨の剛部の印を説く。

(九)淨境界の行は 所謂る淨居天なり 彼の諸の印相を置け 佛子應に諦かに聽くべし

(九)思惟の手 云々 右の地水二指を屈して三指を開き立つ、頭指を開き、頰に付くるなり。

所謂る(十)思惟の手と 善手と及び笑手と 華手と虚空手となり 之れを畫くこと法則の如し

地神には(十一)迦維奢なり 圓白にして金剛を圍らせ 請召火天の印には 當に大仙の手を以てすべし

(十一)迦維奢 瓶と持花の印と同じ。いふ、地神の三形なり。

(十二)迦攝と驕苔摩と 末建拏と竭伽と 婆私と倪刺婆とは 各の其の次第の如く

國譯大毘盧遮那成佛神變加持經卷五

應さに韋陀の手を壽して 而も火壇の内に居くべし 閻摩には但茶の印なり
當に風輪の中に處くべし

沒栗底は鈴の印なり 黑夜は計都の印なり 湧達羅には輪羅なり 大梵妃に
は蓮華なり

俱摩利には(一)鑠底なり 毗瑟女は輪の印なり 當に知るべし焰摩后には 沒
揭羅の印を以てし

嬌吠離耶后には (二)劫跋羅の印を用ひよ 是の如き等は皆な 風曼荼羅の中
に在り

鳥鷲と及び(三)婆栖と 野干と等圍繞せり 若し悉地を成せんと欲はば 法に
依て之れを圖すべし

涅哩底には大刀なり 毗紐は勝妙の輪なり 鳩摩羅は鑠底なり 難陀跋難陀は
密雲と電と俱なり 皆な清潭の色を具す 門の廂衛を夾輔して 釋師子の壇
に在り

商羯羅には三戟なり 妃には鉢胝の印を作せ 月天には迦羅奢なり 淨白に

(一)鑠底 載なり

(二)劫跋羅 偶頓
と翻す。

(三)婆栖 鷲に似
て少しく黄上の
色なり、鶯赤し此
の鳥に身を秘する
法あり。

(一)佛子 已下曼
荼羅第二重の菩薩
を明す。
(二)施願云云 文
殊菩薩の金剛名號
なり。
(三)火生云云 火
生とは三角なり、火
三角の中に青蓮華
の印をなす。

して蓮華を敷けり 日天は金剛輪なり 表するに輿輅の像を以てす 社耶毗社耶は 當に知るべ
し大方の者なり 俱に大弓の印を以てす 因陀羅輪に在り 風の方には風幢の印なり 妙音に
は樂器の印なり 而も圓壇の中に在り 汝大我應さに知るべし 種子の
縛嚙拏には絹索なり 而も圓壇の中に在り 汝大我應さに知るべし 種子の
字環繞せり 是の如き等の標誌は 次の如く曼荼羅の 釋師子の眷屬なり 今已に略して
宣説す (一)佛子次に諦に聽け (二)施願の金剛の壇は 四方相均しうして普く 衛らす
に金剛の印を以てす (三)火生曼荼羅を作して 内心に復 妙善の青蓮の印を安
當に彼の中に於て 置す 智者曼殊音の 本眞言を以て之れを圍らせ 法の如く種子を布して 而も以

(一) 羌揭梨 小刀なり。鋸齒の形に作す。
(二) 復次 已下南方除蓋障の眞言を明すなり。
(三) 火輪 三角の曼荼羅なり。即三角の中に如意珠を畫き、又は尊形を畫く。

て種子と爲せよ
復其の四傍に於て 嚴飾するに青蓮を以てす 勤勇の衆を圖作すること 各
の其の次第の如し
光網は鈎印を以てし 寶冠は寶印を持し 無垢光童子は 青蓮にして而も未
だ敷けず
妙音具大慧の 説く所の諸の使者は 當に知るべし彼の密印は 各の其所應
の如し
警設尼には刀印なり 優波は輪羅印なり 質怛羅には杖印なり 地慧は幢印
を以てす
彼の招召使者には 鶯俱尸の印を以てすべし 一切是の如く作せ 圍らすに
青蓮華を以てせよ
所謂の諸の奉教には (一) 皆羌揭梨の印なり
(二) 復次に南方の印 除一切蓋障は 大精進の種子 謂く眞陀摩尼なり
(三) 火輪の中に住して 翼從して端嚴の衆あり 當に知るべし彼の眷屬の 秘

(一) 除疑 獨股杵を寶瓶の中に半ば入るゝなり。

(二) 發起手 手を舒べて掌を仰げて下より上に向けて之れを擧ぐ。
(三) 悲手 空水相捻じて心に當て餘は伸べ散す。
(四) 悲念火指を屈して心前に向く。
(五) 北方云云 已下北方地藏の曼荼羅を明す。

密の標誌

次第に應に圖畫すべし 我今廣く宣說せん (一) 除疑は寶瓶を以て 一股金剛を置き
聖者施無畏は 施無畏の手に作せ 除一切惡趣は (二) 發起手を相と爲す
救意慧菩薩は (三) 悲手常に心に在く 大慈生菩薩は 應さに華を執る手を以てす
(四) 悲念は心上に在て 火輪の手を垂れ屈す 除一切熱惱は 諸願を施す手に作せ
甘露の水流れ注いで 遍く諸指の端に在り 具不思議慧は如意珠を持する手なり
皆な蓮華の上に住して 曼荼羅の中に在り (五) 北方の地藏尊の密印は次に當に説くべし
先づ莊嚴の座を作りて 因陀羅壇に在け 大蓮光焰を發して 間錯して衆艶を備へたり
彼こに於て大幢を建てて 大寶を其の端に在く 是れを名て最勝 密印の形像と爲す

(一) 慕達羅 印を
翻す。

(二) 二首金剛 都
五股なり。

(三) 西方云云 已
下虚空藏の曼荼羅
を説く。

(四) 輪の印 四股
の刀輪の印なり。

復當に殷勤に 上首の諸の眷屬を作るべし 無量無數の衆あり 彼の諸の

(一) 慕達羅は

寶作には寶の上に於て 三股金剛の印あり 寶掌には寶上に於て 一股金剛
の印あり

持地には寶の上に於て (二) 二首金剛の印あり 寶印手には寶上に 五股金剛
の印あり

堅意には寶の上に於て 羯摩金剛の印あり 一切皆な應さに 彼曼荼羅の中
に住すべし

(三) 西方の虚空藏は 圓白悅意の壇にして 大白蓮華の座にあり 大慧刀の印
を置け

是の如きの堅利の刃は 鋒銳なること猶し氷霜の如し 自の種子を種と爲す
智者當に安布すべし

及び諸眷屬の 印形を畫くこと法教の如くせよ 虚空無垢尊は 應さに(四) 輪
の印を以てすべし

輪像自ら圍繞す 具足して風壇に在り 虚空慧は商法を 風曼荼羅に在け

清淨慧は白蓮を 風曼荼羅に在け 行慧の印相は 當に(五) 碾磑寶を以てすべし

上に青蓮華を挿み 風曼荼羅に在け 安慧は金剛蓮を 風曼荼羅に在け

略して佛の秘藏の 諸尊の密印を説き竟んぬ

(一) 入秘密曼荼羅法品第十二 爾の時に世尊、又復入秘密曼荼羅の法を宣説し玉ふ。優陀那に曰く、

(二) 眞言遍學者 秘密壇に通達して 法の如く弟子の爲に 一切の罪を焼き盡す

(三) 壽命悉く焚滅して 彼をして復生せざらしむ 灰燼に同じ已つて 彼の壽
命還つて復す

謂く(四) 字を以て字を焼き (五) 字に因て而も更に生ず 一切の壽と及び生と

清淨にして遍く無垢なり

(六) 十二支句を以て 而も彼の器に作せ 是の如きの三昧耶は 一切の諸如來と

菩薩救世者と 及び佛と聲聞衆と 乃至諸の世間と 平等にして違逆せず

此の平等誓の 秘密曼荼羅を解せば 一切の法教に入るに 諸壇に自在なる

(一) 入秘密云云 當品より第十五品 に至るまでは未傳 法者を除くは上の 曼荼羅の形に依り 此の品にて入秘密 等の法を説く。 (二) 眞言遍學者 諸尊法を遍學せる 人なり。 (三) 壽命業壽な り、煩悩業に依て 有漏の業を離れ故 に。 (四) 字を以て云 云、字を以て阿 字の行者を焼きて 餘りなからしむ。 (五) 字に因て云 云、字に因て云 阿字著提心の芽を 生ぜしむ。 (六) 十二支句 身に布する法なり。 王を以て身分に布 するなり。

ことを得べし

我身彼に等同なり

眞言者も亦然なり

相ひ異らざるを以ての故に

説て三

味耶と名く

入秘密曼茶羅位品第十三

(一) 入秘密云云
上品に入秘密の法
則を説くは雖も未
だ所入の内心自證
の秘密曼茶羅の本
位を説かず故に
此品に入るは證入
の品に入るは證入
の品に入るは證入
(二) 未來世云云
未來機の爲めに説
きたまふ意なり
(三) 定中云云
は寂滅の法に住す
受茶羅を見したま
ふ
(四) 五寶 金、銀、
珊瑚、琥珀、眞珠
をいふ

爾の時に大日世尊等至三昧に入つて、(一) 未來生の諸の衆生を觀じ玉ふが故に、(二) 定中
に住し玉ふ。即時に諸佛の國土地平なること掌の如し。(三) 五寶間錯し、大寶の蓋を懸
けて門標を莊嚴す。衆色流蘇して其の相長廣なり。寶鈴と白拂と名衣と幡珮とを、綺
へ絢りて、垂れ布いて而も之れを校飾す。八方の隅に於て、摩尼幢を建て、八功德水
芬散し盈滿せり。無量の衆鳥鴛鴦と鸞鷲とありて、和雅の音を出す。種種の浴池に、
時華と雜樹と敷き榮へ間り列りて、芳茂嚴好なり。八方に五寶の瓔珞を合せ繫けたり。
其の地の柔軟なること、猶し綿纒の如し。之れに觸れ踐む者は皆な快樂を受く。無量の
樂器、自然に韻を諧ふ、其の聲微妙にして人の聞かんと樂ふ所なり。無量の菩薩の福に
隨つて感ずる所の、宮室殿堂意の生座あり。如來の信解願力より生ずる所の、法界標
幟の大蓮華王を出現して、如來の法界性身、其の中に安住し、諸衆生の種種の性欲に

(一) 諸佛 大日
り、大日は諸佛の
總徳の故に
(二) 不思議法身
如來の身に示し玉
ふ所の種種の形聲
皆阿字より生ずる
なり
(三) 彼の心地 瑜
伽座云ふ、即ち五
大なり
(四) 眞言密印 眞
言は阿彌等の五
大密印は五大
の印なり
(五) 鵝摩金剛 鵝
磨金剛にて、弟子
の心地を加持し
煩悩を淨除して曼
茶羅を建立す
(六) 方なる壇云
云、方は弟子の善
提心地を表す
(七) 四角の壇にして四
門あり、即ち樂我
表す

隨つて、歡喜を得せしめ玉ふ。時に彼の如來の、一切の支分に、無障礙力あり。十智
力信解より生ずる所なり。無量の形と色との莊嚴の相あり、無數百千俱胝那由他劫の
布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の、諸度の功德に資長せらるる身、即時に出現す、
彼出現し已つて、諸の世界大衆會の中に於いて、大音聲を發して、而も偈を説いて言
はく、

諸佛は甚だ奇特にして

權智不思議なり

阿頼耶無きゆへ慧を以て

含藏

して諸法を説き玉ふ

若し無所得の 諸法の法相を解すれば

彼無得にして而も得て

諸佛の導師

を得べし

是の如きの音聞を説き已て、還て如來の(一) 不思議法身に入る。

爾の時に世尊、復執金剛秘密主に告げて言はく、善男子、諦に内心の曼茶羅を聽け、秘
密主、(二) 彼の身地は即是れ法界の自性なり、(三) 眞言密印の加持を以て而も之れを加持
す。本性清淨なるを以ての故に、(四) 鵝磨金剛を以て護持する所なるが故に、一切の塵
垢の我と人と衆生と壽者と意生と儒童と造立者と等の株杓の過患を淨除す。(五) 方なる

(二) 其の中云云
大日如來なり。

(三) 東南方云云
四菩薩の列次、一
には普賢、二彌陀、
三阿彌陀、四觀音、
之れ理智慈悲の次
第なり、之を善と
す、一には曼荼羅
の像、一には今
の様なり、今この
様は亂脱にして之
を取らず。

(三) 意生云云
謂く菩提心地より生
ずる所の精進(香)
忍辱(華)智慧(燈)
戒(塗)香(着)膳
無作の功德を以て
供具す。
眞言者 大阿
闍梨なり。大阿
闍梨なり。大日如
來。

壇にして四門あり、西に向て通達せり。周く道界を旋らすべし。内に意生の八葉の大蓮華王を現す、莖を抽き藥を敷きて綵り絢りて端妙なり。(二) 其の中に如來をす、一切世間に最も尊特の身なり。身と語と意との地を超越して心地に至り、殊勝悅意の果を逮得す。彼に於て東方に寶幢如來、南方に開敷華王如來、北方に鼓音如來、西方に無量壽如來あり。(三) 東南方に普賢菩薩、東北方に、觀自在菩薩、西南方に妙吉祥童子、西北方に慈氏菩薩あり。一切藥の中には、佛菩薩の母あり、六波羅蜜三昧の眷屬を以て而も自ら莊嚴す。下には持明の諸忿怒衆を列ぬ。持金剛手菩薩を以て、其の莖と爲して、無盡の大海に處せり。一切の地居天等、其の數無量にして、而も之を環の如く繞る。

爾の時に行者、三昧耶を成せんが爲の故に、應さに(三) 意生の香と華と燈明と塗香と、種種の香膳とを以て、一切皆な以て之れを獻るべし。優陀那に曰く、
(四) 眞言者誠諦に 曼荼羅を圖畫せよ 自身を(五) 大我と爲し 囉字を以て諸垢を淨む
瑜伽の座に安住して 諸の如來を尋念し 頂に諸の弟子に 阿字の大空點を

(二) 智者云云 瑜
祇灌頂なり。
自身云云 阿
闍梨の身上に投華
せしむるなり。

(三) 秘密八印品
前品に入住秘密漫
茶羅を説きしと雖
更に方便具足を説
き成就する法を説
かず、故に佛無問
自説し玉ふ、即ち
阿闍梨所行の印を
説く。

(四) 謂く云云 東
方寶幢佛の印なり
又は大威徳生と
いふ。

授くべし

(二) 智者妙華を傳へて (三) 自身に散せしめ 爲に内に見る所の 行人宗奉の處
を説くべし

(三) 秘密八印品第十四

爾の時に毗盧遮那世尊、復諸の大衆會を觀じて、執金剛秘密主に告げて言はく、佛子、秘密の八印あり、最も秘密と爲す。聖天の位、威神の同ずる所なり、自ら眞言道を以て標幟と爲す。具曼荼羅を圖すること、本尊の如く相應すべし。若し法教に依て、眞言門に於て、菩薩の行を修する諸の菩薩は、應さに是の如く知るべし。自身本尊の形に住して、堅固にして不動なり。本尊を知り已つて、本尊の如く住すれば、而も悉地を得べし。云何んが八印なる。(四) 謂く智慧三昧手を以て、空心合掌に作して、而も風輪と地輪とを散じて、火焰を放つが如くす、是れ世尊の大威徳生の印なり。其の曼荼羅は三角にして、而も光明を具せり、彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、嚩囉、莎訶。

國譯大毘盧遮那成佛神變加持經卷五

(一) 續字の形は圓形なり。
(二) 金剛不壞の印なり。方開敷華王佛の印なり。佛の智は金剛の如く破壊すべからざるをいふ。

(三) 蓮華藏の印にして西方無量壽佛の印なり。方は蓮華の心を開き、自心肉團心を開き、性清淨の心蓮花を蓮華藏といふ。蓮華藏と云ふ。北方天鼓雷音佛の印。此印に具する故に萬德莊嚴と云ふ。

(五) 一切支分生云云。東方普賢の印。如來の支分生ずる故に一切支分生と云ふ。一切は瓶の形なり。

(二) 陀羅尼の印。東北方觀自在の印。眞言の始めに勃駄陀羅尼とある故に世尊の陀羅尼と名

(三) 法住の印。西方南方文殊師利の印。具する所の智慧を以て他人に惠む故に法住と云ふ。此の印は今用ゐず。
(三) 迅疾持の印。西北方彌勒の印。法輪を左右に轉じて迅疾に成就す。故に迅疾持と云ふ。此の印は瓶の形なり。
(四) 如來秘密の印。如來秘密の印。第一は東方寶幢佛、乃至第八は東北觀自在菩薩の印。此の八印は毗盧遮

即ち此の印を以て、而も風輪を屈して、虚空輪の上に在て、(一) 續字の形の如くす、是れ世尊の(三) 金剛不壞の印なり。其の曼荼羅は續字の相の如くして、金剛光あり、彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、鑊、莎訶。

復初の印を以て、而も水輪と火輪とを散ず、是れを(三) 蓮華藏の印と名く。其の曼荼羅は月輪の相の如くして、波頭摩華を以て、而も之れを圍繞す。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、慘索莎訶。

即ち此の印を以て、二地輪を屈して掌の中に入る、是れ如來の(四) 萬德莊嚴の印なり。其の曼荼羅は猶し半月形の如し、大空點を以て之れを圍すべし。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、含鶴、莎訶。

復定慧の手を以て、未開敷華合掌に作して、二虚空輪を建立して、而も稍之れを屈す。是れ如來の(五) 一切支分生の印なり。其の曼荼羅は迦羅捨月の形の如し、金剛を以て之れを圍らすべし。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、暗、莎訶。

即ち此の印を以て、其の火輪を屈す。餘の相は前の如し。是れ世尊の(二) 陀羅尼の印なり、其曼荼羅は猶し彩虹の如くにして、而も遍く之れを圍らして金剛の幡を垂る。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、勃駄陀羅尼、娑沒囉底沫羅駄那羯囉、駄囉也薩鑊、薄伽嚩底、阿迦囉囉底、三麼曳、莎訶。

復虚空合掌を以て、火輪を開き散し、其の地輪と空輪と和合して相ひ持す、是れを

如來の(三) 法住の印と謂ふ。其の曼荼羅は猶し虚空の如くして、雜色を以て之れを圍ら

すべし、二の空點あり。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、阿吠娜尾泥、莎訶。

前に同じく虚心合掌にして、智慧三昧の手を以て、互に相ひ加へ持して、而も自ら旋らし轉す。是れを世尊の(三) 迅疾持の印と謂ふ。其の曼荼羅は亦虚空の如くして、而も青き點を用て之れを嚴るべし。彼の眞言に曰く、

南麼三曼多勃駄喃、摩訶瑜伽瑜擬寧、瑜指洗囉囉、欠若喇計、莎訶。

秘密主、是れを(四) 如來秘密の印と名く。最勝にして秘密なり、輒く人に授け與ふべか